

永観堂ホームページ

みかえり法話集 第1部

浄土宗西山禅林寺派
総本山 永観堂禅林寺

目次

永観堂禅林寺 ご本尊 みかえり阿弥陀如来さま	5
*** みかえり法話集 ***	5
佛さまとは 2003/07	5
いのちの尊厳 2003/10	5
人の心に宿る佛さまの慈愛 2003/11	6
尽きぬ煩惱 2003/12	6
お念佛の生活 2004/01	6
「自浄其意」(じじょうごい) 2004/02	7
心を浄める(自浄其意 その2) 2004/03	7
触光柔軟(そっこうにゅうなん) 2004/04	8
法爾道理(ほうにどうり) 2004/05	9
不能遠観(ふのうおんかん) 2004/06	9
悲智雙行(ひちそうぎょう) 2004/08	10
三学とお念佛 2004/09	11
無量寿佛の名をたもて 2004/10	12
阿弥陀さまのことをご存じでしょうか(その一) 2004/11	12
阿弥陀さまのことをご存じでしょうか(その二) 2004/12	13
阿弥陀さまのことをご存じでしょうか(その三) 2005/01	14
阿弥陀さまのことをご存じでしょうか(その四) 2005/02	14
往生について(その1) 2005/03	15
往生について(その2) 2005/04	16
往生について(その3) 2005/05	17

往生について（その４） 2005/06.....	18
往生について（その５） 2005/07.....	19
あらためてお念佛とは 2005/08	20
佛教における罪・悪・善とは 2005/09	21
佛教における罪・悪・善、そして懺悔とは 2005/10.....	22
私はいつも正しい？ 2005/11	22
私はいつも正しい？（その２） 2005/12	23
生かされて生きている歎きの念佛 2006/01.....	24
法然上人と今、すべてのいのち（その１） 2006/02.....	25
ものからこころの世界へ 2006/03	26
他力に目覚める 2006/04.....	27
願いに生きる 2006/05	28
今の私たちに求められること 2006/06.....	29
念佛は“いのち” 2006/07	30
この世に生きる 2006/08.....	31
自然そのものの中に 2006/09	32
欲望と幸福 2006/10	33
いじめについて 2006/11	34
父母孝養について 2006/12	35
法然上人と今、すべてのいのち（その２） 2007/01	36
お葬式に考えること（2007/02）.....	36
“安心（あんじん）”を得る（2007/03）.....	37
病は善智識（2007/04）.....	38
競争意識（2007/05）.....	39
いのちを全うする（2007/06）.....	40
佛法は人により伝わる（2007/07）.....	41
人間救済の意味（2007/08）.....	42
和顔愛語（2007/09）.....	43
念佛の信心（2007/10）.....	43
慈 悲（2007/11）.....	44

佛さまに全てをまかせる (2007/12)	45
お念佛について (2008/01)	46
法然上人とお念佛 (2008/02)	47
お彼岸によせて (2008/03)	48
往生と親縁 (2008/04)	49
佛の働き (2008/05)	49
法に依りて、人に依らず (2008/06)	50
お念佛の信 (2008/07)	51
生と死 (2008/08)	52
凡夫 (2008/09)	53
縁と無我 (2008/10)	53
苦悩の克服 (2008/11)	54
真理は一つ、教えは無数 (2008/12)	55
浄土に居(きょ)す (2009/01)	56
法悦(安心+起行) (2009/02)	57
現代の社会 (2009/03)	57
許すこと (2009/04)	58
お念佛のころ (2009/05)	59
浄土 (2009/06)	60
慈悲と智慧 (2009/12)	60
いのちの流れ (2010/04)	61
無分別の世界 (2010/05)	62
しあわせ (2010/06)	63
佛さまのはたらきの中に生きる (2010/07)	64
お念佛は感応道交 (2010/08)	65
今思うこと (2010/09)	65
願行具足 (2010/10)	66
懺悔(さんげ) (2010/11)	67
佛眼と成佛(その1) (2010/12)	67
佛眼と成佛(その2) (2011/01)	68

六神通 (2011/02).....	68
衆縁所生 (2011/03)	69
今思うこと(2011/04).....	70
人生の終盤に臨んで (2011/05)	71
心に戴く宝 (2011/06).....	71
精進努力 (2011/07).....	72
往生人 (2011/08).....	73
縁 (2011/09).....	73
こころ (2011/10).....	74
こころと信仰 (2011/11).....	75
信仰の姿 (2011/12).....	76
妄念とお念佛 (2012/1)	76
歌会始のお歌に思う (2012/2)	77
戒と信 (その1) (2012/3)	78
戒と信 (その2) (2012/4)	79
戒と信 (その3) (2012/5)	79
世情と宗教 (2012/6).....	80
法話とは (2012/7)	81

永観堂禅林寺 ご本尊 みかえり阿弥陀如来さま



自分よりおくれる者たちを待つ姿勢
自分自身の位置をかえりみる姿勢
愛や情けをかける姿勢
思いやり深く周囲をみつめる姿勢
衆生とともに正しく前へ進むためのリーダーの把握
のふりむき

真正面からおびた嬉しい人々の心を濃く受けとめても、なお正面にまわれない人びとのことを案じて、横をみかえらずにはいられない阿彌陀仏のみ心

* * * みかえり法話集 * * *

佛さまとは 2003/07

南無阿彌陀佛

一切の人々や物事に別け距（へだ）てなく、平等に注がれる大慈悲心は、抑（そもそも）私たち只（ただ）の人の持ち合わせていないものです。

佛さまとは、この万人を摂(おさ)めとってやまない暖かい心の働きのことです。この暖かい心の働きに触れて心の健康を恢復(かいふく)した人は、この働きかけを薬師如来とか医王如来と呼び、この働きに触れて心が安まり、物事の本質を見抜く澄んだ心(智慧(ちえ))を授かった人は、その働きを文殊菩薩とか勢至菩薩などという名で呼んだのです。

佛さまとは、私たちにとって、向こう側にある対象でなく、この私に働きかけて救いとってくださる大慈悲心の働きなのです。合掌

いのちの尊厳 2003/10

南無阿彌陀佛

いのちの尊厳について、いのちの大切さについて、常に教え続けられているはずです。しかし、いのちの軽視の傾向は、いささかも改まりそうにありません。

私のいのちはいつ生まれたのでしょうか？もしこの世に生命が誕生していなかったならば、私のいのちもまたないわけですから、地球上の生命の誕生が即ちわがいのちの誕生と考えられるのです。阿弥陀さまの久遠成佛以来の、生きとし生けるもののいのちの流れ、その滔々たる悠久の流れの中

で、自己のいのちは微小な点にすぎませんが、この大河の流れの中に私のいのちも合流させて頂いているのです。

あらゆるいのちは、阿弥陀さまのみ光の中です。その光を受けて、少なくとも光ることができるはずです。自分が光らないのは、光りの働きにめざめていないからです。よびさまされると、み光りの中で光っているこの身だと知らされます。また他のいのちもそれぞれに光っているのだと気づかされます。なんの功績もない、とりえもないと卑屈になることはありません。自らは光れないのですが、阿弥陀さまのみ光を受けて、この身ながら輝いているのですから。

今、生きているいのちをよびさます、久遠のいのちにめざめなければなりません。他人のいのち、自分のいのちに、静かに合掌することが教えられねば、いのちの尊厳を伝えることはできないのです。

合掌

人の心に宿る佛さまの慈愛 2003/11

南無阿弥陀佛

私たちは苦悩と悲しみの中で日々暮らしています。阿弥陀さまはどんなことがあろうとも私たちを決して見放されず、苦悩のまま限りない悲しみのままに私たちを抱擁してくださっています。佛さまの大慈悲心は人の行動や言葉を通して人に伝わるのです。人の心に宿って、大慈は人から人へ伝わります。

消えることのない幸せと喜びは、全て思いやりから生まれます。思いやりがあればこそ良心が生まれます。良心があればこそ他の人を助けたいという気持ちで行動できます。このように大慈は、人の心に宿る佛さまの慈愛なのです。人は佛さまではないのですが、佛さまの智慧・慈悲を運ぶ器になれるのです。

合掌

尽きぬ煩悩 2003/12

南無阿弥陀佛

私たちは他の人を省みず、自分だけが可愛い念があり、自分勝手に利己主義で我儘いっぱいです。そして、我儘が強いから苦しみや悩みが出てくるのです。いけないことだとわかっていても止めることができないし、わかっていても正しいことができなかったり、正しくないことをやっちゃっているのです。全てが自分のために存在しているのではないのだから、当然のことのはずなのに自分の思い通りにしたいと思ってしまうのです。

「欲深くて、怠け者」の自分を常に戒めても、「掃けば散り 払えばまたも塵つもる 人の心も 庭の落ち葉も」というように、煩悩からはなかなか離れられないのです。

煩悩は生きている限りなくならないものと諦め、自分自身を甘やかさないで、「いのち」の不思議さ、尊さ、そしてかなさを知り、今日一日を大切に生きていただきたいと願うのです。

合掌

お念佛の生活 2004/01

南無阿弥陀佛

お念佛の生活というのは何か特別なことをするのではないのです。今日一日、自分がこうして仕事をしているということは、多くの人に助けられ、自分が仕事をさせて頂いていることの確認なのです。

自分の周囲の人々や自然との命の触れ合い、共に生き生かされる世界の中で、自分に目を向けるだけでなく、他の人々にも目を向けていく気持ちを持って、あらゆる面に私たちは合掌し、感謝の念を持ち続けていかなければならないのです。一生涯お念佛の生活なのです。

人生には余生と引退はないのです。

合掌

「自浄其意」（じじょうごい）2004/02

南無阿弥陀佛

「自浄其意」の「其」は、良し悪しにこだわる心です。私たちは、日常物事を二つに分けて、都合の良いほうを採って、都合の悪いほうを退けて生活しています。自分の好き嫌いを中心にして生活しているのです。（自分中心の生活）そういう善悪にとらわれている「意」を自発的に浄める。「その意を浄める」の「その意」とは、人の心に宿る良し悪しを分別して都合の良いほうを採り、都合の悪いほうを斥けるという二元分別の意のことです。「浄める」とは、これを浄化することです。

自分の嫌いなものは退けようと思いますが、人生には自分が嫌いな人に助けられて、いま現に自分が生きているということがあります。嫌いなものを切り捨てたら、より自分が楽になるかというと、結果的には自分を不幸にすることになりがちです。良し悪しでのみ生きていると、肝心なものを消してしまうことになるのです。

佛教が佛教であるゆえんは、倫理・道徳を超える道が重要だと指摘されたことなのです。私たちの日常生活において、心が占める位置をはっきりと指摘したのは佛教です。佛教はこの教えに集中されていて、どの宗教の教えでも良く味わってみますと、ここに帰着するのです。自分で自発的に、自分の善悪に執われ、敵味方に執われ、損得に執われている心を浄める。浄めるとは「超える」ということです。それが佛教なのです。超えるということはどういうことか。これは良いことか悪いことか、敵とか味方とか、都合が良いとか悪いとか、得とか損とかいうことにこだわらないことです。世界と一体になった心で生きる、それを教えるのが佛教なのです。

合掌

心を浄める（自浄其意 その2）2004/03

南無阿弥陀佛

私たちは日々の生活において、物事を二つに分けて都合のよいほうを取って悪い方を退けて生きがちです。自分の好き嫌いを中心にして生活しているのです。自分の嫌いなものは避けようと思いますが、人生では自分が嫌いな人に助けられて、今の自分が生きているということがあります。自分の嫌いな人が、自分の生きることを助けてくださっているという側面があるのです。これは人生の大きな、そして冷厳な事実です。

嫌いなものを切り捨てたらより自分が楽になるかというと、結果的には自分を不幸にすることになりがちです。好き嫌い、良し悪しでのみ生きていると、肝心なものを消し去ってしまうことになるのです。

私たちの日常生活で、心の占める位置をはっきりと指摘したのは佛教です。佛教はこの教えに集

中されていて、どの宗派の教えでもよく味わってみますと、この教えに帰着するのです。自分の好き嫌いにとらわれ、善悪にとらわれ、敵味方にとらわれ、損得にとらわれている心を、自分で自発的に浄める。浄めるとは「超える」ということです。それが佛教の教えなのです。

超えるとはどういうことか？これは良いことか悪いことか、敵とか味方とか、都合が良いとか悪いとか、得とか損とかいうことにこだわる心を脱却することです。世界と一体になった心で生きる、それを教えるのが佛教なのです。 合掌

触光柔軟（そっこうにゅうなん）2004/04

佛さまを拝みますと、その智慧の光によって自然と顔がほころび、頭の天辺から足の先まで柔らかくなります。これを「触光柔軟」といいます。

人の思いはどこへでも行くことができますが、どこへ赴こうとも自分より愛しいものを見いだすことはできません。また、他の人々も自分はこの上なく愛しいのです。自分の愛しいことを知る人は、他の人々を害してはいけません。しかし、頭が固いとこのことに気付かないのです。

頭が柔らかくなると、相手の立場を理解して受け入れる広くて、柔らかくて謙虚な心が生まれるのです。顔が固いと人に不安感を与えますし、口にする言葉も厳しくなりがちです。しかし、顔が柔らかいと人に安心感を与え、出てくる言葉も優しくなるのです。心が固いと他に冷たく、柔らかいと他に温かいのです。

三垢とは三つの垢、貪欲、瞋恚(しんい)、愚痴の煩惱のことです。佛さまの智慧の光に包まれますと、私たちの煩惱は転じて喜びの心に生まれ変わってくるのです。そして自然に心身共に柔軟になるのです。「柔軟」とは我執を離れること、執着しないという意味で、相対する二つのもののどちらにも執られず、常に支え合って溶け合って一つのもののように受け取ることをいいます。日々、生き生きと流れることによって、物事に固執したりとどまったりしなくなるのです。

自分の生き方を見つめ、その愚かしさや欲望の深さを認めて、自分の対極にあるものの尊さに気付く時、真の命の喜びを頂くのです。みずみずしい生命(いのち)を生きることができるのです。佛さまの智慧を頂くことができれば、柔軟なものの考え方をすることができ、この煩惱の世の中にあっても明るく生きることができるのです。

『無量寿経』から

「設我得佛 十方無量不可思議、諸佛世界衆生之類、蒙我光明、触其身者、心身柔軟、超過人天。若不爾者、不取正覺。」

(たとい、我佛となるを得るとき、十方の無量・不可思議の諸佛世界の衆生の類、わが光明をこうむりて、その身に触れなば、心身柔軟して、人・天に超過せん。もし、しからずんば、正覺を取らじ。)

「其有衆生、愚斯光者、三垢消滅、身意柔軟、歡喜踊躍、善心生焉。若在三塗勤苦之处、見此光明、皆得休息、無復苦惱、壽終之後、皆蒙解脫」

(それ衆生有りて、この光に遭うもの、三垢、消滅し、身意、柔軟にして、歡喜踊躍し善心生ず。もし三塗の勤苦の処に在りて、この光明を見たてまつれば、みな、休息を得て、また苦惱なく、壽終

わりて後、みな、解脱を蒙る。)

法爾道理（ほうにどうり）2004/05

人生の中で常日頃本当の眼を開いてゆくためには、この娑婆世界に生き、苦しみ、そして悩む多くの人々とのご縁と人生の善智識が必要です。自分の足元を着実に見つめて、これで良いのか、間違いはないのか、大丈夫なのかと、自分の日暮を点検しなければいけないのです。そういう生き方が佛道(菩薩の心)なのですが、私たち凡夫には難しいのです。そこで、お念佛の教えがあります。思い煩いの日常生活の中で、私たちがお念佛をどのように受け取っていくべきかを示されたものの一つが、「法爾道理」なのです。お念佛の教えでは、人間の浅はかな計らい—自己中心的、自己保全的な自分を中心とした行動—を捨てて、大いなるお慈悲に、お任せする自然な気持ちを「自然法爾」と云うのです。

お釈迦様以来、佛教を伝えてきた人は佛教信仰に生きた無数の、しかも名も知れない多くの人々なのです。佛教を学ぶと云うことは、佛教の理論を学ぶことではなく、「佛智の世界」を我が身の上にしっかりと戴き、安心を得る術(すべ)を学ぶと云うことに尽きるのです。佛様の心が持てればそれに越したことはないのですが、持っている力が限られた凡夫にはとても出来ないことと自覚し、佛様のお慈悲に自他共に頼ることを勧めるのがお念佛の教えで、浄土門というのです。

法然上人は、自力の信と云うものは流転し永続する保証はないことから、自力の菩提心を否定されたのです。拝むこと、合掌すること、頭が下がること、口からお念佛が出ることは、人の上に現れた佛様のお働きで、「他力」なのです。そうしたことを「自然」だと云われるのです。法然上人は、本当にそのお慈悲がお解かりになり、阿弥陀様に救われたと云う実感をお持ちになってから、そのお慈悲について説いてみようとなさったのですが、

『まこと大悲誓願の深広なること、たやすく詞をもてのぶべからず。心をとどめて思うべきなり。』

阿弥陀様の私達全てを救おうというお誓いとお慈悲のみ心の深く広いことは、たやすく口では言えない。だからじっと心の中で味わってみるべきである、と仰せになりました。阿弥陀佛の大悲誓願の深さ広さは、各自がじっと心の中で味わい噛み締めるより外ないと思われたお言葉なのでしょう。私達が一生涯お任せして間違いないもの、自分が忘れていた時にも私を支えていて下さる力、それは自分で掴み取るものではなく賜るものなのです。私達は自分らしく、堂々と人生を実りあるものにする力と情を佛様より賜っているのです。

「法爾道理」と云う事有り。炎は空に昇り、水は下りさまに流る。菓子の中に酸き物有り、甘きもの有り、これらは、みな法爾道理也。阿弥陀、ほとけの本願は、名号を以て、罪惡の衆生を導かんと誓い給たれば、只一向に念佛だにも申せば、佛の来迎は法爾道理にて、備わるべき也。『百四十五ヶ条問答』(法然上人)

不能遠観（ふのうおんかん）2004/06

人間が人間として、協力して生活していくには、共通の価値観やルールが必要です。自分さえよければ他人のことは関係ないという自己中心的な生活は、何にも束縛されず自由に素晴らしいよう

に見えますが、実は孤独で、窮屈で、不自由な生活を送らなければならないのです。

生きている間だけがすべてで、死んでしまえば何もかも無くなってしまふ、それで終わりという風潮が蔓延しています。寿命が終わってから、生前の原因に起因する結果を受け取らなければならないことがあることを、今の人は意識していないように見えます。自分がつくった原因は、その結果を自分で受け取らなくてはなりません。誰も代わってくれないのです。しかもあなたのために苦しまなければならない人が居るのです。

私たち凡夫は、自分だけは大丈夫、自分だけは間違いない、間違っているのは世間であり、あの人の、この人は困りものだ、人を非難し、自分自身の本当の姿を観る目が無いのです。だから、実はつらい苦しい人生を歩んでいることすら気付かないのです。

凡夫の自覚を持つことによって、ハンドルをしっかりと握り、ブレーキをかけ、ミラーを確認し、前方を見つめて安心生活を送ることが出来るのです。

「不能遠観」の意味するところは、次のように言えるでしょう。

ただの人は肉眼で遠近をよく観ることすらできないのです。自分のつくった原因で起きる結果などわかる道理がありません。まして、大いなるもの即ち阿弥陀さまの浄土は遙か彼方です。どうして観ることなど出来るのでしょうか。浄土は、自分は愚かでただの凡夫であるという自覚が出来たとき、佛力によって観ることが出来るのです。

如是凡夫 心想羸劣 未得天眼 不能遠観

(汝これ凡夫なり。心想るい劣にして、未だ天眼を得ざれば、遠く見ることあたわず) 『観無量寿経』

悲智雙行（ひちそうぎょう）2004/08

佛教では、私たちの心を真理に目覚めさせる働きを「智慧」と云います。また「慈悲」は苦を抜き、楽を与える心の働きのことをいいます。お釈迦様は、徹底した現状認識から問いを發し、悟りを得る道に出発されたのです。お釈迦様は、人間は矛盾した仕組みの中でしか生きることができないという事実を認識され、この娑婆世界全体を掌握する洞察力即ち人間の心を真理に目覚めさせる働きを「智慧」と呼ばれたのです。また娑婆世界に生きる人間の心の煩いを除き安心を与える佛さまの働きを「慈悲」と呼ばれました。

では、私たち人間はどのようにして「智慧」を授かるのでしょうか。もともと智慧は、すべての人の心の中に生まれながらにして備わっているのですが、人間の心の煩いのためその働きが弱いのです。佛さまの「慈悲」に出会い、触れることによって私たち人間の心が静かになり、智慧が強く働くようになるのです。私たちの智慧の原動力は佛さまの「慈悲」なのです。私たちの智慧が強く働きますと、私たちの心に優しさと哀れみが生まれます。これが私たち人間の慈悲で、良心や思いやりの心なのです。智慧が強く働きかけると、その分慈悲も深まります。慈悲は智慧の深まりと連動しているのです。

いろいろの煩悩のため自分を縛り、迷いの世界に入り、自己破綻に陥っていた身が、「慈悲」に触れ智慧を授かることで解放されるのです。また、自分を善とし、自分のみを頼りにして、周囲の人々の善意を知らず不足にばかり思っていることを「我執」といいますが、智慧によりこの我執からも離れることが出来るのです。佛さまの「慈悲」に触れ、人間の智慧の働きが強まることで我執が解消

し、心が純化して、慈悲の心が自由に活動し、これらが相互に働きかけ深まっていくのです。

お念佛の道も、念佛三昧というように、念佛生活の間に、いつでも・どこでも・だれでも、心の波立ちがだんだんと修まるようになっているのです。念佛には、絶えず動揺し散乱して落ち着かない心で過ごしている我々を、すばやく三昧の境地に導く仕掛け、即ち「智慧」を授かる道がちゃんと備わっているのです。

三学とお念佛 2004/09

智慧第一と称せられた宗祖法然上人は、ご自分のことを「戒」・「定」・「慧」の三学全く備わず、愚痴の法然房と仰せられました。

佛教では「正しく知る」という智慧が強調されます。法然上人のように心の定まった人はこの三学を学び、修行することができるでしょう。しかし、上人ご自身は「全く備わず」と言われ、ましてや心の散じている我々凡夫には難しいのです。そこで、只の人である我々が三学を備えうる道として、お念佛の教えがあるのです。

戒:どうかすると乱れやすい生活を整え、積極的に念佛生活の中で生きていく上で、自ら立てる生活規範が「戒」なのです。否応なしに守らねばならない規律ではありません。

定:お念佛を続けるうちに自然と「戒」が整い、心が散じて瞑想のできない凡夫も自分自身を静かに見つめることができるようになります。これが「定」なのです。

慧:お念佛を申すことによって自然と「定」が整い、ありのままの自分の姿、自分の都合で見ている世の中の姿が次第に明らかになってきます。これが「慧」なのです。

お念佛の教えは、阿弥陀佛の「慈悲」・「智慧」を離れて語ることはできません。お念佛を申し続けると、自分の分に応じて生活の加減を知り、「優しい心」、「慈しみの心」が自然と起きてきます。自分の力によらず正しく世の中を歩み続けるための「慈悲」と「智慧」を自然と授かるのです。欲に引かれ好みに捕らわれている人は、執着したもののために悲しみ、苦しみ続け、どうしても自分の偏見を超えることはできません。

皆様もお念佛を申すことによって、三学を修め自然のはからいをそのまま知り共に生きていく願いに目覚めて頂きたいのです。

参考

【三学】:佛道を修行する者に必修とされる最も基本的な修行をいい、戒学、定学、慧学の三つをさす。

戒:悪をとどめ、善を修すること。

定:心身を静かにして心身統一を行い、雑念を払い思いが乱れないようにすること。

慧:静かになった心で正しく真実の姿を見極めること。

この不即不離な三学の兼修が佛道の完成をもたらすとされる。規律ある生活を営み、そして心が落ち着いて、そこで正しい世界観が持てるようになる。

中村元著『佛教語辞典』より。

無量寿佛の名をたもて 2004/10

お経には、私たちにこの世を生きる意味と生きるための力を与えてくれる深遠な教えがあります。この世を生きると簡単にいうものの、実際は一筋縄ではいきません。老いること、病むこと、死ぬこと。誰も避けることのできない事柄を、どう受け止めるかが肝要なのです。み佛の教えに、生きてきたなら簡単に生きてよし死してよし、などといひます。生死一如というものの、信仰があるから生きられるし死にたくないけれども死んでいける、果たしてそれほど簡単なことでしょうか。

多くの人々は、自分の思惑や考え方、好みに合わせて佛教を取り入れ、自分の都合のいいようにみ佛の教えを解釈しています。自分にとって嫌なこと、起こって欲しくないことは避けて、み佛に家内安全、商売繁盛、延命息災、学業成就など現世にとらわれた一時しのぎの願い事をし、自分の幸せを約束してくれるものだけを受け入れようとする生き方、まさにこれにあたります。

念佛はこの凡夫である私たちが阿弥陀佛に抱かれる唯一の方法です。み佛の教えによって、幾多の先人が人生を歩む道を作っていて下さいます。日々に唱える念佛は阿弥陀佛の「大悲」に至る道標であり、人にこの道を歩み出させ、目的に向かって一步一步と歩ませる力なのです。私たちには苦しい、悲しい、つらい現実があり、日常の生活に追われて目先のことに心を奪われがちです。しかし、阿弥陀佛の「大悲」とは「なるほどそういうことか」と気づいた時から、この厳しい現実を生きていく力を得て、預かったわが命一杯に生きようという新たな人生が始まるのです。

阿弥陀佛の根本の「願い」に出会って、私の心のあり方、私自身の姿、そして人生というものの事実をありのままに知り「なるほど」とうなずく時、私たちは念佛と共に人生の道を歩むことができるのです。そもそも「お念佛の生活」とは「大悲」にであい「佛智」を戴いて、私の我執に気づくことから始まります。そして日々の生活の中でお念佛を唱え阿弥陀佛の御名をたもつことによって、そのような私を見守り続けて下さるみ佛の「願い」を喜び、自分のすべてを任せても間違いないものがあることを有り難いと思いつつ寿命一杯に生きることができるのです。

【参考】

如好持是語 持是語者 即是持無量寿佛名 『観無量寿経』

(汝よ、好くこの語をたもて。この語をたもてとは、即ちこれ、無量寿佛の名をたもてとなり)

なお、無量寿佛は阿弥陀如来のことで、無量光佛とも呼ばれます。

阿弥陀さまのことをご存じでしょうか（その一） 2004/11

私たちは心を煩わし身を苦しめる煩惱にとりつかれ、それらから逃れられない日々を送っています。人々が自分自身の内には様々な煩惱を持ち、外には風雨寒暑のある中で生活している処を娑婆といひます。娑婆世界では人々の数だけの思いがぶつかり合い、それぞれが四苦八苦しています。人々はそれぞれの思いと判断で善し悪しを決め、自我意識に生きています。その姿を見かねて大いなる慈悲の働きかけで特別の願を發されたのが阿弥陀さまなのです。私たちの煩惱の苦しみはとりもなおさず阿弥陀さまの苦しみであり、私たちが苦しむ姿はそのまま阿弥陀さまが佛となれる道のりなのです。

欲深く怒りにとらわれる愚かな私たちを救うために、阿弥陀さまは「五劫思惟」(特別の願のために考えも及ばないほどの長時間を要する修行)され、四十八の特別の願(四十八願)をおこされまし

た。わが宗派では、その中の第十八願「たとい、われ佛となるをえんとき、十方の衆生、至心に信樂（しんぎょう）して、わが国に生まれんと欲して、乃至十念せん。もし、生まれずんば、正覺（しょうがく）を取らじ。ただ、五逆（の罪を犯すもの）と正法（しょうぼう）を誹謗するものを除かん」を、王本願（おうほんがん）と名づけて根本の別願として戴いています。私たちに自力修行を求めず、阿弥陀さまによる徹底した他力救済の別願なのです。煩惱に深く覆われて、未だ悟り得ない私達がただ「南無阿弥陀佛」と名号を称える念佛による救済なのです。

阿弥陀さまは煩惱に苦しむ私達をただ単に哀れんで願を発されたものではありません。真如の法（宇宙すべてに備わる永久不変の真理）を自らの修行で悟ることのできない私達すべてになりかわって、やむにやまれず願を発されたのです。

阿弥陀佛

無量なる佛という意。いのちと光きわみなき佛。西方浄土、極楽世界にあつて今現在法を説いている佛。永遠に救いを与える佛。

中村元著 『佛教語大辞典』より

阿弥陀さまのことをご存じでしょうか（その二） 2004/12

阿弥陀さまとは具体的にはどのような性格や特色を持った佛さまなのでしょうか。

この宇宙が現出して人がこの世に存在しはじめた時から、私たち人間が必ず煩悩に苦しむことになるのは必至でした。たとえば、人が困難に直面したときによく使われる「四苦八苦」という言葉があります。これは、「人生は苦である」という仏教の基本認識を表す言葉です。四苦とは、生老病死（しょうろうびょうし）の四つの苦のことです。八苦は先の四苦と、愛別離苦（あいべつりく）、怨憎会苦（おんぞうえく）、求不得苦（ぐふとくく）、五蘊盛苦（ごうんじょうく）の四苦を合わせたものです。これらは私達にとって不可避なものであり、意識の上において矛盾対立し思い煩うが故に「苦」なのです。しかし、私たちが生きるとはそういう苦悩の中で生きることなのです。その為に、そして原初から、佛さまのはからいで我々の苦悩を解決する理（ことわり）があるのです。その理の徳と性格を持った佛さまを阿弥陀さまと名付けて呼ぶのです。

本来、阿弥陀さまは宇宙に存在する一切のもの、すなわち凡人も聖人もわけ隔てなく人の五官で感じられるものすべてに遍在しています。しかし、煩悩に深く覆われた私達には、せっかく佛となる性（たね）として宿っていても見ることも知ることもできないのです。ただ私達にわかる阿弥陀さまとは四十八の本願を成就され、私達を間違いなく西方浄土へ迎え入れる働きをされる方なのです。

では、阿弥陀さまと他の佛さまの違いは何でしょうか。諸佛はそれぞれ総願を発して自ら佛となるために修行をされたのですが、阿弥陀さまは私達に成り代わって修行されたのです。したがって、阿弥陀さまの本願が成就しているということは、私達が西方浄土に間違いなく往生できるということなのです。

「佛さまは一切の衆生の心相に入りたまう」とあります。私達が佛さまを憶いますと心の中に姿を現されます（影現）。それが心の中にはっきりと刻み込まれます（想念）。自分の力の限界を知った時、私達は阿弥陀さまの方から私達を見放されず追いかけて下さっていたこと、そしてその時までそれに気づかず彷徨い続けていた自分に気付くのです。

阿弥陀さまが本願を発して佛さまになられ、極楽浄土を建立された謂われを思わず肯き理解

(領解:りょうげ)することが、わが宗派のお念佛の信仰なのです。

阿弥陀さまのことをご存じでしょうか（その三） 2005/01

今回は阿弥陀さまの救済の姿をどのようにとらえるか、また南無阿弥陀佛という名号をどのように受け止めればよいかについてお話します。これは、いわゆる十悪の私たちの西方極楽浄土に往生したいという一心の想い(帰命の心)をおさめ取って正覚(願を成就し悟りにいたる)した阿弥陀さまの功德の顕れをどのような姿として受け取るかなのです。

一般に、佛教で説く佛さまの相(すがた:佛身、佛体)には法身、報身、応身の三身があります。法身は真理そのもので理性です。このため、すべてに平等で差別がなく、具象的な相があるものでもありません。従って私たちには覚知することのできない相なのです。報身は、自ら佛となるために修行して真理を悟った佛の功德を象徴した相です。応身は法を求める私たちに応じて具体的な姿を持って説法する佛さまの相(具体的にはお釈迦さま)です。私たちの目は応身の佛さしか見ることができません。

では、阿弥陀さまの相はなんのでしょうか？ じつは阿弥陀さまの相は報身なのです。しかし、単なる報身ではありません。阿弥陀さまの佛体は、私たち衆生が西方浄土に往生する道理を成就されすべての衆生を受け入れ、救い、絶対に捨てることのない(摂取不捨)大いなる慈悲心の象徴なのです。ところが私たちはこのことを頭で理解できても目に見えないため、どこか捉えどころがなく安心できません。このため報身の阿弥陀さまを人格化して、だれにも解りやすい絵像や木像とし、なおかつ安堵できるような微笑みをたたえた慈悲心あふれるお姿で表現しているのです。

また、阿弥陀さまは自らの正覚の功德の相を「南無阿弥陀佛」の六字の名号として表されました。したがって、名号と佛体は同じもので二つのものではないのです(名体不二)。「南無」の心をおこすとは、一生涯かけて自らの全生命をもって阿弥陀仏の佛体に帰命することなのです。私たちは欲・怒り・愚かさのためこの命を惜しんでいます、阿弥陀さまは真実に信心をおこさない低下の私たちになり代わり行をまっとうされ正覚されています。この阿弥陀さまの行と私たちの往生を願う心が一つになることを「願行具足」といいます。私たちは念佛をとおして阿弥陀さまの徳を知ったとき、浄土往生の願いが自然とおこり自らの命を任せきった心となり、阿弥陀さまの相を感じ取り、そして佛心と一つになることができるのです。弥陀超世の願のほかに私たちが救済される法はないと知ること、これこそ帰命の極致で歓喜のお念佛なのです。

＊『西山のおしえ』より＊

【十悪】

殺生(せつしょう) 偷盗(ちゅうとう) 邪淫(じゃいん) 妄語(もうご) 綺語(きご) 悪口(あつく)
両舌(りょうぜつ) 貧欲(とんよく) 瞋恚(しんに) 愚痴(ぐち)

阿弥陀さまのことをご存じでしょうか（その四） 2005/02

今回は私たちが、阿弥陀さまが本願をおこして佛さまになられ極楽浄土を建立されたいわれを戴くことができたときに、何をなすべきかについてお話します。

まず、私たちは寿命一杯生きたならばこの世で何をなしたかは一切関係なく、すべて浄土に生まれることができます。だからといって生きている間は何をしてもいいということではありません。浄土

三部経の一つ『観無量寿経』には、私たちが浄土に生まれるには九段階(九品:上品、中品、下品と上生、中生、下生の組合せ)の区分があると説かれています。これは人間に九種類の区分があるという意味にとるべきではありません。相対的とか絶対的なものでなく、自分自身の中に九つの願望があるとみるべきなのです。

法然上人には、源平の戦で平家の少年武将、平敦盛を切らざるを得なかった熊谷直実というお弟子がありました。法名を蓮生(れんせい)と言います。誰がみても下下(下品下生)の蓮生が、人々を救うために再びこの世に生まれるには上品上生の往生しかない、と誓いを立てたのです。一人残さず、一人も漏らさず浄土に迎え入れるには、上品上生の往生を願うしかないという蓮生の決意は身のほど知らずの誓いかもしれません。しかし、このことは蓮生自身が救われたことを実感していたからできた誓いなのです。自分と同じように迷っている現世の人々には是非とも法然上人のお念佛の教えを伝え、極楽浄土に往生させたいがために、もう一度この世に生まれかわりたいと願ったのです。私たちは、九つの願望の中で一番佛さまに近い願いに向かって自分自身を高め向上していかなければなりません。

もし私たちが人や人の心を傷つけたり、共同生活を損なったりするようなことをしたならば、その罪科を悔い改め反省をしなければなりません。人は罪業を犯せば畜生に生まれかわったり、地獄に堕ちたりするという「六道輪廻」という言葉があります。六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上)も実は自分自身の中にあるもので、決して他人が作るものではないのです。自分自身の三業(身、口、意)の行いが常に心を揺れ動かし、地獄を生み出し、そして餓鬼や畜生の苦しみを生んで、自分自身で六道を輪廻しているのです。

人間らしく生きるということは、上品上生や天上界を目指しつつも三業に振り回され、喜怒哀楽を素直に表し、いつも通りになっていて少しも進歩していない自分に気づくことにあります。そして、三業を慎み、阿弥陀さまの大きな計らいの中に生きていることに気づき、感謝し、喜びに満たされた日々を送ることにあります。現実の生活の中では理屈はどこまで言っても理屈にすぎません。信心に裏付けられた行動を伴うことができこそ、その理屈が尊いのです。

【参考】三業(身、口、意)

身に行うこと、口に言うこと、心に思うこと。この三つで一切の生活活動が尽くされる。すなわち、あることをしようと意志するのが意業、それが身体的行動に現れるのが身業、言語表現に現れるのが口業。『佛教語辞典』(中村 元)

往生について(その1) 2005/03

これまで四回にわたって阿弥陀さまについて述べてきました。今回からは「往生」についてお話しします。

往生という言葉は、今では単に死の意味で用いられており、さらに転じてじたばたしないこと、処置に困ること、閉口することなどに用いています。もともと往生という言葉は輪廻(りんね)すること、生まれ変わることを云い、極楽のみならず地獄に行くことも意味します。しかし、浄土の教えが広まってからは阿弥陀佛の西方浄土に往生生まれることを指し、これが一般的になっています。

輪廻は佛教が興る以前からインドに伝わるバラモン教(ヒンズー教)の死生観です。一切の人はその生を終えると、他の世界に行き次の生を受けると考えられていました。それはあたかも車輪が果てしなく回るように、様々な世界を生まれ変わり死に変わって際限なく続く(輪廻転生、流転)と

います。当時の人々はこの死生観に大変な不安と恐れを抱いていて、自分は死後どのような世界へ往って何に生まれ変わるのか、またその生においてどのような苦しみや悩みを受けるのかと思い悩みました。

佛教にも輪廻の思想がありますが、佛教の輪廻は迷いの世界をいい三界六道(三界:欲界・色界・無色界、六道:地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)に生死を繰り返すことを云います。佛教では、あらゆる人々の存在の有様を「惑」(煩惱、迷い)、「業」(身、口、意のなす一切の行為)、「苦」(思い通りにならないこと)の連鎖とみます。「惑」が「業」を起こし、その「業」が「苦」を生み、この「苦」が新たな「惑」となり、別の「業」を起こして「苦」を生むというように、絶えず繰り返し、いつまでも迷いの世界につなぎ止められ、苦悩から解放されることがないと見るのです。佛教はこれらの煩惱を断ち切ることによって、この連鎖を脱し絶対安住の境地を得ることを教えるのです。

その一つが浄土の教えです。衆生を平等に一人も洩らさず救済することを自身の本願とし、それを成し遂げるべく修行をされた阿弥陀佛によって衆生は浄土に往生できるという教えです。

一般に「往生」は「死」と関連づけて話されますが、本来の迷いの世界という観点から見るとその意味するところは大変奥深いものがあります。次回からその意味するところを少し掘り下げてお話しします。

【参考】

往生: 生まれ変わる事。他の世界に生まれる事。輪廻すること。死後に地獄に生まれる事。

輪廻: サンスクリット語「サンサーラ(流れる)」の訳。流転ともいう。インド古来の考え方で、生死を繰り返すことを云う。佛教では迷いの世界で三界六道に生死を繰り返すこと。

衆生: この世に生をうけたもの。生きとし生けるもの。

『佛教語大辞典』(中村元著)参照

往生について (その2) 2005/04

前回、往生とは「輪廻すること、生まれ変わる事」が元々の意味であることを述べました。これが人々の死と深く関連づけられて説かれるのはなぜでしょうか。私どもの宗派でも人の臨終と関連づけられた往生として「当得往生」が説かれています。

私たちが住むこの世は時代や場所がいかにも変わっても、私たちが持っている「自分の思うようになればよい」という欲望は絶対に捨てきれないのです。前回お話をしましたように人々は〈惑〉〈業〉〈苦〉の繰り返しの中でその日その日を送る生活から抜け出せず、濁りに満ちた世に過ごしています(五濁:ごじよく)。私たちはこの世を生きる限り欲望を根本とする煩惱から派生する苦悩から逃れることが出来ません。このためこの世を穢(けが)れた世界として遠ざけ、二度と希求しないところとするのです(厭離穢土:おんりえど)。そして、その苦悩が二度と起こらない、清らかな世界即ち西方極楽浄土へ往生をすることを願うのです(欣求浄土:ごんぐじょうど)。しかし、今現在を生きる私たちの多くはその生涯において、修行をして正覺に達することはまず不可能でしょう。阿弥陀佛は、そのような私たちを来世において西方極楽浄土に生まれさせ佛にならせるのです。「往生」ということが阿弥陀佛の願われる行為として意義を持つようになったのです。その行き先も本願成就の浄土と定まり、往生の時期も、今生ではなく来世に於いてであると定まったのです。

阿弥陀佛の西方極樂浄土への往生については、私たちには何の条件もありません。しかし、私たちが阿弥陀佛の計らいで必ず浄土へ往生できることを領なずくことが出来たなら、煩惱を持ったままこの世をいかに生きるかを考えなくてはなりません。私たち浄土宗のお念佛では、「三心」を発しなさいと教えるのです。「三心」とは至誠心(しじょうしん:嘘偽りがなくあるがままの飾ることのない真実の心)、深心(じんしん:深く信ずる心)、回向発願心(えこうほつがんしん:阿弥陀佛の本願力に乗じて往生できることを常に願うこと)をいいます。

では、深心とは何を深く信ずるのでしょうか。一つは自分の日々を顧みて、罪や悪事を重ねながら迷いの日暮をしその中に埋没し流されて、一度として迷いの生活から抜け出る機会にめぐり合うことがなかったと深く信ずること。そしてもう一つは、阿弥陀さまが、ただ単に煩惱に苦しむ私たちに単に哀れんで願を発されたものではなく、真如の法(宇宙全てに備わる永久不変の真理)を自らの修行で悟り得ない私たち全てになり代わって止むに止まれず願を発された、その本願力に乗じて往生できるのだと深く信ずること。

こうしてみると仏教でいう「往生」は、来世のことでなく私たちが生きている今の生活における心の持ち方、信心のあり方を教えているとも言えるのです。

参考:【五濁】

劫濁(こうじよく)戦争・疫病・飢饉などが起こり、世の中が乱れる時代の濁り。

煩惱濁(ぼんのうじよく)貪・瞋・癡の煩惱による心身の濁り。

衆生濁(しゅじょうじよく)煩惱におかされた人間の集まり、すなわち社会全体の濁り。

見濁(けんじよく)人々がよこしまな考えや誤った思想を持つようになる思想の濁り。

命濁(みょうじよく)煩惱濁や見濁が原因となって起こる衆生の生命の濁り。

往生について(その3) 2005/05

前回に引き続き「当得往生」についてお話しします。

すべての人々を救いとることを誓われ、佛になられた阿弥陀佛の弘願(ぐがん)(第十八願)によって、すべての人が迎える命終のとき、穢れた世界を離れ阿弥陀佛の清らかな世界に佛として生まれ変わるといふことをお話ししました。現世での人々は、寿命の長短や行業の違いや様相の違いなど、その生きざまは様々ですが、来世(当来)では浄土に往生することを得ることから「当得往生」と言われます。

山の彼方に沈む夕日、大海原や広大な砂漠のはるか彼方の水平線、地平線に落ちる日輪に浄土のイメージを託して、先だった肉親や知人に思いを馳せるとき、私たちは自分の人生の最後の落ち着き場所、すなわちこの世に現れ出でたものが帰るべき所に思い至ります。流転に流転を重ねた娑婆での生活によりやく幕を引き、長い年月の疲れが癒される安養の場所、浄土が人々の心を開けるのです。

法然上人はご自身が著された『選択集』に、自分の真の姿をさらけ出して次のように述べられています。

無量寿經に説かれる念佛往生の願とは、佛像を造ったり、堂塔を建てたり、多くの寄進をしたり、供養をしたり、学問や知識を習得したり、戒律を守ったりすることが条件であれば、金持ちや知識人そして戒律を守る僧だけが往生でき、貧しい人、愚かな人、魚肉を食する人は往生が叶わない

ことになってしまう。自分自身は学問が進むにしたがって知識の世界が広まり深まりもしたが、学問だけでは往生はもちろん魂の救済など得られず、かえって空しさを感じるだけである、と。

このことを会得（領解）することができたなら、南無阿弥陀佛と称えることによって阿弥陀佛の働きを感じることができるのです。この法話を担当する私も、いろいろな場面に遭遇し、これも佛さまの計らいかなあと思うことが多々あります。そんな時に、生きていてよかった、有り難いことだと身に染みて感じると同時に、人に対して、もっと優しく慈しみを持って接していかなければと思うのです。現代は忙しくゆっくりできない時代です。でも、そんな中でふっと立ち止まり、振り返って、たくさんの人にお世話になったり、佛さまの加護にあずかっているなど感じる心のゆとりを持つことが大切なのです。そうすれば次の世、浄土でも周りの人と一緒にできればという心境に不思議となってくるのです。

往生について（その４）2005/06

いままで当得往生について話してきました。今回は“即便往生”についてお話しします。

前回に弘願（ぐがん）という言葉が阿弥陀佛の第十八願として述べましたが、弘願にはもう少し広い意味合いが込められています。無量寿經に説かれている法蔵菩薩（阿弥陀佛が佛となられる前の名）がたてられた四十八の願（本願）のうち、我が西山派では第十八願を最も重要な本願とし“王本願”といいます。この王本願を我々凡夫に領解（理屈を超え、自然と肯き理解すること）させるためのお釈迦さまの教えが『観無量寿經』に日想観、水想観などの十六の観法として説かれています。この観法は我々が修行するものではありません。阿弥陀佛の本願を凡庸な私たちにも解らせるための観法なのです。

我々凡夫が今生において、この観を通して王本願を会得して阿弥陀佛と一体となって当得往生できるということを覚り、揺るぎない信心を持つに至ることを“即便往生”といいます。（その１）で往生の本来の意味は生まれ変わる事、煩惱を断ち切り迷いから解放されることと述べました。即便往生とは今生において迷いと決別し、新たな自分に生まれ変わることもいえるのです。このように私たちには今生と死後の二つの往生があるのです。そして、弘願とはただ単に佛になる願いだけでなく、我々凡夫の即便往生も含めたより深い願いなのです。

即便往生のためには、阿弥陀佛と一体であるという信を打ち立てて、阿弥陀佛の弘願の中に生かされていることの自覚を持って日々を送ること、すなわち“三心”を持った日々を送ることが大切です。このことを法然上人は次のように述べられています。「うけがたき人身を受けて、あいがたき本願にあいて、おこしがたき道心を発して、はなれがたき輪廻の里をはなれて、生まれがたき浄土に往生せんこと、悦びの中の悦びなり」と。すなわち、法然上人はこう述べられたときに即便往生をとげられているのです。

人間がこの世に生を受けることはむずかしく、寿命をまっとうすることもむずかしいことです。しかし、さらにむずかしいことは、正法である正しい真理の教えを聞くことです。このいたらぬ私がかんなくも阿弥陀佛に救いとらんと願われていること、そして阿弥陀佛のみ教えに出会えた喜びを知ったなら、迷いを離れて不安だらけのこの世界を生きる勇氣と安心を得られるのです。人間に生まれてよかったと喜び、生きていることに感謝し、周りの人々に目を向け、思いやりを持って接することができるのです。

【参考】

第十八願:もし、われ佛をえたらんに、十方の衆生至心(ししん)に信樂(しんぎょう)して、わが国に生まれんと欲して、乃至十念せん。もし生ぜずんば正覺を取らじ。ただし、五逆と正法を非謗するを除かん。(『無量寿經』第十八願)

十六観法:日想観、水想観、地想観、宝樹観、宝池観、宝楼観、華座観、像想観、真身観、観音観、勢至観、普観想観、雜想観、上輩観、中輩観、下輩観

三心:至誠心、深心、回向発願心 (往生について(その2)を参照のこと)

往生について (その5) 2005/07

往生についての法話も今回が最終回となりました。今回は、往生の意味するところを感得できた場合、それが日々の暮らしの中でどのような功德として表れるかについてお話しします。

以前にお話しましたように、阿弥陀さまは四十八の願を成就されています。一つや二つあるいは三つや四つという限られた事柄に対する願を叶えられたものではありません。私たちがこの世で人生を全うする間に、自分の執着から起こる様々な悩み、苦しみを、阿弥陀さまは共に悩み、苦しみ、悲しんで私たちを支えて下さっているということなのです。阿弥陀さまは、私たちが頂いた寿命いっぱいを過ごす間、片時も離れず抱きかかえて下さっているのです(摂取不捨)。法然さまは「まこと大悲誓願の深広なること、たやすく詞をもてのぶべからず。心をとどめて思うべきなり」と言われています。

私は、“大悲誓願”とは形がなく、融通無碍(むげ)で言葉では言い表すことのできない大きな働きをいい、あえて名付けて呼ぶとすれば“阿弥陀”としかいいようがないのだと思っております。

現代は科学が発展し、また様々な事柄が学問として盛んに取り上げられて理屈がすばらしく発達してきました。そのため私たちは知らず知らずのうちに物事を理詰めで解釈し、頭で納得のいかなことは受け入れず退けがちです。しかし、“信心の世界”は理屈だけの世界ではありません。“こころ”と“いのち”の世界なのです。人生において“自分のこころ”ほど恐ろしいものはありません。自分のこころが一番の強敵で、自分のこころの働きを明瞭に捉えられればいいのですが、自分の都合に合わせて捉えてしまうのです。“いのち”も今生だけの問題として、悪事はしないと、仁愛の心を持つとか、思いやりの心を持つとか、人に腹をたててはいけないということではないのです。

詩人相田みつを氏の詩に「・・・過去無量の いのちのバトンを受けついで いまここに 自分の番を生きている それがあなたのいのちです それがわたしのいのちです」とあります。“いのち”というものは連綿と受け継がれるものなのです。そして、阿弥陀さまの“大悲誓願”は私たちの“いのち”そのものに働きかけて、三世(過去・現在・未来)そして十方(時間・空間)に輝かせておいでになるのです。

“即便往生”とは、悲しいかな迷う術しか持たない人生で、迷い迷いながら寿命いっぱい生きるとき、この身のままで佛さまの懷に抱かれてつつ、十劫(じゅうごう:遠い遠い昔)以前からお念佛を称えられている我が身に気付かされることなのです。己の尺度でしか生きることのできない自分に目覚めることなのです。そうすれば、“こころ”と“いのち”の世界に気付かされ、他の人も同じであることを認め、その人の中の尊いものに出会い、受け入れていくことができるのです。(完)

あらためてお念佛とは 2005/08

今までシリーズで“阿弥陀さま”と“往生”についてお話しました。そしてこれらのことは、理屈や理論で会得できる世界ではなく信心の世界、つまり“こころ”で感じ取る世界であることを述べてきました。三業(さんごう)に振り回され、物事に執着して思い悩みそして怒り、知らず知らずに十悪に陥っている……。このような凡夫である自分を自覚できて初めて開けてくる世界なのです。この世界を自分の力で見ようとしても、とても出来るものではありません。このような私たちを信心の世界へ導くのがお念佛です。自分が凡夫であることを自覚してお念佛を称えることにより、“自浄其意(じじょうごい)”が知らず知らずになされ、阿弥陀さまの教えに自然と頷けるようになるのです。

『観無量寿経』に「…一つ一つの光明はあまねく十方の世界の念佛の衆生を照らし、攝取して捨てたまわず」とあります。念佛は私たちと阿弥陀さまを結び一体化するもので、これを念佛の功德、“三縁”といいます。第一は“親縁”といい、「衆生が口で阿弥陀佛の名を称え、身に佛を礼し、心に佛を念ずると、それぞれが佛の働きと互いに憶念してあい離れないこと」、第二は“近縁”といい、「佛に会いたいと思えば、佛がこれに応じて現れること」、そして第三は“増上縁”といい、「名号を称えようと、念々に罪が除かれ、臨終時に必ず往生できること」。

さて、私たち人間は生きるために他の生命を奪い、また多くの縁に依って様々な行為をしています。しかし、佛の願い(佛法)に反する行いを知らず知らずに犯しつつも、自分は間違いないと自分本位に生きようとします。佛教ではこのような行いを“罪”と呼びます。また、自他に“苦”をもたらす行いをしつつもそれに気づくことがありません。このような行いを“悪”といいます。私たち人間は日々の行いの中で造罪、造悪せずにはいられない存在なのです。だからこそ阿弥陀さまの本願があり、その願いによって善人も悪人も罪人も救われ、滅罪もできるのです。が、これは自分が煩惱多き凡夫であると自覚し、三業を超えて称えるお念佛を通して可能なことなのです。しかし、人間が行った行為は取り消しが出来ず、その結果は命終とともに消えるものでもなく、自分でその責を永久に負わざるを得ません。だからこそ佛教では、私の悪によって苦しむ人、悲しむ人が必ずいることをまず知り、悪をなさない心がけを説くのです。

最後に改めてお念佛とは？ お念佛とは“当得往生”を、そしてまた“即便往生”を願い、佛さまの智慧、慈悲に護られている自分を知り、自分の罪や悪をしっかりと見つめ、今自分が生きていることを喜び、すべてに感謝し、安心(あんじん)を得ることなのです。それはとりもなおさず、私の心に佛さまの智慧、慈悲が納まり、佛と一体となった状態(憶念)となることなのです。お念佛の功德により、おのずと“三学”を修めて心が自浄され、“七佛通戒偈”の教えにある善悪を見極めて、それぞれの力に応じて無理をせず、自分の出来る善を為すようになるのです。

【参考】

- ・三業 「身業、口業、意業」 阿弥陀さまのことをご存じでしょうか(その四)(2005/02)
- ・自浄其意 「自浄其意」(2004/02、2004/03)を参照
- ・当得往生、即便往生 往生について(その1)(2005/03)～(その5)(2005/07)を参照
- ・三学 三学とお念佛(2004/09)を参照。
- ・七佛通戒偈 「諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸佛教」

(しょあくまくさ しゅうぜんぶぎょう じじょうごい ぜしよぶつきょう)

(諸々の悪をなすことなく 諸々の善をなして 心を浄くせよ これが諸仏の教えである)

佛教における罪・悪・善とは 2005/09

「悪をなさず、善をなす」という言葉は単純明快ですが、では悪とは何か、善とは何かという問いに答えるのはそれほど簡単ではありません。さらに“罪”という言葉もあります。“罪悪”という言葉があるように罪と悪はそれほど厳密に区別されていませんが、佛教でいう罪と悪は違うものなのでしょうか。

佛教には佛教徒として守るべき規範として“戒”や“律”があります。狭い意味では、これらの戒や律に反する行いが“罪”でしょう。一方、“悪”は戒や律のみならず人として生きるための倫理に反する行いも含み、抽象的には“自然の道理に反すること(不如法)”であり、自他を悲しめ苦をもたらす行いと考えられます。これと全く逆の行いが“善”といえます。佛教では五逆罪、十悪が述べられており、これらが佛教でいう罪と悪の代表例といえます。しかし、心の荒廃がいわれる現代はもっと深刻な“罪”をかかえているのではないのでしょうか。

現代は佛や神を捨て、人間があたかも佛や神であるかのように振る舞っている時代です。宗教のない社会では善悪の判断は法律のみに頼ることになり、法に触れなければ何をしてもかまわないという考えが蔓延します。そのような社会では、人の痛み苦しみを他人事とし、慈悲の心は消え失せ、“悪”の限りを尽くす世界となってしまう。人はこの世に生を受け、六道世界を輪廻流転する迷いの存在であり、日々の生活の中で造悪せずにはおれない存在であることにも気付くことはありません。また、人は妄情の故に自分の思いを正当化し、自分の行いに対して恥じる心も起きません。佛の教えを信順することなく“悪”を行い、また慚愧の心を起こすことなく生きていること、現代人すべてに共通する“罪”ではないのでしょうか。

「罪悪生死の凡夫」という言葉があります。これは善導大師の「観経疏」にある言葉で、法然上人は、「我々凡夫は、あらゆる善根なく、佛に救われる望みの万に一つもない一闍提(いっせんたい)のような者であり、はかりしれない昔より生死の迷いの世界を流転し、その世界から抜け出でる手がかりすらないと思ひさだめることである」と解釈されています。罪悪生死の凡夫とは、煩惱に縛られて真実の救いを得ることに気づかない者をいうのです。宗教を忘れ、物の豊かさのみを追い求める現代の私たちは、まさに罪悪生死の凡夫といえるでしょう。

【参考】

五逆罪:母を殺すこと 父を殺すこと 阿羅漢を殺すこと 僧の和合を破ること 佛身を傷つけること
十悪:殺生 偷盗(ちゅうとう) 邪淫(以上三つは身業のつくる悪)、妄語(もうご) 綺語(きご) 悪口(あつく) 両舌(以上四つは口業のつくる悪)、貪欲(とんよく) 瞋恚(しんに) 邪見(愚痴)(以上三つは意業のつくる悪)

一闍提:断善根と漢訳する。仏教の正法を信ぜず、悟りを求める心がなく、成仏の素質・縁を欠き救われる見込みのない者。

佛教における罪・悪・善、そして懺悔とは 2005/10

前回に引き続いて“罪惡生死の凡夫”について考えてみます。法然上人のお言葉を訊ねていきますと、人間は元々善も悪もともに為すもので、在家や出家、有智や無智の一切の善惡の人々を凡夫であると示されています。この世を五濁にまみれた世界であると見て、一切の凡夫は五濁不善の凡夫であり、愚かさゆえにいつも迷い六道世界に流転し抜け出せず、あらゆる罪惡を作っていると仰せです。上人もご自身のことを“愚痴の法然坊”、“十惡の法然”と言われ、どのような人間も泉のように次から次へ湧き上がる煩惱により、遠い過去から苦の世界に流転し解脱の道に目覚める縁さえない身であると、深く自分自身を見つめられています。

私たちの“悪”は三業(身業、口業、意業)によって引き起こされます。私たちは意業(心の働き)がもとになり、眼、耳、鼻、口、身(いわゆる五官)に伝わる刺激によって様々な欲望を起こします。当然のことながら意業が悪い方向に向かえば苦しみ、よい方向へ向かえば楽を受けます。以前に触れた「惡を行わず 善を行う 自己の意を浄める」という“七佛通戒偈”はこの因果の道理を説いているのです。

我々凡夫が救われる道、それは自分自身はどうてい救われがたい凡夫であると認識し、犯した罪、惡を阿弥陀佛に告げ二度と同じことを繰り返さないと誓う、すなわち懺悔(さんげ)することなのです。阿弥陀佛が救わずにおれないと我々を追いかけ続けられていることに気づかず、感謝する念も持たなかった自分の罪を、また今日からは戒を保ち、罪を重ねることなく、罪障を犯す心を起こしても、惡をなしてもすぐさまそのことに気づき懺悔することなのです。

五濁(ごじよく)

劫濁(こうじよく) 戦争・疫病・飢饉などが起こり、世の中が乱れる時代の濁り。

煩惱濁(ぼんのうじよく) 貪・瞋・癡の煩惱による心身の濁り。

衆生濁(しゅじょうじよく) 煩惱におかされた人間の集まり、すなわち社会全体の濁り。

見濁(けんじよく) 人々がよこしまな考えや誤った思想を持つようになる思想の濁り。

命濁(みょうじよく) 煩惱濁や見濁が原因となって起こる衆生の生命の濁り。

私はいつも正しい？ 2005/11

いままで罪や惡についてお話してきました。しかし、一番大事なことは“自分自身が惡をなし罪を作る人間である”という自覚ではないでしょうか。

『観無量寿經』に、古代インドのマガダ国の王妃イダイケ(韋提希)が自分の息子アジャセ(阿闍世)にビンバジャラ(頻婆娑羅)王とともに幽閉されたとき、世尊に愚痴をこぼす場面があります。その場面を意識すると、

イダイケは釈尊を見奉って、自分で瓔珞(ようらく:装身具の一種)を絶ちきり、身を地に投げ出し、号泣して仏・世尊にこう言った。私は昔に何の罪があつてこのような惡子を生んだのでしょうか。世尊もまた何の因縁があつてダイバダッタ(提婆達多)と身内なののでしょうか。

この言葉を発する前に、母イダイケは子アジャセに責められ、慈母は児に合掌して、身を曲げ、頭を垂れ、手を突き、熱い汗が全身流れ出て身心悶絶してしまいます。この出来事を善導大師は、

「嗚呼哀れなるかなこう忽(こう:りっしんべんに兄)の間にこの苦難に逢えること」と仰せです。皆一生懸命に生きているのですが目先のことにとらわれているだけなのです。だから自分の身に苦難が降りかかってきたとき、とりとめもなくぼんやりと生きていた愚かさに初めて思っていたのです。イダイケはいま自分の身に降りかかっている不幸をすべて他人の所為にして、自分は正しく間違いを犯していない、悪いのは他人だといって世尊を責めているのです。

このみかえり法話をお読みの方はもうお解りだと思いますが、私たちは自分に降りかかる不幸な出来事は他人のせいであり、自分一人が正義を生きているという錯覚に陥っているのです。そして、私は心優しい人、親切な人、善い人、人をいたわる人、善人なのだから、悪い人はあなただと他人を裁き、善いことはすべて自分の所為に行っているのです。自分はいつも頑張っているのに何でこんな目に遭わなくてはならないのかと嘆き悲しむのです。自分の力を誇示し、自分の目に狂いはないと思ひこみ、自分の行為はいつも正しいとする姿勢で生きているのです。経験や既成概念で一杯になった知識を身に付ければ付けるほど自分を正当化し、困ったのは相手だと他人を裁くこと、これは凡夫に共通する姿勢なのです。

しかし私たち凡夫は、自分も他の人と一緒であることに気付くことが必要なのです。自分も罪を作り悪をなす人間であることに目覚めれば、こんな私にもかかわらず佛の大きなお慈悲の中に生まれていることに気づくのです。そうすれば、この世界の人々や出来事に共感し、感動する気持ちがおのずから生まれるのです。

【参考】

提婆達多（だいばだつた）：釈尊の従弟で、斛飯(こくぼん)王の子。阿難の兄弟。出家して釈尊の弟子となり、後に背いて師に危害を加えようとしたが失敗し、死後無間地獄に堕ちたという。

私はいつも正しい？（その2） 2005/12

善、罪・悪を佛教の観点から考えていくと、佛教の目指す究極のものは「七佛通戒偈」に示されているように“善”であることが明確になります。

今回は、善業や悪業に関係する言葉を、主な経典や先人の記述から拾い出してみましょう。

『ウダーナヴァルガ』(感興のことば:中村元訳 岩波文庫)では、

- すべて悪しきことをなさず、善いことを行い、自己の心を浄めること、これが佛の教えである(第28章 悪1)
- 身について慎むのは善い。ことばについて慎むのは善い。心について慎むのは善い。あらゆることについて慎むのは善いことである。あらゆることがらについて慎む修行僧はすべての苦しみからのがれる(第7章 善い行い11)

『ダンマパダ』(真理の言葉:中村元訳 岩波文庫)には

- 大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにいても、悪業からのがれることのできる場所はない(第9章 悪127)

善導大師の『往生礼讃・中夜』には

- 無始に身を受けてよりこのかた、つねに十悪をもって衆生に加う。父母に孝せず、三宝をそしり、五逆不善の業を造作す。この衆罪の因縁をもつてのゆえに、妄想転倒して纏縛(てんぱく:絡み縛ること。転じて煩惱のこと)を生ず。まさに無量生死の苦を受くべし。頂

礼して懺悔す。願わくば滅除せしめたまえ。懺悔しおわんぬ、至心に阿弥陀佛に帰命してたてまつる。

“善”とは慎みであり、人間は悪業から逃れがたい存在であることが説かれています。また善導大師の言葉は、私の罪惡の相を客觀的に見つめ、自分の心と行動を直視すればするほど、“善”を行うことが至難の業であることを示しておられます。法然上人は「自身はこれ無智の身なり。これ破戒の身なり」と言われ、西山上人は「耳に一切の佛法を聞けども驕慢惡心は海より深く、・・・(中略)・・・善心これおろそかにして悪行いよいよさかんなり」と述べられ、“善”をなすことがいかに難しいかを示されています。このように“善”は修め難いゆえに釈尊は浄土の教えを開かれ、善導大師、法然上人、西山上人は念佛一行の道を開かれて、凡夫衆生の進むべき道を明らかにされたのです。

では、私たちは善業を行っているつもりでも果たしてそうでしょうか。

西山上人の『五段鈔』には

- 諸惡を流轉の業と知り、諸善を虚仮(こけ:内心と外相が異なり真実でないこと)の行と知りて、善惡の言にしたがわざるを真実の心というなり

私たちがこの世で行う諸惡は迷いのためであり、また善業も無意識のうちに自己中心的となり、慢心を生んでいるのです。このことに気づいて「善だ、惡だ」ということばに惑わされず、慎みの心と呼び返すならば阿弥陀佛のみ心そのもの、すなわち真実の心なのです。

善導大師の『般舟讚』では、

- 一切の善業を回らして生ずる利あれど、もっぱら弥陀の号を念ずるにしかず。念々の称名は常の懺悔なり。人よく佛を念ずれば、佛還りて憶したまう

私たち凡夫は善業で救われることがあっても、次から次へと惡業が湧き出てしまうものなのです。大師は、慎みの心を発し、もっぱら弥陀の号(念佛)をもって懺悔して心の浄化をはかることをお教えです。凡夫の自覺をもって、慎みの心を根底として念佛に根ざした“善”を行うことが、私たちの宗派の教えなのです。

生かされて生きている歎きの念佛 2006/01

私たちの日々の生きざまを振り返りますと、前にも述べたことですが、私たちは今自分に降りかかる不幸をすべて他人の所為にして、自分は正義を生きているという錯覺に陥っています。自分の目には狂いがないと絶対視し、なぜこんな目に遭わなくてはならないのかと苦しみます。

この錯覺はどうして起こるのでしょうか。この法話の「自浄其意」(2004/02)でも触れましたが、私たちは物事を二つに分けて都合のいい方に執着しがちです。自分と他人という二元分別にとらわれて、自分というものに執着していることから起こる錯覺なのです。では自分とは何なのでしょう。今一度、私たちはこのことを考えてみる必要があります。

佛教では私たちの存在は五蘊(ごうん:色・受・想・行・識)で成り立ち、「ただ身体と、ただ心がある」と捉えます。これらから構成される実体としての“自分(我)”は存在しないと説きます。私たちが自分と思っているのは、あのようでありたい、あれをしたい、これが欲しいといいつつ生きている姿を心に投影した虚像に過ぎないのです。まさに、煩惱に突き動かされている姿を“自分”と思って執着しているだけなのです。心を自浄し煩惱がなくなれば“自分”という虚像もなくなります。自分がいなくなればこれに対置する他人も当然のこととしてなくなり、自他の区別も執着もなくなります。まさに煩

悩を滅するという佛教の目標がここに 있습니다。私たち凡夫はここまで至らなくても、阿弥陀佛の本願に思いを馳せ、人間は同じであることに気づき、“自分”も罪を作り悪をなす人間であることに目覚めれば、このような錯覚から解放されて周りの人々や出来事に共感し、感動して生きることができるでしょう。

この私が今生きているということは、連綿として続く生命の流れの中で、父母兄弟、自然、人間の恩恵を通じて宇宙的な意志によって得られたものなのです。頼まれたわけではないのに身体の仕掛けは常に休みなく働き、おかげで私たちは生きています。また臨終もこれに同じなのです。私たちは眼に見ることも手で触れることもできない大いなる力に生かされ生かそうとされています。この働きがまさに宇宙の真理であり、これはそのまま阿弥陀佛の本願なのです。阿弥陀佛の功德の中に生かされている存在にすぎないことに気づき、それが真実の歓びとなりまた歓喜の声となって唱える念佛、それが私たちの“生かされて生きている歓びの念佛”なのです。諸佛が私たちの心の中に入り凡夫の心となって、私は佛ではないが佛が私となって救い給うのです。私の何物であるかを知らしめられ、念佛が佛におさめられるとき、「南無阿弥陀佛、佛のみ名と思ひしに唱ふる人の姿なりけり」と詠まれるように、念佛は佛と私の中の佛が想念しあう姿となるのです。

【参考】

五蘊(ごうん) 「蘊」は梵語 skandha で、集合体の意。色・受・想・行・識の総称で、物質と精神との諸要素を収め、現象界の存在の 5 つの原理。色は物質および肉体、受は感受作用、想は表象作用、行は意志・記憶など、識は認識作用・意識。一切の存在は五蘊から成り立っており、それ故、無常・無我であると説かれる。

法然上人と今、すべてのいのち（その 1）2006/02

（法然上人八百回大遠忌テーマ）

最近、“地球にやさしい”とか“共生”という言葉がしきりに聞かれます。この言葉は自然破壊・環境汚染をきっかけとして人間中心の生き方を反省し、この世に生を受けたすべてのものは共に助け合い、補い合って生きていることを再認識した言葉といえます。が、実は佛教でいう「縁起(因縁)」がこの共生に他ならないのです。佛教の根本教義は縁起につきます。縁起とは簡単に言えば「AあればBあり、AなければBなし」という、物事を関係的にとらえる単純明快な理法です。以前にお話した惑・業・苦も、万物は移り変わるという万物流転の原理もことごとく縁起から生まれてくるのです。

さて、今私たちが生きている現代は、西洋に端を発し目覚ましい発展をとげた科学や技術のおかげで自然を利用しあるいは自然を“征服”して、人間のより豊かでより便利な生活を追い求めている時代です。しかし、一方では自然破壊・環境汚染が進み、さらには科学の成果が大量破壊兵器を生み、また生命の誕生さえも制御しうる技術が開発されて、一歩誤れば人間の存在そのものが脅かされる状況となりつつあります。このような状況を救えるものがあるのでしょうか。

ここで日本の自然観に立ち返ってみましょう。日本の長い伝統文化には、自然の恵みを頂き自然の懷にいだかれて、私たちは自然のおかげで生かされているという考えが根底に流れています。

私たちは自然界の一木一草にも靈性を認め、自然界に存在するすべての「いのち」に目を向け、自分が今生きているのはすべての「いのち」のおかげであり、“もったいない”という感謝の気持ちを育んできました。日本の伝統文化は、自然を“征服”するという考え方を持たず、「自然があれば人があり、自然がなければ人はなし」というまさに佛教でいう縁起の理が根底に流れています。共生はもともと日本の伝統文化が持っている基本的考え方なのです。また、佛教では次のように説きます。

私たちの存在は縁起であり、「いのち」は宇宙が誕生したときから連綿と続き気づかなくても全宇宙から影響を受けているのです。その影響の受け方は人それぞれであるから、そこに少し違った人間模様を呈してくるのです。無限に広がる因果の網というものを私たちは見るができなくても、必ず働いていて私たちの独自性を形成しているのです。

私たちが今目を向けるべきことは、“すべての「いのち」の恩恵を受けて今を生きているのが私たちである”ことなのです。共生とは、単に限りある資源を無駄にしないという人間中心の生き方でなく、思わず“もったいない”とすべての「いのち」の恩を分かる生き方です。我が宗派が平成二十三年の法然上人八百回大遠忌のテーマとして「法然上人と今、すべてのいのち」と掲げているのは、上人のみ教えを通じて今一度私たちの心にこのことを呼び覚ましたいという願いなのです。

ものからこころの世界へ 2006/03

ー法然上人と今、すべてのいのちー

私たちが生きているこの娑婆世界は、理性のみが支配する観念の世界でもありませんし、物の価値のみが支配する物質の世界でもありません。今回は私たちが生きていくうえで、信仰あるいは信心がなぜ必要なのかについて考えてみましょう。

人間はこの世に生を受けたときから疑問を持って生きています。幼いときは目にふれるもの手に触れるものすべてに、これは何あれは何と疑問をいだき知ろうとします。青春期には自分の置かれた現状に対しこれでいいのかと常に問いかけます。家庭を持てば自分の生活や子供の将来など、現実的なことを問いかけます。歳を重ねれば重ねるほど身の回りのこと社会のことなど様々なことに、これでいいのかと疑問が膨れてあがってきます。しかし、「人間は社会的動物である」という言葉にあるように、人の疑問は一個人で解決できることは少なく、その人が生きる時代や社会を抜きにして語ることはできません。

昭和 22 年から 26 年に生まれた人は 800 万人を超えています。この団塊の世代の歩んだ道は日本が経済成長をとげる道と同じ歩調でした。この時代は、生活の豊かさを追及した時代でもありました。働けばそれだけの結果が得られる働きがいのある時代でもありました。その半面、ものの価値ですべてを判断する唯物的な価値観が中心となり、財貨を求めて損得にこだわり「勝ち組・負け組」というような二元分別が当たり前のような社会になってきました。この間、宗教や哲学といった唯心的な価値観が置き忘れられてきたのです。このような世界の行きつくところは、虚無と享楽が支配する刹那主義と退廃の蔓延する世界でしょう。今、この時代を生きてきた多くの人々が、これでいいのか

と疑問を持ちかけています。もの優先の反省から、人々の問いかけは心へ向かいはじめているのではないのでしょうか。

心の疑問は理屈のみで解決できるものではありません。人は疑問を解決するために学びます。書物やメディアを通じて溢れるほどの情報を取り入れて学びます。しかし、自分の思いに合ったところだけを良として理屈で納得しただけでは単なる知識に終わり、根本的な解決になりません。このような問いの解決には、道を拓いた人や道を求めている人などの師となる人が必要なのです。自分のすべてを任せることのできる人に会い、その師を通じて心の世界を知ることが肝要なのです。

自分のすべてを任せるのは、日々の生活で不安に陥る心を励まし、気持ちが落ち着くことを願うからです。念仏信仰はまさにこのためにあります。よき師を通じて阿弥陀仏のお慈悲に気づき、宇宙の真理、哲理に目覚めることによって“安心”(あんじん:心の働きが安定した状態)を得ることができるのです。その安心を日々の生活の中に反映し、すべてのいのちを認める世界を目指してゆけるのです。私の“闇”とは、自分の心の働きに気付かないことです。この“闇”を知らしめる佛さまのお慈悲はまさに光明なのです。佛さまの光明の中に私のいのちが今輝きだそうとしているのです。

他力に目覚める 2006/04

昨今、青少年犯罪が話題になりますが、一方で 65 歳以上の高齢者犯罪が急増しており、昨年は全体の 1 割を超したと報じられています。1990 年に比較して、高齢者人口は 1.7 倍増にもかかわらず検挙者は 6.6 倍と激増したとのことです。幾多の人生経験を積み、人々の範となるはずの高齢者がなぜ犯罪に走るのか。今後、学理・病理的な観点から様々な原因解明がなされるでしょうが、佛教的に見れば個々人の心のあり方に根ざしたものがあるように思われます。

罪を犯すという事は“自分の欲望”を優先することに起因しているのではないのでしょうか。お釈迦様が、黄金をヒマラヤ山の 10 倍積み上げても人間の欲を満足させることはできないと仰せのように、無限に生きたい、思い通りにしたいという底知れない欲望(貪欲:とんよく)を持つのが人間だそうです。これが叶わないと怒り、憎しみ、腹をたてます(瞋恚:しんい)。邪見といわれる自己中心的な考えのため、物事がうまく行かないのは周りが悪いからだとかどくどく言います(愚痴:ぐち)。これが人間の抱えている三毒という煩惱です。三毒に汚れきった心で、他を顧みず自分だけを可愛がる念に覆われて他との関係によって生かされているという“縁起の理”に気づくこともなく、悶々とした日々を送ることが犯罪という行為につながるのではないのでしょうか。

人間は、幼少の時代と高齢の時代に耐え忍ぶことが難しくなります。善導大師が「各聞強健有力時 自策自励求常住」と仰せのように、壮年の元気なときに佛法に出会って、お釈迦様の教えを聞いて自分の迷い・彷徨を明らかにして佛の教えに任せて従う習慣を身につけることが、心のあり方の根本です。煩惱は生きている限りなくならないものと自覚し、自分を甘やかさず“いのち”の不思議さ、尊さ、そして一陣の風で吹き消される灯火のような儚さを知るのです。

そして、私たちは佛さまの教えに従って五戒を授かります。一殺生しない、盗まない、嘘をつかない、淫らな男女関係を持たない、飲酒しない— この戒を全うするのは難しいことですが、保つことはできます。我が派には、特別に日を定めて戒を受ける別時法要があります。私の心の眼を開き、人としての価値と生きがいのある生涯の道を見届けさせて頂く五重相伝会と授戒会(円頓戒・十二門戒儀)です。戒はサンスクリット語ではシーラといい、習い習性といわれています。ですから、訓練

して身につける努力をしなければなりません。自分の力、自分の判断、自分の分別だけで生きて喜んだり悲しんだりしてきたけれど、自分の力には限界があり、自分だけを善しとしてはいけないうちに気付くことが大事なのです。これを“他力”に目覚めるといいます。そして、私というものはいろいろな恵みによって支えられ、育てられてきたことに思い至るのです。

佛さまは危なかしい私たちを見放すことなく、もったいなくもお陰さまの中に生かされている私たち。私たちは懺悔と感謝の日暮しを心がけるならば、知らず知らず造悪・造罪から遠ざかり社会が憂える犯罪も減っていくに違いないでしょう。

【参考】

善導大師（613～681）

隋の時代の末期、現在の山東省にあたる地で生まれる。幼くして出家。29 才の時、善導は玄忠寺の道綽に会い、5 年の師弟生活のうちに念佛往生の信念が確固たるものとなる。その後、善導は唐の都、長安に入り、光明寺に住んで広く大衆に門戸を開き念佛の教えを広める。

善導大師は『観経疏』を著し、念仏往生こそ人々のための佛の本意であることを明らかにする。大師は持戒が非常に厳格であり、法然上人は善導大師を阿弥陀佛の化身といわれるほど敬慕された。

願いに生きる 2006/05

この世に生を受けるとき、まず親の願いが働きます。学校に行けば先生の願いが加わり、社会に出れば周りの人々の願いが加わります。長い人生では、いろいろな人の願いが自分の身に及んでいます。

私たちはこのことに気づいているでしょうか。悔いのない人生を送ってほしいという親の願いや立派な人になってほしいという先生の願いに……。しかし、現実は何一つ思い通りにならないともがき、藁にもすがる思いで神佛に願い事をしてしまう煩惱熾盛(しじょう)の身が私たちなのです。

私たちはいくら注意深く用心を重ねていても、思いもかけなかったことに会うものです。あの時あのようにしてなければ……。あの時あそこに行かなければ……。あの時あの人に会わなければ……。などと人は何度心で呟くことでしょう。そしてその原因を人のせいにして不平不満を言ってしまう。佛の教えを聞いてやっと“願い”に気付いても、この身は変わりません。神佛に願い事をして願いが叶ったとしても、自分が何か素晴らしいものになるものでもありません。佛の教えは煩惱を持ったままの救いなのです。自分は煩惱具足の凡夫であっても、全ての人の願いの中に生かされていることに気付くことなのです。今まで不足にばかり思っていた人生が、周囲の人々の善意や願いに包まれて生かされている人生であると自覚したとき、生かされていることに感謝の念がわき、自然と手を合わすことができるのです。ただ佛さまを憑(たの)むことができるのです。

花は誰かのために咲くのではないけれど、多くの人に感動と安らぎを与えます。自分の与えられた人生を感謝の念を持って生き、人として己の分を尽くし、そしてそのことがはからずも人々の願いに叶うとすれば、人としてこれにまさる喜びはないのです。

【参考】

- (1) 人能念佛佛還憶
(人よく佛を念ずれば 佛還って憶したまう)
善導大師(般舟讃より)
- (2) 香自禪心無用火 花開合掌不因春
(香は禪心よりして火を用ゐることなし 花は合掌に開きて春によらず)
菅原道真(『和漢朗詠集』卷上「佛名」より)

今の私たちに求められること 2006/06

往々にして貧困が争いごとや紛争の直接的原因と言われますが、その根底には当事者の価値観や世界観の相違があります。宗教がこれらの形成に大きな関わりを持っていることは明らかで、宗教的対立が戦争に発展する例は歴史に多くみられます。昨今の西欧社会とイスラム社会の対立も世界観の相違が根底にあります。また、絶対的な神を頂くキリスト教に根ざした西洋文明の世界観と、個の中に宇宙の秩序があると見る東洋文明の世界観では自然に対する姿勢も自ずと違ってきます。極言すれば、西欧文明は自然を制御・支配することに価値を見だし、東洋文明は自然と共生することに価値をおきます。中世から近世にかけては西欧文明が主流となり、自然の仕組みを理論的に究明し、科学・技術として様々に応用して人類の繁栄を支えてきました。しかし、一方で解決の糸口の見えない様々な問題が生起し、これらの解決には西欧文明とは違った価値観や世界観が必要であることに人々は気づき始めています。最近、西欧文明の行き詰まりを打開するものとして、西洋文明と東洋文明とりわけ大乘佛教の思想を融合した、新しい価値観、世界観の創出が提唱されはじめています。

では世界でも有数の佛教国、日本の現実はどうでしょうか。多くの人が所得格差、情報格差、男女格差などの拡大を感じ、倫理観の欠落した利益追及が目立つ競争社会になっています。一握りの勝ち組と苦しみにあえぐ多くの人々が生まれてきています。いまこそ佛教という縁起、そして自力、他力という教えの原点に立ち返ることが私たちに求められています。

人としてこの世に生を受ければ、みな等しく苦しみ、悩み、不完全なゆえに他人に迷惑をかけています。人も自分も平等に悩み、苦を受け、それらの解消を求めているのが人としての本来の姿なのです。自分は正しいとして他を顧みず、自分の求めるものを追いつけている間は「安らぎ」に出会えることはないでしょう。競争社会であれば努力したものが報われ、勝って当たり前では人間社会は成り立ちません。あらゆる存在は単独ではありえず相互によりあつて成り立っている(縁起)から、自他は平等なのです。他人の苦痛を代償として自分の幸せがあるのではなく、自分の幸せの追求と努力がそのまま他人の幸せにつながるものであるはずで、私たちは自立しつつも連帯し、寛容と相互扶助の中で生きる道を探っていかなければなりません。自分のみを拠り所(自力)としていては、私たちはこの道を見つけることはできないでしょう。私たちが宗祖と仰ぐ法然上人のみ教えは他力、すなわち自らのほからいを捨てて阿弥陀さまの「いのち」の働きを受け、光明、慈悲に等しく照らされ、等しく抱かれて、みんなと一緒に歩んでいくことなのです。

来たる平成 23 年の法然上人八百回大遠忌のテーマ「法然上人と今、すべてのいのち」は、このような私たちの思いを込めたものなのです。

【参考】

自力なる時は機の方より、佛助け玉ひ候へと思ふ義なり。他力を心得て見れば、佛の方より衆生を追ひありきたまひけるを知らずして、今日まで流転しけるなり。

(自力の時は、自分の方から佛に助けを求めるという考え方です。他力が解ってみると、佛の方から衆生を追いかけてくださっているのを知らずに、今まで流転していたのです)

西山国師『述誠(じゅつじょう)』より

念佛は“いのち” 2006/07

佛の教えに出会わずに暮らしている人は、朝起きてその日の日課を済まし、夜に床に臥すまでの間に八万四千の思い煩いの中に生活していると言います。ある日、突然に心の痛み気づいて、煩いや痛みを解消する薬を探しはじめます。しかし、人に相談した様々な方策を探しても、知らず知らずに“もの”に執着して自分の都合や価値判断で分別し、一つのもを得ても明日には他のものに目移りすることを繰り返しています。私たちの心はいつもコロコロと転がり続けているのです。いつまで経っても思い煩いの解消に至ることはありません。思い煩いは生きている私たちには逃れられないものであり、ましてや“もの”で解消されるものではありません。同じ現実を見る見方を変えることが必要なのです。ものの見方を変える大きな力が信仰です。思い煩いの世界に生きる私たちにとって、佛さまの念佛の教えはこころの救済なのです。

浄土宗の祖、法然上人の信仰の裏づけは善導大師の抱かれた信仰と大師の人間性にあります。法然上人はその教えを命がけで広め、さらに西山証空上人へと受け継がれていきます。善導大師は『観無量寿経』の教えに心を集中し体得(三昧発得)された方で、「一心回願往生浄土為体」(コロコロと転がる心を一つにまとめて浄土へ往生することを願うのを理とする)と述べられています。西山上人はこの意味を「阿弥陀佛はいのちを惜しむ私たち凡夫を自ら接して成佛された佛さまであるから、今はじめて私がいのちを捧げなくても阿弥陀佛の佛体に往生は成し遂げられていると知るべきです」と述べられています。これは、私たちがこの世で人生を全うする間、自分の執着から起こる諸々の思い煩いを、阿弥陀佛はいつもともに悩み悲しんで支えて下さっているということなのです。このことを静まり澄んだ心で会得できれば、おもわず「南無阿弥陀佛」と声となって表れます。この時、私たちは娑婆世界に身を置きつつも佛さまの世界の視点で現実を見ることができるようになるのです。だから念佛は私たちにとって“いのち”そのものなのです。

人には慈悲の心があります。家族に対する慈愛、飢餓に苦しむ人に対する慈愛、災害にあった人に対する慈愛など様々ですが、多くの場合は“何とかしてあげよう、気の毒だ、かわいそうだ”という心情からお金やものが中心となって“施し”の形で表されます。これは人として大切な行いですが、お金やものの施しを限りなく続けることはできず、このような人の慈悲には限りがあります。人としての本当の救いは阿弥陀佛の慈悲に気づくことです。日々思い煩い、泣き、叫び、喚いてのたうち回って悔しがる不完全な私たちが、阿弥陀佛の“いのち”の働きを受け、慈悲の光に等しく照らされ、等しく抱かれて佛の世界の視点で皆と一緒に歩んでゆくことにあります。これが念佛の教えなのです。

【参考】

念心既に徹れば必ず声に顕れる。世間の苦楽俱に声に顕れ心の底を示すが如し。今、佛に帰

命する志きわまれば、その思いを声に顯すべし。況や、名は必ず体を召す。弥陀弘願の体に帰せば、かの佛の名号を称えて三業ともに他なき謂われを顯すべきものなり。知るべし。

『観念法門自筆所鈔』(西山証空上人)

この世に生きる 2006/08

この法話をお読みの皆さまに、ある数値をご覧くださいませ。

21,228(昭和 57 年)、34,427(平成 15 年)、32,552(平成 17 年)。何の数値かお分かりでしょうか。これは自らの命を絶った人の数です。日本の自殺者は急増し、平成 10 年以降は年間 3 万人を超える状況が続いています。この数は交通事故死亡者の約 5 倍に達しており、しかも 60 歳以上の高齢者が 3 分の 1 を占めています。日本は西側諸国では最悪の状況に陥っています。

この背景にあるものとして、健康問題、家庭問題、経済問題など様々な要因が報告されています。また、日本人の倫理観、死生観が数値を高めているという議論もあります。しかし、突きつめれば日々の様々な煩いや悩みが引き金となり、生きることに望みを失ったことが原因であることは明かです。この状況に対して、行政や医療の場で様々な対策が講じられていますが、私ども宗教者も“心の救済”という観点からこの問題に向かい合わねばなりません。

三月の法話で、心に日々湧きあがる疑問の解消には師となる人が必要であると述べました。佛教ではこのような師を“善知識(教えを説いて佛道へと導いてくれるよい指導者)”と言います。善知識はこの世を生き貫く上で、世の中の有様を観察し、無常の集まりが常に変化して様々な苦をもたらしていることに気付き、その原因を究明して安らぎの境地を求め続けている人であり、佛の眼差しで私たちを導いてくれる人なのです。

次のようなお説教よく聴きます。「五悪を犯すものは、現世において報いを受け、死後悪道に入り、苦痛が身を切ることあたかも火によって焼かれるような苦しみを受ける」。これは、この世で生きていく上で少しでも悪を行わないよう“抑止門”を設けているもので、佛教でいう方便、喩えなのです。だから、今の苦しみから逃れるため命を捨てたら楽になるというものでは決してないのです。本来、佛教の“無常”の教えは、現世を厭(いと)い来世に安らぎの世界を求めることではなく、この世における心の救いを説くものです。

善知識はこのような喩えを通じて、私たちの存在は“縁起”であり、“いのち”は連綿と引き継ぎ引き継がれていくもので、私たち一人のものでは決してないことに気付かせてくれます。また、阿弥陀さまにすべてを委ねて、日々の思い煩いや悩みから解放され安心(あんじん)を得る道を示してくれる心の導師なのです。

この世は無常ゆえに、すべてのものは永久に存在することなく千変万化し、栄枯盛衰を繰り返しています。私たち自身も八万四千の病の入れ物といわれるように、ずっと健康でいられる方が不思議であり、いつかは消えていく時がくるのです。ですから、どのような状況にあっても、たった一度の人生を戴いた“いのち”を活かさなければならぬのです。今日一日の我が身を振り返えったとき、“生かされている自分に気付き、すべてに詫びと感謝の心を抱き、そして阿弥陀さまの願力に乗じる生き方を心がけていたか”を心静かに問いかけていただきたいのです。

終わりに、臨済宗の道鏡恵瑞禅師(正受老人)の言葉をご紹介します。

一大事と申すは今日ただ今の心なり

吾れ世の人と云うに

一日暮らしというを工夫せしより
 精神すこやかにして 又養生の要を得たり
 如何ほどの苦しみにも 一日と思えば堪え易し
 楽しみも亦 一日と思えば耽ることもあるまじ
 一日一日を思えば 退屈はあるまじ
 一日一日をつとむれば 百年千年もつとめやすし
 一大事と申すは 今日只今の心なり

自然そのものの中に 2006/09

二十数年前になりますが、私の寺にマレーシア人とオーストラリア人の学者夫婦が三ヶ月ほどホームステイしたことがあります。彼らは毎日のようにお墓参りに来る人々を見て、日本の発展の原点を見る思いがしたと言いました。日本の永い伝統の中では、世代を超えた連帯を大事にしていますから、自ずから祖先や子孫とのつながりが生活の中に息づいています。日本人の宗教観の根底には縁起とか輪廻という“いのちの循環”と生きとし生きけるものという“いのちの連鎖”という考え方が流れています。それが知らず知らずのうちに、他への思いやりや共生の念を育み、過剰な競争を排除し協調をうながすことによって日本の発展がもたらされたのです。私は、彼らはお墓参りの人々の姿を通してそれを感じ取ったのだと、思います

しかし、今の世の中を見ると自分たちとせいぜい子どもの世代の利益を追い求める生活が続け、“いのちの循環や連鎖”を忘れ去っているように感じられます。今の日本人の宗教に対する姿勢は両極端で、全くの無関心か盲信、ときには狂信ともいえる混淆錯乱の観さえ感じられます。人間の心は大変弱いもので、自分に不都合なことが起きるとそのことにだけに気持ちが囚われて、その向こうにあることまで心がいき渡らず、他にその原因を求めたくなるのです。総じて今の私たちには心のゆとりがなく、自然の恵みに対する感謝と畏敬、ものの憐れを感じる感受性、人の道に代表される生活規範など、日本人の宗教観の根底にあったものが失われてしまっているのです。

クローン、臓器移植、遺伝子組み換えなどの生命倫理に関わる問題、そして環境破壊や絶えることのない戦争など、人類が直面している困難な問題を考えるとき“いのち”とは何かを抜きにすることはできません。私たちは何のために生きているのか。“いのち”とはいったい何なのか。“いのち”はどこから来てどこへ帰るのか。私たちは論理を積み上げて“いのちとは何か”を考えようとします。しかし、佛教でいう“いのち”の世界は論理のみの世界ではありません。理屈を超えた何かを心で感じ取る感性の世界でもあるのです。私たちの宗派、浄土宗では阿弥陀さまの本願とお浄土を抜きにして“いのち”を感得することはできません。

法然上人は、阿弥陀さまのことを「四十八願を發し布施、持戒、忍辱、精進、智慧の六度万行を修された修因感果の報身にして、身の丈は六十万億那由他恒河沙由旬(注:想像もつかないほど大きいこと)、眉間の百毫は右に旋(めぐ)って五つの須弥山の如く、慈眼は四つの大海水の如く、又八万四千の相、好、光明あって、一一の光明が念佛衆生を攝取する佛」と示され、「衆生に随(したが)い時に応じて幽(ほのか)に身量を現じて大小不同なり」と説かれています。

論理の積み上げて真、善、美を追究し、獲得したその知識を言葉で伝達し、また音や形で人の心に感動を与える精神活動のみでは法然上人が感得された阿弥陀さまの姿をとらえることはでき

ないでしょう。

朝起きて昇る朝日に、また西に沈む夕日に向かって思わず手を合わせる。帰る夜道でふと見上げた空に皓々と輝く月を見て静まりゆく心を感じる。「日 出れば刹那に十方の闇ことごとく晴れ、……月出でて闇晴れぬことあるべからず。かるがゆえに日は出でたるか出ざるかを思うべし、闇は晴れざるか晴れたるかを疑うべからず……」(安心決定鈔より)

折に触れて自分の生き方を見直し、大自然そのもののの中に阿弥陀さまの働きを感じ取っていくことが“いのち”の根源を感得することにつながっていくのです。

最後に西山国師のお歌二つを紹介しましょう。

「山の三角弥陀の三尊松吹く風も声明の声」 「山の三角弥陀の三尊松吹く風も聖衆来迎」

欲望と幸福 2006/10

今回は人の欲望と幸福を考えてみましょう。人間はその人生において、目指す目標の善し悪しは別として努力しています。人間の努力の原動力は欲望です。欲望はその努力が善業に向かうときはいいのですが、悪業に根ざしたものであると自己を滅ぼすという性格も持っています。人の持つ欲望は、自分の幸福を獲得することへの執着です。真の幸福を得るためには、自分の欲望の本質を見極める必要があるのです。では、幸福とは何でしょうか？ 人から干渉されず自由に暮らすこと、好きなものを手に入れ満ち足りた生活をする、諸々のわずらわしさから解放された生活をするなど、いろいろ思いつくことでしょう。しかし、佛教で説く幸福とはものに恵まれた生活ではなく“自利利他”の生き方、すなわち自らの利益が他の利益につながる生き方が幸福であるとします。

日本がバブル真っ直中のころ、人々の心は「幸せになるように」ではなく「今の幸せが続きますように」でした。大人にならない少年少女ですらお金もあり、ブランド品を身に着けて小綺麗な格好をして“幸福”と思いつつも、目に見えない漠然とした不安や孤独感があって何か物足りなさを感じていました。幸せの要素はお金とか物に恵まれていることでなく、不安や孤独が不幸につながるものだと解っていないようでした。占いブームの中、今の幸せが続くのかどうかと占い料二千元を払い、それを四つも五つもハシゴしていました。それでもヴィトンやグッチの財布の中にはまだお金が残っている。お金には恵まれていた時代でした。その少年少女も今では三十路を過ぎ、今なお“幸福”に過ごされているのでしょうか。

最近「自分探し」や「幸せ探し」が流行しています。真実の自己に出会うということはむしろ難しいことです。偽らず、飾らず、ごまかさず、背伸びせず、ありのままの自分をさらけ出して客観的に自分を見据えることは、凡人には到底できそうにもありません。幸福は外に求めている限り見つけることはむしろ難しいでしょう。

私たちは欲望に朝から晩まで使われているようなものです。欲望が満たされず怒り、怒りに目くらみ、目のくらみから智慧がくもり、智慧のくもりが人生の設計の狂いを招き、身の破滅に至る。自らの欲望のために苦の坂道を転がり落ちているのです。

苦からの解脱とは欲望を無くすことではありません。欲望がなくなれば私たちの努力もなくなってしまいます。要は佛様の智慧を心の中心に置き、欲望をうまく制御して生きていくことです。佛さまの教えを聞いて、信仰を持って、心の安らぎを得ることです。阿弥陀佛の救わずにはいられない御心に接しますと、佛さまの智慧の光によって私の煩惱が転じられて、そこに喜びの心が生まれ心身共に柔らかくなることができるのです。

【参考】

其有衆生 遇斯光者 三垢消滅 身意柔軟 歡喜踊躍 善心生焉。若在三塗勤苦之處 見此光明 皆得休息 無復苦惱 壽終之後 皆蒙解脫。『無量壽經』

(この光にあう者 三垢消滅し 身意柔軟にして 歡喜踊躍し 善心生ず。もし三塗の勤苦の処に在りてこの光明を見たてまつれば みな休息をえて また苦惱なく 寿終わりてのち みな解脫をこうむる)

いじめについて 2006/11

いじめによる中高生の自殺が相次いでいます。これだけいろいろな場所で命の尊さ、人権の擁護が叫ばれているにもかかわらず、学校の内外でいじめが後を断ちません。しかも、一人でなく集団でいじめるとい人として最も卑劣なやり方が蔓延しています。まさに“赤信号、みんなで渡れば怖くない”で、罪悪感が希薄になるのでしょうか。人は知的能力、運動能力、美的能力など生まれて持ち合わせた能力には差があります。しかし、生きることはすべての人に等しく与えられた能力なのです。命にかかわる心の問題においてはすべての人は平等です。

また、いじめの問題では学校や地域など組織の対応や管理能力が問題にされますが、いじめの根源は人の心にあり、佛教でいう「悲田」の心、愛他理念が失われていることにあるように思われます。

人間がこの世に生を受けることは難しく、寿命を全うすることも難しいことです。さらに難しいことは、いのちの尊さと、人間が持つ罪障に気づくことです。以前にお話ししたように、人の思いはどこへも行くことができます。しかし、どこに赴こうとも人は自分より愛しいものを見いだすことはできません。それと同じく、他の人も自分がこの上もなく愛しいのです。自分を愛しいと知る者は他の人を害してはならないのです。だから、他人をいじめて大切にできない人は、自分を大事にできない人なのです。

このことを頭で理解できていても、人はしてはいけないことを思わずしたり、言ってはならないことを言ってしまいます。恥ずかしいことや浅ましい考えがふっと出て、「あんな奴、いなければいいのに」と思ったりするのです。人は心身共にいろいろな過ちを犯す罪深き凡夫なのです。

人の一生は、刻々の今が連なり過去のすべてが定まります。その時は大層悲しかった、辛かった。しかし、あの悲しいこと辛いことがあったからこそ、今の私がある。この世の一切の事柄は、私が生きていくのに必要不可欠のもので、大きな働きに包まれて生きている。そのことが結局ありがたいことであつたと、深い味わいを持って蘇ってくる。そのような人生を歩むには善知識に出会うことが必要です。

善知識の導きにより、かけがえのないいのちの叫びに耳を傾けて、多くの人たちや佛さまに願われて今を生きていることに目覚め、手を合わせて感謝する心を持ちたいものです。

「たった一人しかない自分を、たった一度しかない人生を本当に生かさなかつたら人間に生まれてきた甲斐がないじゃないか」(山本有三『路傍の石』より)

父母孝養について 2006/12

最近「親子の絆」という言葉も聞かれなくなりました。若年層の犯罪やいじめの問題も、家庭における親子の絆が喪失し社会生活上の抑止力がなくなったことにも一因があるように思われます。今回はこの世に生を受けた私たちに求められる「父母孝養」について、少しむずかしくなりますが経典に基づいて考えてみましょう。

まず私事になりますが、私は佛に仕える者として日々勤行礼拝します。佛さまを礼拝しているのですが、頭を下げるたびに思うことがあります。この私がこの世に存在し、多くの人々に支えられている有り難さと共に自分の内にいまだに芽生える罪障に想いが至ります。今でも思い出されるのは平成十三年に九十三歳で亡くなった母のことです。母が九十歳のころ、母を背負って京都駅のホームを下りました。母は私にしっかりとおぶさらず後ろへ振り返るものですから、階段を三分の二ほど下りたときに私は尻もちをついてしまったのです。下にいた方が駆け寄って助けて下さったので事なきを得たのですが、私は母にもっとしっかりとおぶさっていれば転ばずに済んだのにと不平を言ったのです。当時は自分の思いを前面に押し出して人を非難して生きていたのです。その私に、浄土三部経の一つ『観無量寿経』が新たな問いを投げかけてくれたのです。

『観無量寿経』は、初めに王舎城の悲劇といわれる物語を説きます。それは、阿闍世(あじゃせ)が父を殺し母をも殺そうとする事件を述べます。母である韋提希(いだいけ)はお釈迦様に向かって、「私は何の罪があつてこの悪い子を生んだのでしょうか」と尋ねます。さらに、「このように憂たり、煩ったりすることのない処を教えて下さい」と我が身を投げ出し、我が罪をすべて懺悔しますからとお釈迦さまにすべてを委ねるのです。そこでお釈迦さまは「当修三福」といって、三つの福を修めることを勧めます。その第一として父母に孝養し、師長に奉事し、衆生縁の慈悲で生けるものを殺さず十善業を修する(孝養父母 奉事師長 慈心不殺 修十善業)ことをお説きになります。

善導大師は『観経疏』の序文義の中でこのことを説明され、西山上人も注釈を加えられています。これによると、「私がこの世に生をうけるのは、父母の因縁が相待(そうだい:二つのものが互いに相対関連して存すること)したからである。だから、必ず孝養父母の善根を生ずるのである。父があり母があつて、二人そろって因にむくいて果報の我が身が始めてこの世に授かることが出来たのである。これを内因として、父母の精血を以て外縁とし、因縁和合するが故にこの身が存在するのである。だから父母の恩は重いのである。・・・その恩を知らず、徳を失うものを不幸者として畜生と異なることなし」と戒め、父母は世間の福田の極みであるとされます。両親共に恩があり、ことわざにも「父の恩は山より高く、母の恩は海より深し」とありますが、母は懷妊から出産そして扶育と子にかかわることひとかたならず、母の恩は特に深いのです。

このようにみてきますと、誰でも出来ることで一番大切でそして一番忘れていることが、実は「孝養父母」と「奉事師長」であることです。念佛往生はすべて阿弥陀佛にあるのですが、いったん信心が確立した暁には三福を修し、もろもろの善を弥陀の功德として修していかなければならないのです。『観経』では、三福を修める業を「過去・現在・未来三世の諸佛の浄業の正因なり」といい、西山上人は『他筆鈔・定善義』の中で「三業に起こすところの行を念佛と云うなり」とお示しです。

法然上人と今、すべてのいのち（その２） 2007/01

日本は1970年ごろから高齢化社会に向かい、今は65歳以上の方が人口の17%を越えて世界に例のない速さで高齢社会に向かっています。現役世代の減少に伴う年金、医療、介護などの社会保障負担の問題など悲観的な議論が目立ち、今のままでは高齢者は社会に重荷と考える風潮が生まれかねません。高齢者が生きがいを持ち、また社会に貢献していけるような前向きな議論がなされるべきでしょう。

今年から団塊の世代が定年退職を迎えます。さあこれからあれもしよう、これもしようと考えておられる方も多いでしょう。時間ができた途端に心のほりを無くし連れ合いに先立たれたらと不安を覚えたり、逆に連れ合いにストレスを与えてギクシャクしたりという方も多いでしょう。歳とともに人間ができてきて“枯れ”て良くなるどころか、孤独感にさいなまれ我がもろに出てきて悪い方向ばかりに考えが向かってしまうことも多いでしょう。“いのち”という言葉も自分の寿命という言葉にすり替わり、生きることより死に考えが向かってしまいます。佛教では、煩惱を抱えた我々が生きることは「生老病死」の四苦であるといえます。生まれることも死ぬことも一対であり、それぞれ関連したものと考えるべきなのですが、まさに老・病・死というものを身近に感じてしまいます。

“いのち”は漢字では「命」ですが、和言葉としての“いのち”には「息」という意味が含まれています。息をすることがすなわち生きることで“いのち”なのです。「息を引き取る」と言いますが、これは残された者が先立つ人の息、すなわち“いのち”を引き継ぐという意味であり、日本には“いのち”の継承の考えが根付いています。また日本の食卓では「いただきます」と言います。これは、私たちは多くの動植物の“いのち”をいただいて生かされていることに対する感謝の言葉です。私たちがこの世で生きる寿命も“いのち”ですが、“いのち”とは本来、過去から未来へ連綿と続く永遠のものなのです。人間はひとりでは生きられません。多くの人々の支えを受けねばならず、多くの“いのち”によって生かされていることに思いを馳せなければなりません。

法然上人はお念佛によって、この永遠の“いのち”と一体になることを勧められたのです。学問や知識を究めたり、厳しい修行をして悟りを得るのではなく、阿弥陀さまの謂われを聴いて、半信半疑でもいいから身を任せていくのです。そして、間違いなく阿弥陀さまと一体になった世界に気づくことができたなら、自分自身を磨き上げていかなくてもなりません。お念佛の道は年齢に関係なく歩み出すことができます。たとえ自分に残された寿命は短くとも、連綿と続く“いのち”に思いを馳せ、終生教を学び続けて互いに励まし合い、語らい合って充実した老年を生きたいものです。このような生き方を目指せば、豊かで明るい高齢社会をかならず築けるでしょう。

【参考】

- ・ いとも麗しき国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いにことわりを説き聞かせる。『ダンマパダ』151
- ・ 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。かれの肉は増えるが、かれの智慧は増えない。『ダンマパダ』152

お葬式に考えること (2007/02)

今年六十歳で亡くなられた和尚さんがおられます。新しい時代の中、お寺のよき伝統を守り佛

さまの教えを伝えるとともに、PTA 活動、社会奉仕活動そして地域社会での様々な取り組みにかかわってこられた方です。この和尚さんは亡くなられるとき、「勝手葬はだめだよ。送られる人の本当の気持ちを分かって・・・」と言われました。常々お葬式を行ったり見たりしてこられたのですが、最近では送られる人のことより送る側の都合でお葬式が行われていることを感じられ、自分は最後の最後に今までご縁のあった方々に送られて浄土へ帰りたいと思われたのでしょうか。お葬式は最近では世間や体面にとらわれた単なる儀式となっていることは否めません。世間には、佛教＝葬式という紋切り型の見方も蔓延しています。みかえり法話でも度々述べたことですが、佛教が私たちに勧めるのは、先立つ人のいのちを受け継ぎ、佛の慈悲を感得しつつこの世を生き抜くことであり、「人生死んだらおしまい」ではなくましてや葬儀を執り行うための儀典の教えではありません。

お葬式は、先立たれた方に思いを寄せ、そして亡き人に対する自分の行為を反省し生前の徳を思う機会です。これは取りも直さず報恩感謝の生活を諭すもので、このいたらぬ私が多くの人や物に支えられて、多くの人に迷惑をかけているにもかかわらず生かされていることに感謝するものです。言い換えれば、自分の罪障に気づき反省(懺悔滅罪:さんげめつざい)し、今生きている自分に寄せられる功德や先亡の人々の徳に気づくことでしょう。人は生きていくことの難しさ、煩わしさの中で生きる道を探し、生きています。多くの苦悩に耐えるため、先立たれた人に問いかけたりします。そうすることによって、心の中に深い苦悩を秘めながらも耐えていけるのです。お葬式とは亡き人を通じて佛さまの光明に思いを馳せ、この世に生まれ、たった一度きりの人生、二度とない人生、人に代わってもらえない人生を生きる意味合いを考え、自分にできることを誓う(誓願立志)時なのです。残された人間の値打ちは、誓願立志に生きるそのことにまずあるのです。

私たち念佛者には、阿弥陀佛の王本願を領解し、揺るぎない信心を持ち、佛の目を持ってこの世を生き抜くことを求められます。この本願を領解し揺るぎない信心を持つことが、まさに佛さまの光明に触れることです。では、どのようにすれば佛さまの光明に思いを馳せることができるのでしょうか。『観無量寿経』に説かれる十六の観法の最初に、日没の方向に極楽浄土を想定して浄土に生まれることを願う「日想観」があります。浄土宗の高祖、善導大師は太陽が真西に沈む春分、秋分の日にこの日想観を勧められました。法然上人もいろいろところで日想観を実践されました。山の彼方に、大海原のはるか水平線にそして荒野の地平線に沈んでいく夕日を観て西方にある浄土を思い、黒雲に遮られぬ日輪を観て自分自身の罪障に気づくこと、これを佛さまの光明を想起する手段とするのです。心を凝らして日輪を眺めて、亡き人の浄土往生に思いを馳せ、そしてお葬式の意味を今一度問い直してみたいものです。

“安心（あんじん）”を得る（2007/03）

今の時代を生きている私たちは、“安心”を“不安”という言葉と一対にして心配ごとがなくて心が安らぐ意味で使っています。より良い生活をしたい、少なくとも今の生活を維持したいと思うのは人の常です。美味しいものを食べて、きれいな家に住み、恥ずかしくないお洒落をしたい。今の生活を維持できなくなるようなことは避けて通りたい。また自分は家族を信じ、家族のためにつくしている、友人とも心を通いあっていると思いつつも、心のどこかで信じて任せきることができない。私が痴呆症や寝たきりになったら家族は温かく介抱してくれるのだろうか、私が困難に陥ったとき友人は助けてくれるのだろうか？ 私たちにとって不安の種は尽きません。佛教の教えに基づいて不安の種を考えてみますと、これらは人間の持つ欲や物事に対する執着に起因しており、私たちの心の問題であることに気づきます。欲や執着を捨て切れたらどんなにスッキリするか分かっているのですが、捨て

きれないのが私たち人間なのです。このような私たちが“安心”を得るにはどうすればいいのでしょうか。

私たちは自分の心にしっかりと向き合うことを避けて神佛や占いに頼り、それが自分の迷いや不安から逃れる道だと思いがちです。自分で考えることを避け、他に責任転嫁できる安易な道だからです。しかし、佛教でいう安心は意味が異なります。自分の心と真正面から向き合い、人間は利己主義で知らず知らずに罪を犯し煩悩のまっただ中で生きていることをまず知る。そして佛の教えを領解(理屈ぬきで理解すること)して揺らぐことのない境地になることを“安心(あんじん)”といいます。私たちが宗祖と仰ぐ法然上人は一枚起請文に浄土宗の根本義を簡潔に述べておられます。その中に“安心起行”という言葉があります。法然上人が言われる安心とは三心(至誠心、深心、廻向発願心)を確立した不動の信念、すなわち阿弥陀佛の救いを深く信ずる心をいいます。そして、お念佛を唱えることが心を不動のものとするための私たち煩惱多き者の行であると。

姿、形そして匂いもない佛さまの世界に気づかせていただくと、まったく違った世界を識ることができます。世の中の見方が拡がり人生観も変わってきます。佛さまを信じることができると、心の塵である不安が洗われて落ち着き(洗心)、欲望や執着を持ちつつもそれをコントロールしながら過ごすことのできる道が見えてきます。

信仰を持つとは、高邁な識見が身につくことでもなく、また娑婆世界でいう善い人間になるためでもありません。信仰により自分自身の心が落ち着き、安らかな心で日々を送ることができれば、周りに対しても知らず知らずに“和顔愛語”を実践しつつ生きていけるのです。いつも佛さまと一緒に生活をしている世界に目覚められることを願って今回の法話を終わります。

三心(さんじん):往生について(その2) 2005/04 を参照

病は善智識 (2007/04)

今回は私たちが避けて通ることのできない「病」について考えてみましょう。永観堂の正式名は聖衆来迎山無量寿院禅林寺ですが、第七代法主の永観律師(1033(長元五年)－1111(天永二年))の徳があまりに高く、人々には永観堂と通称されています。この永観律師は七十九歳の生涯を送られましたが、三十歳以降は「風疾相侵され、氣力羸弱(るいじゃく)す。自ら云う、病はこれ真の善智識なり。我病痾(びょうあ)に依りて、いよいよ浮生を厭うと云々」とあるように病をかかえながらの生活を送られました。

人はこの世に生を受けたら、健康で長生きして幸せに暮らしたいと願うものです。ところが、私たちは医者にかかるほどではなくても心の病、体の病など何らかの病気を抱えて生きています。佛教でも四苦(生老病死)というように病を人の持つ四つの苦の一つに挙げ、病は根本的な苦でありこれを無理矢理除くことはできず、その根源を探りこれにどのように対処すべきかを教えます。明治以降、西欧の文化が取り入れられ、言葉や思考法も西欧流になってきました。現代では「闘病」という言葉が示すように、病は闘う対象で悪いものであり早期発見・早期治療でやっつけなければならぬように考えられています。医療技術は進み、以前には治らないとされていた難病も治癒できるようになりました。ところが、ある人がペースメーカーを入れたら今まで何ともなかった臓器に異変が起きたなどの例に見られるように、長年付きあってきた病気はその人の一部分をなしており、今急にそれを直してしまったら病気はなくなっても他に変調をきたしてしまうことも大いにあり得ることです。

一方、日本特有の「持病」という言い方は、病を持ちながらもそれにとらわれず、病とともにいのち

を育み心の安定した日暮らしを送ることを含んでいます。その考え方の背景には佛教の教えが流れています。信仰を持った人は、毎日の生活を「無常」という真実に随順させながら暮らす努力をしています。そのことを頭では理解していてもなかなか出来ないのが私たち人間なのです。以前にもお話したのですが、この世のことはすべて縁によっているものであり、身に起こる様々なことは逃げることも避けることも出来ません。自分に降りかかるすべての事柄には、真向かいに向き合わざるを得ないのです。病も例外ではなく、「思い通りにならない、完治しない」と嘆くよりも無理をせず病とうまく付きあった生活を心がける、このような現実認識をもつことが大切です。永観律師は人生の大半を病痾の中で過ごされたのですが、病と向き合い様々なことを学ばれたのです。このことを「病はこれ真の善智識」という言葉で表されたのです。病のおかげでいのちの不思議に出会い、完治しなくても病をかかえたまま阿弥陀佛の救いの中に自らのいのちがあることを示されたのです。

病痾:長患い。長引く病。久しく癒えない病。久病、宿痾、宿疾、痾疾など同意。

善智識:教えを説いて正しい道に導く人。

競争意識 (2007/05)

「二郎！勉強せい。しっかり勉強をしろ」

「何で？」

「勉強しないといい学校に入れないぞ。少しは一郎を見習え！」

「兄さんは兄さん。べつにいい学校に入れなくてもいいよ」

「いい学校を出ないといい会社に入れない」

「べつにいい会社なんか行かなくてもいい」

「いい会社に勤めないといい人と結婚できないぞ」

「べつにそんな人と結婚したいと思わない！」

「幸せな家庭を築くためだ」

「いい人ってどんな人？お母さんみたいな人か？うちは幸せな家庭か？」

「……………」

勉強することは社会に生きる人間として必要なことですが、競争をあおり勉強の結果をあたかもその代償のように捉えては本来の目的から外れてしまいます。家庭においても、また学校においてもややもするとテストの点数で競争をあおり、成績で序列をつくり、一律の物差しでグループ分けして差別化してしまいます。今日の競争社会では、勉強にかかわらずすべてのことで我が子と他人、また自分と他人を比べて無意識のうちに羨んだり、蔑んだりしています。競争意識に根付く優越感、劣等感はぬぐい去ることのできない人の煩惱です。

宗教者といえども人間です。よほど高德な人でない限り競争意識をぬぐい去ることは難しいことです。善導大師や法然上人がお出ましになるまでの佛道は菩薩の道を歩むことでした。これは取りも直さず自らを頼りとして修行に励む道でした。しかし、たとえ師匠があってもあるいは同行者があっても多くの僧にとっては世間と同じことでした。何が同じかといえば、菩薩道といいつつも常に競争の中で修行していたのです。自力の修行は修行者それぞれが持つ資質で異なってきます。自我の思いを捨てきれず行いう修行ですから、他人が自分より優れているとそねみ、自分より劣っているのを見ると驕慢してしまい、本来の菩薩道からどんどん外れていってしまうのです。

阿弥陀さまの願を篤(たの)む修行者は、五乗齊入といって修行者の勝劣を問わないのです。阿弥陀さまの願力によって報土に生じることができると信じるのが他力の道です。とはいえ、努力は必要なしといわれれば努力している者には納得しがたいものです。また、なまじ芸才や頭脳があるとそれを頼みに名声を得ようとして本来の信心から外れていくのです。もっと悪いのは、自分は信心に励まず他人の信心まで妨げようとすることです。

浄土他力の教えは、自他に囚われることなく阿弥陀佛の弘願相応の行を自分自身にしっかりと戴くことです。法然上人の「お念佛の教え」は、著名な学者によって佛さまの存在を証明する科学の世界ではありません。お念佛を申すのに何の意味があるのかと理屈を述べる世界でもありません。人といったさらに競争せず、正しい教えを聴きしっかりと受け止めて自分の心で磨き上げていくことを求める信心の世界です。

【参考】

西山国師の『往生礼賛自筆御諸鈔』(巻第二)に、前序の懺悔の説明のあとに以下の文がある。

「・・・故に、心に輕慢を生じ業行を作すと雖も常に名利と相応するが故に、人我自ら覆ひて同行善智識に親近せざるが故に樂いて雜縁に近づきて往生の正行を自障障他するが故なり」

いのちを全うする (2007/06)

現代は豊かで便利な時代です。文化の水準も高まり、物質的にも恵まれた便利な暮らしをおう歌しています。巷では「楽しく生きる」ことが強調され、マスコミではセレブという言葉に冠した不得要領なライフスタイルを煽っています。しかし、「人生を楽しく生きる」ことを目的とするならば、そのためには恥も外聞も一時のこととし、まずは自分の樂を追い求めた方が得ということになってしまいます。いまの時代は豊かで便利であると同時に、人が「いのち」というものに鈍感になってその大切さ、貴さがわからなくなっている時代です。現代人は多くの教育を受けて論理的に物事を観察する習慣を身につけ、自分は高い見識と人格を身につけていると思いがちですが、現実はどこごとく凡夫で、喜び、哀しみ、貪り、怒り、嫉む心を持っています。このため、こんなはずではないと行き詰まり苦悩して、あげくの果てにあなたのせいだと相手を責めて生きています。まことに身勝手な生き方です。実は私たちが生きるということは、もののいのちをいただいて生きているのです。自分だけ勝手な生き方をすればいいのではなく、頂きたいいのちを全うさせる生き方を心がけなければなりません。飽食の時代といわれる今、必要以上にもののいのちを奪ったり、飽きれば捨ててしまうようなもったいないことを決してしてはなりません。

人は生まれれば必ず死を迎えます。人の人生観は死生観と密接に結びついています。楽しい人生のみに執着すると、その反動として死後について不安を抱き、霊や死後の世界を言い立てて人の不安をあおる怪しげな集団に走ったりします。佛教では死後については「無記」の立場をとり、経験できないものについての無用な論争を避けます。たとえ死後がどのようなであろうと、人は生まれ、老い、病み、死に、嘆き、哀しみ、貪り、怒り、嫉むことに変わりはなく、佛教はこれら苦から解脱し悟りの境地を目指して生きることを私たちに教えます。ただし、佛教でいう悟りとは真理を領解することであり、分別によって概念的に理解することではありません。

私たちが目指す悟りの境地は「浄土」ですが、浄土とは佛さまの悟りの境涯でもあります。私たちは道徳的規範を守ろうと思えば何かを決意すればできるでしょう。しかし、悟りは決意すればできる

ものではありません。「止悪修善」を心がければ達成できるものでもありません。阿弥陀さまはできればできたで喜ばれ、できなければできないで悲しみの涙を流されます。それは私たちが業縁の中に生きており、その中でできることをさせていただくしかないからです。さまざまな思いで取り繕った自分ではなく、現実の自分のままで一生涯歩み続けて目指す境涯です。それは『阿弥陀経』に「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」と説かれている世界です。浄土に生きるというのは、赤は赤のまま白は白のままで十分に安んじて生きていける世界のことで、それを安養の浄土、安樂の浄土、常樂の浄土といいます。また「願共諸衆生往生安樂国」とあるように、頂いた多くのいのちにより私たちは生かされていることに感謝すること、ありのままで浄土に生きることを願い精進すること、これが頂きたいのちを全うさせると共に私たちもいのちを全うすることなのです。

佛法は人により伝わる (2007/07)

法然上人は岡山の菩提寺の観覚上人に8歳で弟子入りされました。そして12歳で比叡山北谷の源光上人に2年間師事した後、14歳で東塔西谷の功德院の皇円の下で円頓戒を受けられ、17歳の時に西塔黒谷の叡空上人の室に入られました。そして、法然上人はすべての人が救われる真実の道があると信じられ、法の人善導大師に深く帰依されました。善導大師から佛法を伝えられて法然上人という法の人が育ち、法然上人は西山善慧上人という法の人を育てられました。浄土の法門はこのように人を通して伝えられてきました。

『大智度論』に「信を得ることによって佛の教えの海に入ることができる。そして、その海を渡す力となるのは正しい智慧である」とあります。正しい信仰を起こすことが佛道の基本で、信とは真実の道があるということを信じること、その道を得た人がいるということを信じることでもあるのです。浄土門でいえば、まず法然上人の教えに出会って正しい信仰を持つこと、それによって私たちは阿弥陀佛のお慈悲の中に日々暮らせていただいていることに気づくこと、これによって私たちは佛法の海を渡ることができるのです。私たちが法の人になるのは至難の業ですが、私たちは阿弥陀佛の智慧を授かることによって少なくとも自己中心的な行動をしている自分の姿に目覚め、すべて相互に依存しあって存在していることに気づくことはできます。自分が自分だけで生きているのではなく、世の中が自分を中心に動いてゆくものでもなく、他のあらゆるものとの係わり合いの中で今の自分があるということに考え到ります。そして生き方も「自分のために」から「他のために」と変化していきます。

とはいっても、迷い多き私たちには気を付けなければならないことがあります。私たちの人生にはさまざまな出会いがあり、出会った人々から多くのことを学ぶことができます。しかし、私たちは本来平等で対等で同じであると思いつつも、どこかで自分の方が上にあることを確認して安心を得ようとしがちです。これでは信を得たことになりません。宗教の混乱している現代では人を信じることは難しいことですが、出会った人の中に法を体得した人がいることを信じて佛の教えに目覚めることを求められているのではないのでしょうか。佛さまの教えは迷った挙げ句にすぎるものではなく、人を通して学び取っていくものです。要は私たちに学ぶ姿勢、手を合わせる姿勢があるかにかかっています。佛法は人によって伝わるのです。

円頓戒(えんどんかい):完全自在な佛道修行者の保つ戒律。天台宗で行う大乘戒。

「佛法の大海は信を能入となし、智を能度となす」『大智度論』

人間救済の意味 (2007/08)

七月に入って台風4号が通過したと思った矢先、新潟県中越沖地震が起こり多くの方が被災されました。心からお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興を祈念いたします。さて、平日頃は自然を征服したかのように振る舞っている人間ですが、地震、台風などの自然の猛威にさらされるとき、改めて大自然の力は大きく人間の力はいかに小さいかを思い知らされます。災害が過ぎて時間がたつと、人間の小ささを忘れ去り自然をコントロールできるように振る舞い、人間の持つ愚かさや迷いに気づくこともなく、ましてや人間の内なるものに目を向けるなどは考えもしないのが私たち人間です。

お釈迦様は厳敏な眼で“人間の愚かさ”を見つめられてその根本原因“無明”に到達されたのです。そして人として生まれたのに人として生ききれず、日々三悪道を彷徨(さまよ)っている姿を見て人間救済の大悲を起こされ、人として生きる道を示されたのです。にもかかわらず現代に生きる私たちはどうでしょうか。溢れかえる物や情報の中で、自分の浅ましい姿に少しも気づかず、自己を見失い、ものの真実の相さえ自分勝手に歪曲してそれを真実と思い込む、まさに“自我妄執”にあります。自分を真に知ることは人生において最も大切なことなのですが・・・。

法然上人はご自身のことを“愚痴の法然房”と仰せでしたが、お釈迦様と同じ道にたどり着かれていたのです。上人が師と仰がれる善導大師は懺悔(さんげ)に厳しいお方で、このように言われています。「外見だけを取り繕って、内なる心が嘘偽りに満ちているこの身を自覚して、我がはからいを捨てて愚かさは愚かさのまま素直に認め、大いなる自然から頂きたいのちに感謝し、念念に称名して常に懺悔してよく佛を念ずれば佛還って私のことを憶したまう」と。また、お釈迦様も常に「自分の言動でどこかおかしいところがあれば言ってくれ。私はそれを懺悔するだろう」と言われていました。

法然上人も自分に厳しい方で、いつも“今”を基本にしておられました。愚かで愚痴ばかり出る我が身を赤裸々にして、阿弥陀佛にお任せしてお念佛することの尊さを身をもってお示しになりました。何も知らないものが称えても必ずこの世でお浄土に生まれる世界があることに気づいたならば、思わず喜びが沸き起こりお念佛を称えることができると言われるのです。私たちがどうしても愚痴を言うのは、一番根底に持つ煩惱の表れです。このような私たち人間が救済される道は、自分を真に知ること以外にありません。法然上人は、愚痴の身であることに気づいて阿弥陀佛にすべてをお任せする気持ちになれば、迷いが深く心が暗くてもそこに佛に認められ許されている自分がいることに気づき、安心を得ることができるとお教えなのです。

【参考】

- ・ もしも愚者がみずから愚かであると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思ふ者こそ愚者だと言われる。『ダンマパダ』63(中村元訳)
- ・ 愚かな者は、悪いことを行っても、その報いの表れないあいだは、それを蜜のように思いなす。しかしその罪の報いの表れたときには、苦悩を受ける。『ダンマパダ』69(中村元訳)
- ・ 外に賢善精進の相を現ずることを得ざれば、内に虚仮を懷きて貪瞋邪偽、奸詐百端にして侵難し、蛇蝎に同じ。三業を起こすと雖も名づけて雑毒の善とする。亦虚仮の行と名づく、真実の業と名づけざる也。『観経疏』善導大師
- ・ 念念称名常懺悔 人能念佛佛還憶。『般舟讚』善導大師

和顔愛語 (2007/09)

鏡に映る顔を見てどう思われるでしょうか。また、町に出てすれ違う人々の顔を見てどう感じられるでしょうか。はっと自分の言動に気づいたときや、周りの人々の言葉をなにげなく耳にしたとき、どのような思いを抱かれますか。仏頂面だったり、猜疑に満ちたまなざしを感じたり、とげとげしい言葉に顔をしかめたりすることが多いのではないのでしょうか。今の人は本当に微笑まなくなりました。モノと情報に翻弄されて、無くていいものに執着し、追い求めて手に入らないと怒り、人が手に入れるとねたみ愚痴をこぼす、いわゆる三毒(貪欲・瞋恚・愚痴)に心を侵されてしまっているからなのです。

人の心は、鶯が美しい声で鳴けば喜ぶのに鳥が騒がしく鳴き立てると嫌悪します。また、花を見ると美しいと思うだけでなく、つい手折って自分のものにしようとしめます。雑草と見るや踏みつけたり抜き取ってしまったりと表面的な見かけや自分の都合で心を動かしてしまいます。しかし、私たちのまわりに存在する“いのち”はどれ一つとっても不要なものはなく、すべては宇宙のはからい、私たち佛教者の言葉では佛さまのはからいによって生かされています。これは何度も述べてきた佛教の根本的な考え方“縁起”ですが、これに気づかないのが人間の愚かさです。

しかし、人間が自己の愚かさ気づくのは悲劇が起こったときでしょう。悲劇に直面すると人は我が身を振り返り、自己中心的な考え方を反省して愚かであったと気づくのです。順風満帆の状況では自分の愚かさには気づかないものですし、気づいたとしてもすぐ忘れてしまうのです。凡夫が救われるという浄土教の教えの説く機縁は、観無量寿経にある王舎城の悲劇なくしては熟さなかったでしょうし、人々は教えに耳を貸すこともなかったでしょう。佛さまは私たちをして、人間の自己中心的な心、愚かさ気づかせて念佛の道に導いてくださっているのです。

佛さまの大いなる力に感謝の気持ちを持つと、自然に手が合わされます。そうすると周りが見えてきて、あらゆる“いのち”に生かされていることに感謝することができるようになります。そのような気持ちを抱かれた方の顔はどのような顔でしょうか。善意に満ち和やかな微笑みを浮かべた顔でしょう。また、このような方の言葉はいたわりと思いやりを含んだ優しいものです。優しい言葉は和やかな顔からしか出ません。「和顔愛語先意承問(わけんあいご せんいじょうもん)」。微笑みの顔と優しい言葉で人に接し、言われるまえに相手の気持ちを察してその望みを満す。人のあたたかさ、おもしろい、やさしさが今の人々に最も欠けているものです。

【参考】

三昧常寂智慧無礙無有虚偽諂曲之心和顔愛語先意承問『無量寿経』

(三昧常寂にして智慧無礙なり。虚偽諂曲の心あることなし。和顔愛語にして、意を先にして承問す。)

念佛の信心 (2007/10)

佛さまの教えを学ぶということは、この身すべてでお釈迦様の明らかにされた正法(しょうぼう)の世界を学び、それを日頃の行いに反映して生きていくことです。お釈迦様が出家されてから以後一貫されていたものは何であったかを問うことでもあります。これは、法然上人が一生涯問い続けられたものは何かということと同じなのです。教えに耳を傾ける中で、私自身が三毒の煩惱にまみれた凡夫であるということをよくよく観察し、自覚していくことが大切です。念佛者の信心とは、往生の道を

究めた先達の教えを聞いてそれは頭で理解するのではなく、日頃の生活の中で自分も往生人になるための実践を心がけることです。私は罪障の相続者であると知って、しかも佛はこの私を放さずしっかりと抱きかかえていてくださることに気づき思わず頭を垂れる、これが往生人への道です。往生は正法です。正法は真理です。すなわち、念佛者の目的は真理を悟ることでもあります。やがてなるべき私の姿は、今手を合わせて拝んでいる阿弥陀佛の極楽世界の佛の一員でしょう。しかし、み佛のお育てをいただいているという自覚は、私自身の姿が顧みられたときに初めてはっきりといただける世界であり、それまでは自分が自分という自己中心の世界です。念佛の信心では、あらゆるものの恵みによって生かされているという広い観点に立って、私自身の行為、存在を考えます。私自身の姿がはっきり把握され、自己中心の生活であり我執の存在であったと思い知らされ、初めてみ佛の世界に目覚めさせられます。これは真理をこの身に観ずることに他ならないのです。

念佛者は「願往生心」がなかったならば往生は縁なきものとなります。人生の目的をしっかりと握ることが大事ではないでしょうか。私たちはそれぞれの領域においてそれぞれの道を真剣に歩んでいますが、信心に根ざした目的がなければ三毒の世界に埋没してしまいます。人生の目的を見据えれば、苦悩、逆境の中にあってもそれらを通して目には見えないけれどもみ佛の世界が自分の中に存在することを感じます。「なすべきことをなしおえた」といえるのは、念佛に生き、み佛と私が一体になる世界を感得していく人生を送ることに他なりません。

【参考】『ダンマパダ』(法句経)から(中村元訳)

- ・人間の身を受けることは難しい。死すべき人々に寿命があるのも難しい。正しい教えを聞くのも難しい。もろもろのみ佛の出現したもうことも難しい。(182)
- ・すべて悪しきことをなさず、善いことを行いなさい、自己の心を浄めること、一これが諸の佛の教えである。(183)

慈 悲 (2007/11)

現代の日本社会には多様な宗教団体があり、それぞれが教えを説いています。しかし、その教えの中には首をかしげざるを得ないことが少なくありません。つい先日もある宗教団体の中で、教えの名の下に集団暴行が行われ人を死に至らしめた事件がありました。12年前にも教祖の指示に従って優秀な若者が善悪の判断を失い犯罪に手を染め、多くの人の命を奪うという痛ましい事件もありました。これらはともに「我欲」が引き起こしたと言えるのではないのでしょうか。自己主張と自己実現を最優先した結果独善に陥り、自我地獄に堕ちたといえるでしょう。私たちはともすれば、「自分にうまいことがありますように」との利己主義的な観点から宗教に期待をかけています。しかし、宗教とは人間として如何に生きるかを自らに問いかけ、如何に実践するかを教えるものです。私たちが現在も佛教を奉じているのは、佛教には「慈悲」の教えが純粋に説かれているからなのです。

お釈迦様の教えも法然上人がお勧めになったこともその基本は人間の歩むべき道です。この教えは永遠不滅の法、すなわち真理なのです。しかし、この法をただ聞いたり、読んだり、知識として知っただけでは不十分で、実際に行うことがなかったら意味がありません。実践の中で初めて法に目覚めることができるのです。

しかし、人間には三毒「貪・瞋・癡」という欲・怒り・愚かさがあります。いつもあれが欲しい、これが欲しいと思い、思い通りに行かないとすぐ腹をたて愚痴を言って満足することを知りません。たまた

ま満足してもすぐに飽きて目移りがして他のものを求めてしまいます。このように私たちは思い患いと満足との間を行ったり来たりしています。私たちの心はまさに振り子であり、一揺れ一揺れが苦悩の繰り返しなのです。私たちは物事の表面・現象だけを見るのではなく、もう少しその中身をじっくり見つめて生きることが必要です。人間の生きている姿は、当然のことですが個々人の存在が元となっています。言い換えれば人間は自己保存のための欲望の存在です。そういう凡夫であっても、深く信仰を身に体していけば自然と周りの人に慈悲の心が伝わるものです。

【参考】

佛心とは大慈悲これなり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂したまう。『観無量寿経』

1. 「衆生を縁とする慈悲」: それぞれに生きている人に慈悲が実現する。
2. 「法縁」: 我々はいろいろなものから構成されている。その構成物から働きが生み出されるが、その働きも個人の存在を構成している。それに対する慈悲である。
3. 「無縁の慈悲」: 我々の存在も、周りの事象もその実態は「空」である。それを突きとめてとらわれない慈悲を実現するところに佛教の奥義がある。

佛さまに全てをまかせる (2007/12)

心より物が優先し物がすべての現代社会に行き詰まり感を感じている人は多く、この現代社会を救うための意識革命が叫ばれ始めています。では、現代社会はどのような社会でしょうか。いうまでもなく西洋に端を発した近代科学の成果を次々に応用し、私たちの生活を便利で豊かにしてきた社会です。しかし、近代科学をもってしても解決の道筋の見えない様々な問題に我々は直面しています。近代科学の根本原則は物事を真偽、有無などに二元分別すること、そして物事の相互作用とその過程を詳細に解析することにあります。二元分別できないことは往々にして神の手にゆだねられます。人の心に対する問題も例外ではありません。しかし、佛教では物事を二つに分別しないでどちらでもないという「無記」があり、無分別をもっとも重視します。分別とは人間の煩悩によって色づけされた判断で物事の本質(「真如」といいます)は到底とらえることができない(「無明」といいます)とし、無分別の境地になって初めて物事の真の姿が見えてくると教えます。これが「佛の智慧」といわれるものですが、我々にはまず到達しえない境地ではありますが目指すことはできます。日々の思い患いやさまざまな計らいごとを捨てて佛の智慧を目指すことを「佛さまに全てをまかせる」と言い換えることができます。

祖先を、そして我々を生み出してきたところのいのち、そのいのちを生み出してきた自然、宇宙のはたらき、ありとあらゆるものの生き様を包み込んでその生き様の通りに生かされていることに「無分別」に気づき、そのことがとりもなおさず弥陀の大願業力であり、大慈大悲であると感じられることが「佛さまに全てをまかせる」ことです。善導大師は「いのち絶えるときに臨んで心顛倒することなく心錯乱することなく、身も心も苦痛なく、身も心も安らかにして禅定に入るがごとく、聖衆が迎えに来て佛の本願に乗り、阿弥陀佛国に上品往生せん」と示されています。身も心も安らかにあるということは身と心が一つになることです。いろいろなものに感覚が囚われ、心も散じているため法を聞いても心で聞けず、身も反応せず、佛に全てをまかせることもできないのです。佛の大慈大悲は無量なる心です。自分一人の安らぎでなく、自らの行いを正し、律し、周りのものとかかわりの中で慈悲の心を持つ安らぎでなければなりません。私たちの周りにあるものにはそれぞれの因縁があります。それぞれの因縁に従って、佛さまに心身全てをまかせきった安らぎの境地が大師のお言葉に表されてい

ます。

道を求めて迷うのが凡夫です。迷いながら悩むのです。佛に全てをまかせることができれば安心して悩めるのです。それが信心です。それに気づいたときに「身を蓮の上に宿している」ときなのです。

【参考】

- ・「願弟子等 臨命終時 心不顛倒 心不錯乱 心不失念 心身無諸苦痛 心身快樂 如入禪定 聖衆現前 乘佛本願 上品往生阿弥陀佛国 到彼国已得六神通 入十方界求摂苦衆生 虚空法界尽 我願亦如是 発願已 至心帰命阿弥陀佛」 善導大師『往生礼讃』
- ・「生きて身を 蓮の上にやどさずば 念佛申す甲斐やなからん」 西山証空上人

お念佛について (2008/01)

法然上人は、お念佛とは貴賤老若男女を問わずただ称えれば往生が叶うのだから、まずお念佛を申すことだと示されています。法然上人は、多くの弟子たちのみならずご自身も不当な所業に遭われましたが、ただ「南無阿弥陀佛」とお念佛を称えて喜びの日々をお過ごしでした。普通の人ならば自暴自棄になってしまう状況の中で、喜びと落ち着きのある日々をおくられたのです。多くの弟子たちは不当な処置を悲憤慷慨しながら、上人はどうしてこのように受け止めることができるのかと疑問に思ったに違いありません。しかし、弟子たちはお念佛一筋に生きておられる上人のお姿やお言葉を見聞きし、その奥底に宿る上人の信心に気づいて自らもお念佛の道を歩んでいったのです。

人が「信心」をおこすきっかけは佛さまの心に触れた人の言葉です。その言葉に触れることによって、信心に縁のない人の心の中に信心が芽生えるのです。人は元気なときはさまざまな行を修行したり、長大なお経をとこなえることができます。しかし、これは自らの計らいに根ざしたもので慢心や驕りを招いたり、また切迫した局面で長くて難しい言葉をとこなえることなどできず、何の救いにもならなかったという結果に終わりがちです。そのような人間にとって心から頼りになる言葉がお念佛であると法然上人は言われるのです。

お念佛を多く称えれば私の功德になるというものではありません。お念佛は称えて救われるのではなく、称えることが救いなのです。お念佛は人が称えているように見えますが、信心の確立した人は自分を越えたものが働きかけ(念佛者は阿弥陀さまと呼びます)で称えさせられていると実感しています。お念佛とは阿弥陀さまの働きかけであり、人の心に至り宿って今まで手つかずであった人の心を変革し、迷いつつも心を空にする阿弥陀さまの力なのです。ですから、自らの計らいを離れて称えるお念佛は、何でも取り入れることのできる純粹無垢な心に根ざした信心なのです。西山上人はこのようなお念佛を「白木の念佛」といわれています。過ぎ去ったものに拘わらず、まだ来ぬものに心を煩わさず、心に佛さまを戴いて、目の前の事実にしっかりと対峙し受け止めて生きる力が持てること、これが白木の念佛の功德でしょう。

【参考】

- ・「南無阿弥陀佛 往生の業は念佛を先と為す」『選択本願念佛集』法然上人
- ・「機に於いては、安心も起行も真少なく、前念も後念も皆愚かなり。妄想顛倒の迷いは日を追ふて深く、寝ても覚めても悪業煩惱にのみほだされいたる身の中より出でる念佛は、いと煩惱にか

はるべしともおぼえぬ上定散の色どり一もなき称名なれども、前念の名号に諸佛の満徳を摂する故に、心水泥濁に染まず無上功德を生ずるなり。なかなか心を添ず申せば生きると信じて、ほればれと南無阿弥陀佛と唱えるが本願の念佛にてはあるなり。此れを白木の念佛とはいふなり。』『勅修御伝』西山上人

法然上人とお念佛 (2008/02)

宗祖法然上人は、13歳で比叡山に登られて43歳のときに山を去られました。法然上人は比叡山において天台教学を修められ、智慧第一の法然房といわれるほど佛教の教えを学ばれた方です。しかし、ご自身は「戒・定・慧の三学全く備わず、愚痴の法然房」とおおせです。上人は学問、修行、実践を通じて三学を全うされたにもかかわらず、ご自身の心は絶えず移ろい騒いでおり「三学の器にあらず」との自覚に到達されて、自分の真の姿をさらけ出すことを躊躇されなかったのです。上人は、多くの人々にとって学問や修行を積むことは難しく、これらが人々の心の救済につながらないことに空しさを感じられていたのです。一体どうすればいいのかと疑問解決の法を探す道を歩み出され、そして出合われたのが阿弥陀佛による万民救済の平等大慈悲の誓願です。

私たちは信心を自ら起こしたように思っていますが、私たちが起こすのは三心(至誠心、深心、廻向発願心)であり、信心とはこの三心に働きかける阿弥陀佛の大悲願心によって起こったものです。お念佛を通じて三心を起こすことにより、お釈迦さまをはじめとして信心の定まった人の勧め「汝一心に正念して直ちに來たれ。我よく汝を護らん」の声を聴くことができるのです。法然上人は、お念佛は私たち衆生側が起こす行ではなく阿弥陀佛の選ばれた行であることに気付かれたのです。すなわち、念佛とはすべての人々に永遠の悦びを与えないかぎり佛にならないとの王本願に発した阿弥陀佛の行であると。

法然上人はご自身の信心を『選択(せんちやく)本願念佛集』と『一枚起請文』に著されています。選択集は時の関白九条兼実の要請によって著されたもので、「選択とはすなはち取捨の義なり」、「選択とは摂め取る事」といわれました。これは大事な言葉で、選択とは選び捨てることでもあり、選び取ったものは自らの分別や計らいを捨てて受容するものであると上人は言われるのです。また、源智の求めに応じて著された『一枚起請文』には、「ただし三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり」とあり、三心は念佛することで備わるものであると述べられています。

人間は才能や気質が様々で、自力で学問、修行、実践を行うことを要求してもそれに耐えられる人もあれば耐えられない人もいます。これでは全ての人々に共通する心の救済の教えとはなりません。上人は、すべての人々が救われる教えとして阿弥陀佛の行である念佛を選択され、それを凡夫がひたすら行すべき道として選ばれたのです。

【参考】

- ・ 三学:みかえり法話 2004/09 を参照
- ・ 三心:みかえり法話 2005/04 を参照
- ・ 「阿弥陀如来余行を以て往生の本願となし給わざる。唯念佛を以て往生の本願となし給えるの文」 法然上人『選択本願念佛集』
- ・ 「汝一心に正念して直ちに來たれ。我よく汝を護らん。……」 善導大師『観経疏 散善義』の「二河白道」の譬えより

お彼岸によせて (2008/03)

人生如何に生きべきか。人生の一番根本的なことについて教えているのが佛教です。私たちはふつう生と死を分けて考えています。佛教が教える死とは悟りの究極の境地“涅槃”ですが、その中でも生死や肉体という囚われから解放されて永遠の真理と一体となった状態、すなわち“空”というものの本質を悟った涅槃(無餘涅槃)です。私たちには生死は一つのもと考える見方が大切です。私たちはこの世に生を受けた時から死に向かって生きています。死とは私たちが向かっているゴールなのですが、見えてほしくないゴールなのです。他人の死は受け入れても、自分の死については受け止めようとしないのが人間です。そのような私たちに佛教がまず教えることは「縁起」です。簡略に言えば、私たちは「生きている」のではなく「生かされている」ということです。先祖からの永いいのちの糸が連なって私のいのちがあり、このいのちは子孫に受け継がれていくものだ(現代科学の言葉で言えば遺伝子情報の継承もその一つでしょう)といえます。そして色々なものに支えられて生かされているいのちが今のいのちであるといえます。したがって、人間の生とは煩惱に惑わされつても“涅槃”へ至るためのいのちの営みであり、日々沸きあがる煩惱と対峙し淨い行い(業)のために“六波羅蜜(布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧)”を心がけることを説きます。そのような行いの結果として人の死があり、それはとりもなおさず悟りの境地であると説くのです。

佛教は、まず私たちの行為があり、その積み重ねの結果として現れてきたものを私たちは世界として認識しているととらえます。世界の中で起こる様々な事象もその根本には人間の行為があるとの視座を貫いているのです。私たちの行いが、煩惱に翻弄されて迷いの世界を現出するのか、あるいは菩薩の悟りを発心して淨い世界を現出するのか、要は世界のあり方は私たちの行いにかかっていると説きます。

お念佛の教えでは「指方立相」の西方淨土があります。これはここで述べた“涅槃”と同じ意味合いといってもいいでしょう。教えでは「指方立相」の西方淨土は、ある方角に、ある特定のかたちを以て存在するとされています。しかし、これは淨土を私たちの目に見える具体的な形象を持つものとして説明しているのであって、阿弥陀佛の国はある瞬間に奇跡的に現れるものではありません。佛が菩薩として願を立て修行を積んでいく、そういう果てに生まれた世界であって、私たちが淨い行いを積み上げることによって初めて私たちの心眼に見える世界なのです。では、その心眼をどうして開くのか。そのためには師となる人から法、正しい教えを繰り返し聞くこと、お念佛を通じて波立つ心を鎮め六波羅蜜の徳目を修することが肝要です。堪え忍ぶことの多い日々の生活は思い煩うことばかりです。法然上人の教えを戴き、朝起きたらお念佛、御飯を戴く前後にもお念佛、いい時も辛い時もお念佛、全てのいのちの中に佛を見いだす生活を心がけたいものです。

【参考】

・(つねに仰せられける御詞)「いけば念佛の功つもり、死なば淨土にまいりなむ。とてもかくてもこの身には、思いわづらふ事もなきと思ぬれば、死生ともにわづらいなし。」法然上人『48 卷伝』(第21)

・「現世をすぐべきようは念佛の申されんようにすぐべし。念佛のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすてて、これをとどむべし。」法然上人『和語灯録』(巻 5)

往生と親縁（2008/04）

2005 年の法話の中で、往生には当得往生と即便往生があることをお話ししました。浄土三部経の一つ『無量寿経』には「即得往生住不退轉」という言葉があります。本来の意味は阿弥陀佛の名号を聞き、念佛して往生を願う者は、来生に極楽往生して不退轉（戻ることのない）の位に住することができるというものです。平易に言えば“即得往生”とはこの人生において阿弥陀佛の教えに気づくということです。浄土に生まれるとか地獄に堕ちるとよく言いますが、これはそのような別世界の存在を客観的に説明するものでもなく、また観念的に説明するものでもありません。浄土往生は自分のことであり、阿弥陀佛の願いの中に生きるということを自分の心の奥底で実感、体験して受け止めるものです。

佛教では、私たちに戒を守り修行の実践を日常の生活習慣として行うことを求めます。毎日、同じことを繰り返す。そしてそれらが生活習慣として根付き、人間が少しましに育っていく。自分の心を育てることによって心が安らかになり、今まで見えなかった何かが見えてくる。繰り返して阿弥陀佛の教えを聞くうちに、ハッと思い当たり気づくときが阿弥陀佛から信心をいただき、浄土往生の人生が始まるのです。佛さまの“いのち”をいただき、新しく生まれ変わって生きていくのが即得往生なのです。このような信心の人生において佛さまは私達の親とすることができます。これがまさに佛さまとの“親縁”です。阿弥陀佛とは永遠の真理であり、真実のはたらきですが、今この現実の人生の中でいろいろと悩んでいる私たち一人ひとりの幸せを抜きにして阿弥陀佛はましまさないのです。

過去の法話で述べたことですが、阿弥陀佛の第十八願（正しくは法蔵菩薩の願）は、もし貴方が私の願に気づくことができたならば私は貴方の佛になる。もしそうならなかったら、私は貴方の佛にならないというものです。阿弥陀佛の親縁をいただき、佛の心をしみじみと味わいとることができるならば、そのときに法蔵菩薩は私の佛として成佛されるのです。ここで往生と成佛は一体、親子は一体と言うことが成り立つのです。私たちが日々のお勤めで唱える西山勤行式の開經偈に「無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇 我今見聞得受持 願解如来真實義」とあります。これは「佛の説かれる法は深く遭いがたいものであるが、今私はしみじみ味わいとできるようになった。願わくば佛の覚りを領解したい」という意味で、お念佛をとおして佛との親縁に感謝する心を表すものです。

【参考】

・汝らは（みずから）つとめよ。もろもろの如来（修行を完成した人）は（ただ）教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者とは悪魔の束縛からのがれるであろう。

『ダンマパダ』276（中村元訳）

・親縁：善導大師が説かれた三縁（親縁、近縁、増上縁）の一つで、阿弥陀佛の名を唱え、身に佛を礼拝し、心に佛を念ずると、佛のはたらきとが互いに憶念しあって相離れないことをいう。（あらためてお念佛とは 2005/08 を参照）

佛の働き（2008/05）

当派の派祖、証空上人は河内の国磯長（大阪府南河内郡太子町）の聖徳太子御陵や四天王寺に止住され、太子の教えを学ばれました。聖徳太子は日本の佛教の先覚者で、三経義疏（さんぎょうぎしよ：法華義疏、勝鬘経義疏、維摩経義疏）を著されたと言われています。太子はその一つ維摩経義疏のなかでこう述べられています。

如来さまはその智慧が真如の道理と一体になっておられる。しかも永久に形や姿というものを超越されており、彼もなく、此もなく、取もなく、捨というようなこともない。あたかも大虚空をご自身の体としておられ、あらゆるものを照らし抜いておられる。どうして我々の概念や言葉でこれを量ることが出来ようか。如来さまは、その大悲やすむことなく、私ども一人一人の状況に応じて教え導いておられる。だから私のいる所には必ずついてまわられる。

また太子は「世間虚仮、唯佛是真」(『上宮聖徳王帝説』)と申され、世間は虚しく仮のものであり、ただ佛だけが真実である、その真実なる佛さまが虚仮なる世間に働きかけてやまないとおっしゃっています。これを平易に言えば、一体何が善か、何が悪かまったくわからない。しかし如来の御心をいただいてみると、ものの善し悪しが知られてくる。私自身が如来の御心をいただかなければ何もわからない。いただいて初めて「ああ、なるほどそうだったのか」とうなずくことができた時、私自身が佛道に目覚めた時であるということでしょう。

法然上人のお歌に「月影のいたらぬさとはなけれども ながむる人のところにぞすむ」、「阿弥陀佛、十こえとなえてまどろまん ながき眠りになりもこそすれ」というのがあります。月とは佛さまです。佛さまはどこもかしこも照らし抜いておられるが、月を眺めて初めて光がその人の心に宿るように、佛さまに面と向かって初めてその心が通じてくるのです。そして法然上人は、夜床に入って南無阿弥陀佛と十遍唱えて眠りにつく、もしそのまま息を引き取ってもお浄土にうまれるのだから安心だといわれるのです。佛さまに任せきったらもう虚空も極楽もない、私もない、ただ佛ひとりの働きだけになる。凡夫は無明、我執のものなればこそ佛はやすまず働きかけられるのです。私の計らいや思惑を捨て、佛さまを至心に信楽(しんぎょう)する絶対他力は佛さまから授けられたものなのです。

このようにみますと佛の働きは形のあるものではありません。しかし、私たちは形あるものを我が目で見ないと不安に陥ります。形なきものを形あるものにして保持しています。しかし、形あるものを念じ続けてついには形なき世界に至ることができます。日々お勤めする勤行は形あるものです。勤行で唱えるお念佛は形なきものです。勤行を務め、お念佛を唱えることによって、形なき佛の世界に至ることができるのです。

法に依りて、人に依らず (2008/06)

2001年6月8日、大阪の大教大付属池田小学校の生徒8名が凶行で亡くなるという痛ましい事件がありました。そして今月8日、東京秋葉原で市民7名が通り魔的凶行で命を落とされました。犯行に共通した背景として、日常の不平不満が高じて自暴自棄となり、自分の周りの人とのつながりを自ら断ち切って、そのはけ口を他人へ危害を加えることに求めていることです。人間は多かれ少なかれ自己中心的、自己保存的な本能に基づいて行動していますが、そこには必ず社会規範や人としての倫理観などが抑止力として働いていて、苦しいなかにも安心のできる世界を見いだそうと努力しています。そのような心の働きの欠落が目立つのです。

私たちはいつも自分に囚われ、自分の思いに依存し、自分に執着しています。このため、他人の行動も話も自分に都合のいいように理解したり、また排斥したりします。よくよく見れば自分に少しでも得な方へ、楽な方へと流されている行動です。佛典には「法に依りて、人に依らず」という言葉があります。佛教の真理の体现者の教え(法)に依り、未だそれを知らない者に依ってはいけないという意味です。過去の法話で述べた言葉で言えば、「善知識」の教えに依って自分の存在を見つめ直し、安心の世界に常住することです。「依る」という言葉を広く解釈すれば佛教の「縁起」の一

面といえるでしょう。私たちの生存は寄り合っている、そういう存在の仕方をしています。従って人の本来的な存在の姿をしっかりと見つめると、私だけで生きているのでもなく、世の中が自分を中心にして動いているものでもなく、周りのあらゆるものとのかかわりの中で私が存在することに気づきます。そうすれば、私の生き方も私中心でなく、他のためにと変わって、お互いがお互いに依ることに目覚めるのです。

現実の私の生きざまは、依存と愛着を取り合わせた姿に他ならないのです。それは私への囚われと私自身と私が執着する者だけの安楽を求める心に根ざしています。宗教者といえども、修行によってある境地に達したとしても、周りとの比較で自分の優位性を思う心を断ち切ることはなかなか難しいことです。すべての人は対等で平等であることを頭では分かっても、やはりどこかで自分の方が上にあるということを確認することで安心し、自分という存在を自ら納得しているのです。「法に依る」とは、自己中心的なものの見方、自分を優位に置く差別意識が一切なくなっているがままのものの姿を見ることができる「正しい教え」に依るべきであるとの教えです。では日々どのようなことに努めるべきか。原始佛典として名高い『スッタニパータ(ブッダのことば)』第三「犀の角」には 41 の教えが説かれています。

【参考】

- ・ 「法に依りて、人に依らず」『涅槃経 四依品』
 - ・ 「……犀の角のようにただひとり歩め」『スッタニパータ』第三 35～75 (中村元訳)
- 「最高の目的を達成するために努力策励し、心がひるむことなく、行いに怠ることなく、堅固な活動をなし、体力と智力を具え、犀の角のようにただひとり歩め」68
- 「慈しみと平静とあわれみと解脱と喜びとを時に応じて修め、世間すべてに背くことなく、犀の角のようにただひとり歩め」73

お念佛の信 (2008/07)

私たちは物事をありのままに知るのではなく、あつてほしいままに知ってしまいます。阿弥陀佛の教えは「ありのままに知ること」なのですが、この教えに本当に会えるまではあつてほしいままに知っていたのです。善導大師が「罪惡生死の凡夫」といわれる罪業とは、私たちがありのままに事実を認知(正知)するのではなく、私たちの都合により“捏造”して事実を認識(誤知)していること、すなわち誤知を積み重ねてそれを正知と思っていることにあります。

お念佛の信とは、善導大師が三心(さんじん)の一つ「深心(じんしん)」という言葉で述べられているように、阿弥陀佛の大慈悲心に出会い、私は物事を誤知捏造するという罪業を重ねてきたという自覚を持つことにあります。阿弥陀佛の大慈悲心に感動して、なるほどと頷くことができ、お念佛を称えることができれば、人種、時代、場所を選ばずその人はその場で確実に心の転換を得ることができるのです。今までは自分の思いを中心に生きていた人が佛様の願いに目覚めた生き方になり、その人の日暮が自然に変わってしまうのです。それは迷いの境涯に向かう生活から悟りの世界に向かう生活に変わることであり、その喜びを心から感じた人はもう後戻りすることは決してありません。このことを佛教では「安心(あんじん)」を得るといいます。安心とは自分が意識的に安定した境地を保つものではありません。阿弥陀佛の大きな働きを感じ、意識せずに「手を合わせ」たり、「ありがとう」や「すみません」という言葉が素直に出るようになる心の落ち着きのことです。言葉を変えれば、自らの計らいや分別をなくして知らず知らずに周りとの融和する生き方でしょう。ちょっとでも相手が寂

しそうな顔をするところからも寂しくなる、相手が喜ぶところからも心の底からうれしくなる。これは人を救うとか助けると意識を離れて身に備わります。信を得たお念佛者の目指すものはそういう生き方なのです。

【参考】

・「信：信仰、心作用（心のはたらき、心所）の一つ、信仰した結果心が澄んで清らかになること、真理に対する確信、真理をよく理解すること。」『佛教語大辞典』中村元

・「深心というは、すなわちこれ深く信ずる心なり。また二種あり。一には決定して深く信ず、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫（こうごう）よりこのかた常に没し、常に流転して出離の縁あることなしと。二には決定して深く信ず、彼の阿弥陀佛四十八願をもて衆生を摂受したまう、疑いなく慮（おもんばかり）なく彼の願力に乗して、定んで往生を得と。」『観経疏』善導大師

生と死 （2008/08）

人は生まれれば老い、そして死を迎えます。また、思わぬ災害でいのちを落とすこともあります。死とは生きとし生けるものが避けることのできないものです。佛教はこの世の苦しみから脱し安らぎへ至る道を教えるものですが、生と死は四苦に数えられています。お釈迦さまは生と死がなぜ人間にとって苦なのを深く考察されました。そして、苦しみを生み出す因果の系列（十二支縁起）を見いだされ、苦の根源は「無明（むみょう：根源的な無知）」であることを悟られました。では、人間は何に対して無明なのか。お釈迦さまは言われます。私たちが生きている現象世界は三つの特徴（漢訳では三法印という）を持つとされ、これを「諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜」という言葉で表されました。この三法印を悟る智慧の曇りが苦の根本原因と言われるのです。

無常を理解するためには無常を見つめなければなりません。それを無常観といいます。人が死ぬときは親も兄弟も友も誰もその人を助けることはできません。財産、地位、権力そして神も佛も死の前には無力です。何一つとして死の事実を拯救（しょうきゅう：救うこと）することはできないのです。この世に存在するものは全てが大きくかわりを持ちながら、同時に個々の存在はたった独りの存在です。個々の存在は生成消滅し、永遠不変ではありえないのです。しかし私たちは永遠を願いそれに執着することで、自ら苦をつくり出しているのです。自分の存在すなわち生も死も自分の計らいを越えたものです。この根源的事実に気づかない智慧の曇りを払い、謙虚に受けとめることができれば無常観の領解につながります。自分は、無常なる移ろいいくものうちにあっても生死を苦と思ふことなく、自分の心の貧しさや愚かさに気づき、自分の行いを自分以外の人やものに振り向けて生きることができます。

現代では無常観も単に「生まれれば死ぬ」という“無常感”に変わっています。これでは「どうせ死ぬのだったら生きているうちに自分の好きなことをして過ごした方が得」という無責任な生き方になってしまいます。本来の無常観を領解できれば、今日一日をいかに生きるかという事に考えを転換しなければなりません。そのためには自分の物差しを捨てて佛法を聞き、全てを佛さまに託すことです。生死解脱の道は佛さまの方から開かれるのです。この世に生まれ難き人間として生を受けさせていただいた生死の因縁の理を領解することができるのです。

【参考】

・「かれらは死に捉えられてあの世に去って行くが、父も子も救わず、親族もその親族も救わな

い」『スッタニパータ』579

- ・「見よ。見守っている親族がとめどもなく悲嘆に暮れているのに、人は屠所に引かれる牛のように、一人ずつ、連れ去られる」『スッタニパータ』580
- ・「人、世間の愛欲の中に在りて、独り生まれ、独り死し、独り去り、独り来る。まさに生きて苦楽の地に至趣すべし。身みずからこれをうけ、代わる者あることなし」
「かの佛の国土、清浄安穩にして、微妙快樂なり。しかも無為泥洹（むいないのん：常住不変の真理の悟り）の道近し」『無量寿経』

凡夫（2008/09）

この世を生きる大半の人は凡夫と呼ばれる者です。凡夫とは佛教用語で「煩惱に束縛されて迷う人」を指しますが、平たく言えば「普通の人」を指す言葉ともいえます。煩惱とは貪・瞋・痴に代表されるように、人の心身をわずらわし惑わせる一切の妄念をいい、百八煩惱、八万四千の煩惱などといわれるように数え切れないほどあります。何十年も前の出来事を引き出して自分の行動が良かったのか悪かったのかと心を悩ましたり、時には自分を責めたり他人を恨んだり、喜怒哀楽の刻々を過ごして心が安らぐときがありません。しかも自分の心をどうにかすることもできないのです。それはいつも自分の思いを中心にして、物事を自分と他という対立関係、ばらばらな関係で見ているからです。

佛教には、人の心の奥深くに自分にこだわる領域、いのちにこだわる領域があり、これを清浄なものに変えることがすなわち悟りであるとの教えがあります。その修行が菩薩道といわれるものであり、その実践項目が六波羅蜜です。しかし、凡夫が六波羅蜜を修して悟りにいたることは不可能に近いと、誰しもが気づいていることです。法然上人は、そのような凡夫が修すべき行は念佛であり、念佛を通して思慮分別を超えた阿弥陀佛の智慧の世界を、我が身に感じ取ることを説かれています。阿弥陀佛は凡夫を離れてましまさず、阿弥陀佛は凡夫が往生してこそ私たち凡夫の佛さまとなられる、阿弥陀佛と私は二にして不離（生佛不二）であるといわれます。阿弥陀佛の働きを頭で理解するのではなく我が身に感じることであれば、私にこだわる心の領域が浄化されて善悪、浄穢、好嫌などを超えて物事を理解できるようになります。そうすれば、私の向こう側の存在として佛さまを捉えて称えていた念佛が、佛さまの働きかけであり、佛さまの「慈悲のはからい」に包まれている行であることに気づきます。凡夫といえども精進努力ができないと決めつけることはできません。凡夫だからこそ一步一步努力を積み重ね、その結果として煩悩の日々の中でも小さな花を咲かすことができます。阿弥陀佛が生佛不二であることを感じられれば、特別なことをせず身近なことを一生涯かけてやり遂げることができ、それが生きる喜びに変わります。

【参考】

- ・「南無阿弥陀佛 佛のみ名と思ひしに 唱うる人の姿なりけり」 西山上人
- ・「衆生佛を憶念すれば 佛もまた衆生を憶念したまう」『観経疏』善導大師

縁と無我（2008/10）

人との出会いのなかに私たちの生活を新たに開拓していくチャンスが潜んでいます。私たちの人

生で何か新しい展開を求めていこうと思えば、自分一人で開拓することはできません。親子の縁、夫婦の縁、友達の縁、職場の縁、地域の縁などさまざまな縁で私たちの生活は成り立っています。佛教では「衆縁所生」といい、多くの縁が集まって相互に依存しあい、そこからものごとが生じると考えます。私たちはある事を達成したとき自分一人で成し遂げたかのように思いがちですが、よくよく考えれば周りの人の助けによって出来たことに気づきます。自分の力量と思っていることもさまざまな縁に依って現れたものであり、縁の中で発揮できたものなのです。良縁、悪縁という言葉があります。しかし、佛教の説く縁は良でも悪でもありません。ものごとの在りようを表す言葉です。善し悪しは私たちが自分の物指しで分別して区別しているだけです。すべての縁が何らかの形で私たちに関わり、その集まりの中から以前にはなかったものがそこに現れるというのが「縁起」の大きな意味です。お互いにあい依るという意味から縁起は「相依性」とも言われます。

信心が深まりますと「やらせていただく」という受け止め方出来るようになります。これは人生は縁起であること、すなわち自分と他は相互に依存しており、お互いが助け合い協力することで自分が生かされていることに気づいた心の持ち方です。この相依性なしには自分というものは成り立たないのですが、私たちには「自分が、自分が」という「我」の意識があり、どうしても相依性の中で自分をとらえることが出来ません。現実の自分は自分の変わることを知りつつも、自分は厳然として存在すると思っています。そこに現実と「我」との矛盾が起こって苦が生じてきます。

縁は固定的なものでなくさまざまに変化していきます。したがって縁によって存在する自分もさまざまに変化していきます。お釈迦さまは「無我」、「無常」ということを言われました。私たちの存在の相依性に気づけば、固定的な自分というものはなく、縁に依って自分のあり方が変わっていくことが理解できます。すなわち、お釈迦さまの言われる「無我」、「無常」は縁起と同じことなのです。また、現代は個性の尊重、自我の確立を重視していますが、これらに対する我々の観念と正反対の見方で洞察したのが佛教のいう縁起や無我です。ものは「在りて在るもの」でなく、相互関係の中で在ると見るのが佛教の根本視点なのです。

【参考】(以下、『佛教語大辞典』中村元著による)

- ・衆縁:もろもろの縁。(衆縁有故生 あらゆる存在は相互に依存しあって生じる)
- ・所生:生ぜられるもの。生む者。両親
- ・諸法無我:すべてのものは、因縁によって生じたものであって実体性がないことをいう。
- ・諸行無常:世の中の一切の現象、万物は常に変転してやむことがないことをいう。
- ・相依(そうえ):相互に依存すること。

相依性とは「これあるときかれあり、これなきときかれなし。これ生ずるによりかれ生じ、これ滅するによりかれ滅す。」で表される縁起の法則

苦悩の克服 (2008/11)

苦悩をいかに克服するか。そこにお釈迦さまの出家の動機がありました。それを示す佛伝に「四門出遊」があります。ある時、シッダッタ王子(出家前のお釈迦さま)が東の門を出ると老人に出会った。南の門を出ると病人に出会った。西の門を出ると死者の弔いに出会った。北の門を出ると修行者に出会った。王子は生老病死の四つの苦しみ(四苦)をわが身のことと捉え、これらの克服の道を考え続けることになられたのです。人間が離れることのできない苦悩をいかに克服するかがお

釈迦さまの悟りなのです。

お釈迦さまは、苦悩が依って生じる原因は人間が本来的に持っている我執であると気づかれました。我執とは、他はさておきまず私という「おれが、おれが」というとらわれと、他はさておきまず私のものという「おれのもの、おれのもの」というとらわれの二つに代表されます。このとらわれ(執着)からさまざまな惑い(煩悩)が生み出されます。惑から身・口・意の三業という行為が生じ、四苦、八苦などの苦悩を引き起こします。自分の思い通りにしようとする我執が思い通りにはならない現実と直面して惑を引き起こして苦悩に陥ります。苦悩の克服のためには我執をなくさなくてはなりません。しかし、私たちは我執をもっているからこそ生きて様々な活動をしているのであり、我執の消滅は私の存在を否定することにつながります。法然上人は苦悩の生活をしながら苦悩を超える教えを説かれています。安楽な生活を得るためには阿弥陀佛の大悲に触れることによって罪惡低下の凡夫の自覺を持つこと、人間の存在の姿とはこんなものと深く観察すること。諸々に形作られた一切の現象は、必ず滅び去る性質のものであるという「諸行無常」の道理をしっかりと領解するように信心に奨励努力することを諭されています。

【参考】

・この世に於いて執着のもとであるこのうずく愛欲のなすがままである人は、もろもろ憂いが増大する。雨が降った後にはビーラナ草がはびこるように 『ダンマパダ』335

・諸々の事物に関する固執はこれこれのものであると確かに知って、自己の見解に対する執着を超越することは容易ではない。故に人はそれらの偏執の住居のうちにあって、ものごとを斥けまたこれを執る 『スッタニパータ』785

(以上 中村元訳による)

真理は一つ、教えは無数 (2008/12)

お釈迦さまは十二月八日、三十五歳の時に降魔・成道(ごうま・じょうどう:悪魔の誘惑や脅迫をしりぞけ悟りをひらくこと)されました。お釈迦さまの悟りは言葉をかえれば次のように言うことができます。「私は三十五年のあいだこの世は何事も心次第であり、努力であるという見解に立って生きてきた。私の物指しを疑ってみたことすらなかった。しかし、存在の道理を知ってみると勘違いの三十五年間であった。世の存在はすべて縁起の法、一切は因縁生である」

お釈迦さまは「私の説くことは知識ではない。真実だ」と言っておられます。宇宙の大きな真実の働きに否応なしに包まれている自分を知り、随順して生きてゆくことの大切さを説きぬかれたのです。その真実の一つ、縁起の法であり、すべての存在は実体としてあるものでなく相互の関わりのなかで生ずるということです。私たちの邪陰煩悩を「蓋」や「覆」と表現するのは、縁起の法を悟る智慧にフタをしたりオオイをかけていることを表しています。自分中心の発想そのものが問題であることを示唆しています。古代インドの聖典『リグ・ヴェーダ』には「真実の一つ。賢者はそれをさまざまに説く」とあります。究極的な真理を人に伝えるには言葉に頼らざるを得ません。真理は一つなのですがそれを説く教えは、法を実践して追体験した人の数だけあります。佛教で説く法の教えを「八万四千の法門」というのは、この間の事情を表現したものです。

縁起の法によれば、ありとあらゆるものは他のものが生ずることに対して影響を及ぼしています(増上縁)。従って、私の存在とは他との相互関係のなかで生じ生かされているもので、単独で存在する私というものはありません。しかし、自分が自分がという「我見」が先立って、まず自分があってそ

の自分が他者に生かされている、悪くすれば自分で生きていると錯覚してしまうのです。私たちはどこまでいってもこの「我見」から離れられないただの人なのです。

この現実世界を既に浄土と感じている人もいるかも知れません。このような人々は既に往生の人です。しかし、現実を穢土(えど:汚れた世)と感じ、苦の世界と感じている人もまた往生の人なのです。なぜなら、穢土と感じ苦と感ずることによって、やがて浄土を感じ善を修めようとする端緒となるからです。浄土と穢土は異なる世界ではなく同じ一つの佛土なのです。お念佛を申すとき、我見が次第に消滅して阿弥陀佛の大悲願を感じ、純粋に往生を思うくもりなき誠の心「直心」が起こってきます。この直心こそまさに「万行の始め」であり、佛国土を浄める根本「浄佛国土」なのです。悟りを目指す菩薩の直心は絶対究極の涅槃を感じますが、私たち凡夫の直心は浄穢あわせ持ちつつ浄土を感じるのです。直心から浄土の行は始まります。

【参考】

真理は一つであって、第二のものは存在しない。それを知った人は争うことがない。彼らはめいめい異なった真理をほめたたえている。それ故に諸々の道の人とは同一のことを語らないのである。

『スッタニパータ』884 (中村元訳)

浄土に居(きょ)す (2009/01)

人間としてこの世に生を受けた私たちは、どのような生き方をすればいのちを完全燃焼させたいえるのでしょうか。自分の好き嫌いでものごとを分別し、自分の物指しで価値をはかり、そしてその判断にどこまでもこだわる一生。誰しもこのような一生がいいとは思わないでしょう。いのちの完全燃焼とは、今の生き方のみならずいのちの終わり方も含みます。しかし、私たちは生きることへの執着が強く、いのちの終わり方については考えようとはしません。佛教は私たちが生きている現実を肯定しつつ、その現実を乗り越えることを説きます。私たちが生きることも、老いることも、病むことも、死ぬことも苦しみであるとし、その現実をきっちりと受容してこれを乗り越えて生きることを教えます。この世はつらくて苦しいからあの世に生きましようというものではありません。この世を苦しいとか辛いと言いつつ、この世を楽しみ離れたくないというのが人間の本音であり、煩悩が盛んであるが故に求める世界が見えず、捨てるべき世界を一向に捨てられないで思い煩いに生きているのが人間の姿であると佛教は見ます。

浄土は、このような人間に対して生き方、死に方を教えるものといえます。前回、私たちが生きている娑婆世界(穢土:えど)と浄土は同じ一つの佛土であると述べました。思い煩いの穢土に生きつつも教えを聞いて浄土を思い、仏の教えに生かされている認識に至る生き方をしなければなりません。そして、私たちは諸々の縁によって生かされています。生かされていることへの感謝の気持ちが起これば、これが諸々の佛に守られている(護念、光に照らされている)という見方(観)に変わります。護念とは年をとったり、病気になったり、苦しい局面で生きてゆく力を生み出す源です。だから人生が豊かになるのです。豊かな人生は必然的に豊かな死につながります。自分の人生に悔いを残さず、周りの人々に感謝して浄土という世界に思いを馳せたいものです。法然上人は「生ければ念佛の功つもり、死なば浄土へまいりなん。とてもかくても、この身には思いわづらふことぞなきと思ひぬれば、死生ともわづらひなし」と言われています。理屈抜きで護念を感じ取る心が信心の世界です。上人の言葉は、「この凡夫の私も必ず佛になるべき身で今は依然として娑婆世界にいらけれども心はすでに浄土に居す」という安心立命した信心を述べられたものでしょう。私たちも、浄土

の教えから届けられた真理によってさまざまな人生の困難を乗り越え「浄土に居す」ことができるのです。

法悦（安心＋起行）（2009/02）

生活も便利になり、ものも豊で欲しいものを何でも手に入れることができる世の中になりました。しかし、人の心は貧しくなりました。自分のことしか考えられない利己主義者が増え、欲望が野放しの状態になり「金ともの」の社会になってしまったのです。また、人類の幸福と繁栄を夢見て日進月歩で発展してきた科学技術も、二十世紀末になって暗い影を落とし始めました。本来の目的とは異なった応用のされ方、すなわち大量破壊兵器、環境破壊、そして生命操作などに代表されるように倫理の欠如した実益優先の応用です。すべては心よりものを優先することから生起しています。

佛教では心（識）と肉体（色）は別物とみます。しかし、私の肉体は心の入れ物であると同時に心に縛られています。そのために純粋に思惟することができず、また純粋に行動することができないのです。心は欲望や恐怖に、肉体は愛欲にとあらゆる幻想や根拠や実体のない話で満たされています。そのため、自己中心的となり争い、いじめ、盗み、人殺しなどが起こってきます。このような時代だからこそ今一度、佛さまの教えに立ち返ることが大事なのです。心の定まらない私たち凡夫が救われる道は、諸悪から離れ善を行うことを心がけ、心を整えること（七佛通戒偈）です。私は何も真理がわかっていないし物事の本質も知らない（無明）、それを理解する智慧もない、何の取り得も値打ちもない無知・蒙昧・無善の自分にすなおに気づいたとき、佛教では私の中に佛さまが宿って下さると表現します。善導大師が言われる罪惡生死の凡夫で出離の縁がない私たちですが、この私にも佛さまに対する信心が備わってきたことを表します。

無知・蒙昧・無善の私に気づけば、私の往生を願う心も自力の心を捨てて他力の教えに自ずから願けるようになります（安心）。そうしますとただただお念佛を申すだけです（起行）。安心と起行は同時で一体です。阿弥陀佛が心相中におわしますと思えば、敬いと思いやりの心で日々を送ることができます。そのような生活を法悦の日々といえます。今私たちに一番欠けていることは自分と自分の心を深く見つめ直し、純粋・無垢な信心に目覚めることです。

【参考】

- ・七佛通戒偈「諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸仏教」
- ・「諸佛如来 是法界身 入一切衆生心相中」『觀無量壽經』

善導大師はこの文を「弥陀の化益の対象である衆生界に心偏・身偏・無障礙の三つの理由で、衆生が想念すればその心想のなかに弥陀の大慈大智をもって影現する」と解されています。

- ・「南無阿弥陀佛 ほとけの御名と思ひしに 唱ふる人の姿なりけり」 西山証空上人

現代の社会（2009/03）

人類が地球上に現れて 400～500 万年、私たちの祖先と言われるホモサピエンスが現れて 15～20 万年、そして文明と呼ばれる人間社会が現れて数千年しか経っていません。その短い人類の歴史の中で現在起こっている諸問題は人類が初めて直面する試練と思われます。どれ一つをとっても人類の存続にかかわる問題ばかりで、これにどう対応すべきかで混乱の渦の中にあると言っても過言ではないでしょう。

人間も生き物である以上は、本来生きるために食料を求めて活動していたのです。当然、自然の恵みを受けることによって生きてきました。そこには人間中心の驕りは生まれようもなかったのです。しかし、人間が一人で生き続けることは難しいことです。このために、家族という集団を構成し、またさらに部族、地域社会、国家という集団を構成して生きていく道を選びました。そして、他に対する優位性を確保し集団の発展のため、知恵を結集してさまざまな知識や技術を獲得し、それらを応用して生産活動を営むようになりました。一方で、自然界には人間の理解を超えた現象が多く、人々はそれらを神格化して畏れ崇めて宗教という精神生活の原型を作りました。人間の知識欲は近代に入って自然界を支配する数多くの法則を見つけ、科学として素晴らしい発展を遂げまたその成果を科学技術として実生活の中に応用するようになりました。しかし、人間の生活を豊かにする一方でその応用の仕方に大きな問題があり、私たちを混乱に陥れているのです。応用する上での倫理観、さらにいえば宗教観が軽んじられていることに原因の一端があります。中世ヨーロッパのように宗教が科学そのものに干渉することはあってはなりませんが、人類共通の倫理に反する応用には宗教が大きな警鐘を鳴らすべきでしょう。

現代の社会を見てみましょう。20 世紀の科学の成果は、私たちの生活の中に様々な新しい物を生み出し製品として供給しました。なかには人類に全く不要な物も作り出しました。また、私たちは日々必要としている以上の物を作り出し、消費して生活しています。それらの物をどれほど効率よくかつ安く生産しても、その材料はすべて自然界に仰がねばなりません。私たちは浪費を“豊かな暮らし”という名の下に正当化し、後世に引き継ぐべき資源を浪費し、環境を破壊し、大量の二酸化炭素を放出して私たちの生きている地球そのものを荒廃させているのです。私たちの行動はまさに佛教でいう「貪(とん、むさぼりのこと)」です。

今の混乱を救う方策の一つは佛教の教えに回帰することでしょう。何を今さらと思われる方も多いでしょうが、佛教には過去から連綿と積み重ねた教えがあり、科学の論理を超える精神作用があります。念佛は無縁の慈悲すなわち自他平等の救いです。自分さえよければという「貪」を捨てる近道は、まず日々の生活に感謝し手を合わせ、他者の理解に努めること、生きている「いのち」の尊さと有り難さに目覚めることです。

許すこと (2009/04)

今の世の中、小は個人間そして大は国家間において争いごとが絶えません。人間は道德、倫理、宗教というものを持ちながら、その理想とするとところと現実の行動がかけ離れている生き物なのでしょう。人間は自分が真実と信じることを主張し自分が正義と思う行動をすると、必ず争いごとが起こります。人間の思いというものは他者に伝わるもので、現在のみならず時間を超えて伝わります。憎しみのような強い情念はことのほか伝わりやすいものです。自分の考えに縛られて、こちらが敵意を抱けば相手は必ず敏感に反応します。そしてお互いの憎しみが増大し何世紀にもわたって争うような紛争に発展、このような例は多くあります。

どちらかが憎しみの悪循環の恐ろしさに気づき、相手に対する憎悪を捨てる必要があるのです。自分と相手はつながっているのだから、相手が幸せにならなければ自分の幸せもないという道理を知ることが必要なのです。口で言うのは簡単ですが、このように発想を転換することは至難の業です。佛教はこのような発想の転換を私たちに勧め、安心(あんじん)を得ることを教えます。人間の抱く好意も憎悪も様々な因縁によって生まれます。佛教には「自他平等」という言葉があります。因

縁に気づいて相手の平安を念じ自分の憎悪の消え去ることを念じれば、それは相手にも伝わり相手の気持ちもかならず和らぐのです。佛の覺られた真理のもとでは、私と相手の間に格差、優劣があるわけではなく平等だからです。人間関係に問題を抱える人は、問題を避けて距離を置くのも一法でしょうが、だまされたと思って相手を許し、相手のために真剣に念じる努力をされてみてはいかがでしょうか。

また「煩惱即菩提」という言葉があります。これは自らの煩惱、我欲や迷いの有り様、そのよって来たところを静かに見つめて、生活を整えていくことによって心の迷いはおのずから沈静し菩提に進んでいくことを言ったものです。私たち凡夫がこの境地に近づく道にお念佛があるのです。静かにお念佛をとえ、心に阿弥陀佛を憶念することによって、こだわりに固まった心がだんだん柔軟になって許せない相手もいつかは許せるようになるのです。私たちは人生を生きる限り、避けようもなくまた選びようもない苦しみを引き受けて生きなければなりません。人生の真(まこと)は苦しみをたどり抜いた末にふっと気づくものです。だからこそお念佛の日々を心がけねばならないのです。

【参考】

「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である。」 ダンマパダ5 中村元訳

お念佛のころ (2009/05)

お釈迦さまは人間の苦しみの根源は何か、苦しみを滅する道は何かを求め続けられました。お釈迦さまは人生を直視し、楽・患苦・出離ということを深く洞察されたのです。楽とは易しく言えば楽しく快いこと、私たちが欲望の対象にするものを言います。この楽なるものは、私たちをして追い求めさせ、一旦手にすれば執着させて、必ず過誤・過失に陥らせます。これが私たちに患苦をもたらし、逃れるが為にさらなる楽を求めるという悪循環を繰り返すことになります。お釈迦さまの悟られた人間世界は、私たちがよく耳にする「諸行無常・諸法無我・一切皆苦」ですが、苦の根源は私たちの無明(ものごとの真実を分かっていないこと)にあるとされました。いかにして出離(迷いの世界から離れること)して、苦滅するかがお釈迦さまの開かれた佛教の教えなのです。

人生で苦しみが生起するのは、人間の浅はかな知恵による身心の働き(諸行)が我執となって顕れるからです。苦滅という悟りの体得こそが人生の目的であるのですが、苦滅を得るのは浅知恵ではなく智慧(無明を自覚した知恵、真実をとらえる知恵)によることをお釈迦さまは明らかにされました。智慧は私たち人間の知恵とは大いに異なることから「佛智」と呼ぶべきものです。悟りとは何かを改めて問いなおすことは、お釈迦さまの求道の出発点に立ち返ることです。私たちがその様な佛智を得る道が佛教には説かれています。これを菩薩道といって六波羅密(布施・持戒・精進・忍辱・禪定・智慧)の実践を説きますが、この実践は我々にとってまことに難しいことです。また、佛教には我々が常に誤認識していることを表して、四顛倒(してんどう)という術語があります。これは「常楽我浄」と表現され、我が身は浄、我が受(感受)は楽、我が心は常住、世の法(事象)は我というもので、我々の執着による誤解を表しています。正しい認識は、身は不浄、受は苦、心は無常、法は無我であるとし(四念処)。正しい認識を持つことを忘れなければ佛の教えを歩むことが出来ると言います。これも私たちには難しいことです。では、無明の私たちが救われる道はあるのでしょうか？

答えはお念佛のころ。我々は無明であるが故に阿弥陀佛の救済にあずかると観念するので

す。阿弥陀佛は無量寿、無量光とも言われ、無量寿は智慧、無量光は慈悲を表します。慈悲の光は苦しむ者を照らし、智慧を授けます。智慧は時間を超えて伝えられるもので、私たちの識(こころ)にほかなりません。識で阿弥陀佛を観て、阿弥陀佛の救済を領解すること、これがお念佛のこころです。お念佛者のこころとは阿弥陀佛の働きを感じずる識のことです。たとえ高僧といわれようともこれが無ければ、形は僧でもお念佛を説く者とは言えません。たとえ彫像ではあっても、阿弥陀佛像に手を合わせて識に御佛の働きを感じることができれば、無明の凡夫である私たちはまさしく念佛者なのです。

浄土 (2009/06)

浄土の教えは、人の分別が加わらない無分別の世界に気づかせ、その世界へ人々の想いを導き入れようとするものです。しかし、もともと私たちの目で具体的にとらえられるものではありませんから、極楽浄土は西方十万億佛土を超えたところにあると方便をもって言うのです。たとえば、人に月の所在を教えるには、月を指す指が必要です。それと同じで、経典が浄土を色や形をもって説く理由はそこにあります。具体的な形や色で指し示されないと、私たち凡夫にとっては「ない」と同じことで、それで一生が終わってしまいます。

なにが私たちを西方極楽世界に導くのでしょうか。それは阿弥陀佛の無縁の慈悲です。その慈悲をいただいた人は、それにうなずき、それに生きる。それが浄土に行くということです。

阿弥陀佛の慈悲と智慧(これも目に見えるものではありませんが)は、いつでもどこでもはたらいています。無始の過去から連綿として今日まで続いていて尽きることはありません。佛さまのはたらきには、智慧には必ず慈悲の裏づけがあり、慈悲には必ず智慧の裏付けがあります。この佛さまのはたらきを有り難いと感じ自然と称えるのがお念佛ですが、お念佛を称えるとき、人は阿弥陀佛と一緒にいる(佛凡不離)のです。ですから、念佛を称える人の周りは温かく、その人の顔の表情、声音、振る舞いを見て、その温かさを教えられます。そして人が自然と集まり、温かさを広げていきます。そういう環境は、娑婆でありながら、もうこの世の浄土です。

しかし、佛さまがおられての浄土ですから、浄土が先ずあるものではありません。佛凡不離の人がおられれば、その人のはたらきが全部浄土になります。逆に、迷った人がいると、その人のいるところは迷いの世界になってしまいます。心に怒りを含んだ人がいると、その人の周りは修羅の世界になり、欲望に心を囚われている人の周りは餓鬼の世界になってしまうのです。

私たちの宗派の教えは、悩み思い煩うことから解放されて安楽の世界に行くだけではありません。三心(至誠心、深心、廻向発願心)をしっかりと持ち、意識しなくても、他の思い煩う人を助けるはたらき(利他)を起こす念佛の教えです。お浄土とは私の悩みだけでなく、皆の悩みがなくなった所を指します。自分一人だけが救われることを求めるものではありません。自分が救われたら、すべての人がともに、その救われた世界に安らぎを見いだせることが目的なのです。

慈悲と智慧 (2009/12)

法然上人は著された『無量寿経釈』の中で次のように述べられています。

「諸佛の心というは慈悲を体とす。この平等の慈悲をもって、あまねく一切を摂するなり。佛の慈悲は一人も漏らさず普く一切を利すべし。」

佛心とは慈悲であると言われるのです。佛さまは覚った方ですから、佛さまの心(慈悲)とは絶対

的な真実を見据えた究極のまごころ(至誠心)であり、我々の心のように分別に揺れ動くまごころではありません。また、覺りに至るためには、ものごとの実相を分別なく見極める力、すなわち智慧がなくてはなりません。佛さまの慈悲がはたらくときは智慧と一緒にです。佛さまの智慧と慈悲は渾然一体となつてはたらくのです。ところが、人間世界では分別がどうしてもはたります。その結果、知恵と慈悲はばらばらにはたらし、渾然一体どころかバランスさえ取れない場合が多いのです。漱石の『草枕』に「智にはたらけば角が立つ。情に棹させば流される。…… とかくに人の世は住みにくい」とあり、人間とは知恵と慈悲のバランスが取れず世の中を自分で住みにくいものになっていると人間社会を喝破しています。

私たちが佛心を持つことはできませんが、それを理解し目指すことは可能です。そのような生き方を佛教では佛の智慧の光を浴びるという言い方をします。佛の教えを深く心で肯き、佛の智慧のはたらきを自ら感じると言ってもいいでしょう。智慧の光を蒙ったら無分別心が芽生え、すべてが平等で自他の区別なく、自分の「慈」も「悲」も他者と変わらないことが理解できるのです。自分自身に向けられていた「慈」と「悲」を他者にも向けることができる、すなわち回向の心も起こるのです。

私たち人間は言葉を通じて佛の教えを学び、理解せざるを得ません。教えを説く人が智に走った言葉を吐く人であつたら、その人の慈悲の心も伝わってきません。たとえその人が私にどんなに知恵のある言葉をかけても、私に必ず届くとは限らないのです。温かい心を持った人の言葉は必ず人に届きます。言葉の持つ合理性が智慧であるとすれば、慈悲は言葉の含んでいる温かさといえます。そして心で領けた慈悲を他に向けることができれば、それがそのまま浄土に居すということでしょう。また、回向とは自分のまごころ・苦しみ・悲しみを理解した人が、いまだ理解できない人を助けることであり、その究極が阿弥陀さまの慈悲なのです。しかし、目に見えない佛さまのはたらきを人に伝えるためには、目で見える図像や言葉を用いざるを得ません。言葉で教えを説き、美しい図像を描いたり、彫ったりして具体化します。言葉や図像そのものは佛ではありませんが、それを見聞きした人は何かを感じ取るのです。形を通じて形なきものに触れる、それは佛教の「方便」なのです。

いのちの流れ (2010/04)

現代の多くの日本人は生と死を分けて考え、しかも死を遠ざけて今の生に執着して生きているように思われます。眼前のものの豊かさを背景に、楽しく生きられればこと足れりとしています。しかし、一見何事もなく順風満帆のように見える日々も、その実体を見れば老若男女を問わず然るべき人生の方向を見失って心の安定を欠き、迷いの日々を送っているのではないのでしょうか。また、テレビ番組には目先の現象をきちんと見ず、はぐらかしたり、かわしたり、逃げたり、あげくに他人の弱点を笑い物にするようなお笑い番組がこれでもかこれでもかと流されていて、あたかもそれが当たり前であるかのように漫然と見ています。佛教の説く佛の智慧は全く感じられない日暮を豊かな人生と妄想顛倒して、生きるという自覚のないまま救いもなく五濁の娑婆世界をさまよい続けているのが実体でしょう。

生きるということはどういうことなのでしょう。佛教の四苦でいえば、生と死の中間のことで、私たちはつらいなあ、楽やなあ、損したなあ、得したなあ、面白かったなあ、悲しかったなあなどいろいろ言います。生きるということとは“いのち”の働きですが、いまひとつ分かっていません。いのちになかなか実感を持てないものですが、佛の教えを聞いて気づかされることがあります。佛の教えでは、い

のちは自分のもののようにあって実は自分のものではないのです。いのちとはさまざまな因縁がよりあって生じている大河のようなもので、自分のいのちとはその大河から私の方へしばらくの間流れていて、因縁が変われば流れも元の大河に戻っていくのです。いのちの大河の中で、私はいのちをある一定期間、私たちが人生と呼ぶ期間あずかっているに過ぎないのです。生とはいのちが私に向かって流れ出したときであり、死は流れが元に戻るとき、限りあるいのちの流れが限りないいのちの流れに包み込まれるときなのです。

私たち念佛者はお念佛を通じてこのことを実感するのです。限りあるいのちが限りない佛のいのちに包まれていると。阿弥陀佛は自分勝手に、欲深く、愚痴を言う凡夫の私を慈悲と智慧と清浄の光で包んでくださっていると。清浄とは浄化作用で私たちの罪障の除去なのです。目先にとられず与えられた人生を十分に時間をかけて生きるという佛の願いに目覚め、その願いに応える人生を歩んでいただきたいと思います。

【参考】

『無量寿経』には阿弥陀さまの名前として無量光佛、無辺光佛、無碍光佛、無対光佛、炎王光佛、清浄光佛、歓喜光佛、智慧光佛、不断光佛、難思光佛、無称光佛、超日月光佛などが記されています。

無分別の世界 (2010/05)

私たちは自然の摂理の中で生きています。自然の摂理はAだとかBだという分別を超越したもので、自然界は無分別の浄土と同じ世界だといえます。自然の摂理をくだけていえば、「あんた、生きている間はしっかりと精いっぱい生きなさい」、時が来たら「あんた、長い間ご苦労さん。何も思い煩うことなく死に臨みなさい」というものです。私たちはもともと無分別の浄土に生きているのですから、そこから逃れようともがく必要はないわけです。しかし、私たちは分別を起こして苦を作り、恩愛や執着心に囚われていろいろな不幸や悲しみに出会い、迷いの世界に浮き沈みしながら流されて生きています。自然の摂理を理解する智慧が分別で覆われて働かず、本当の自然界の姿に心の目が覚めていないのです。自分の思い通りにならないこと(人生の苦)に対峙して自分自身を省みて、智慧をめぐらすことが必要なのです。ところが、分別を起こし、煩悩をかかえる凡夫といわれる只の人にはとても難しいことなのです。

私たちは、日常のことは一切判り何もかも知りつくしているように錯覚し、また格別の支障もなく過ごしていると思っています。しかし、そのような日常のさなかに、突然何かが起こり虚をつかれて苦を嘆く事態となることが多々あります。「一寸先は闇」といわれるように、人生には何が起こるかを予め知ることはできません。むしろ、知り得ぬことが次々に起こってくるというのが実情です。自分の誕生や死の実相も知ることはできません。言い換えれば、私たちが自覚できるのは生きている間(人生)だけなのですが、その日常の生活においても本当のことは何も分かっていないのです。私たちはさまざまな出来事に出会い、その実相をおぼろげに知りますが「喉元過ぎれば熱さを忘れる」で智慧に目覚めるには至りません。

お念佛では、周りの人や出来事に出会ったがために私の心の目が覚まされて、全く新しい心境が開けたとか気付かされたという生き方を勧め、自然の摂理に目覚めることを説きます。周りから私が目覚めさせていただいたと気付くこと、これがお念佛の道を歩んでいる証しです。お念佛は、自

然の成り立ちには阿弥陀佛の「願」が籠められていると信じます。そのことを自覚すると「自然法爾」の無分別の智慧に出会うことができるのです。そのためには、それに出会った人の法一本質をちゃんと掴まえた無分別の世界一の話をついじり聞くことが必要です。

自然法爾(じねんほうに):もののありのままの姿が真理にのっとっていること

しあわせ (2010/06)

イギリスの詩人・劇作家のオスカー・ワイルドが1888年に出版した『しあわせな王子とその他のお話』を孫に読んで聞かせていて思ったことがあります。皆さまもよくご存じのお話と思いますが、次のようなお話です。

ある街に幸福な王子の像が立っていた。サファイアの目を持ちルビーや金箔で全身を飾られた美しい王子は街の人々の自慢だった。ある日エジプトに旅に出ようとしていた渡り鳥のツバメが王子の足元で寝ようとする、上から大粒の涙が降ってくる。王子はこの場所から見える不幸な人々に自分の宝石をあげてきて欲しいとツバメに頼む。ツバメは言われた通りルビーを病気の子供がいる貧しい母親に、サファイアを飢えた若い劇作家と幼いマッチ売りの少女に持っていく。ツバメは街を飛び、両目をなくし目の見えなくなった王子に色々な話を聞かせる。王子はツバメの話を聞き、まだたくさんの不幸な人々に自分の体の金箔を剥がし分け与えて欲しいと頼む。やがて冬が訪れ、王子はみすばらしい姿になり、南の国へ渡りそこねて死を悟ったツバメは「不思議なことに、今、ぼくはとても暖かいと感じている。とても寒いのに」と言った後に凍え死ぬ。ー以下略ー

これと似たお話が仏教童話『シビ王と鳩と鷹』にあります。キリスト教の博愛と仏教の菩薩の願いの違いはありますが、不幸な人がいる限り自分は“しあわせ”にならないという点が共通しています。

「幸福(しあわせ)な人生」こそ万人の願いですが、幸福は果たして人生究極の目的なのでしょうか。私たちの感じる幸福とは、端的に言えば人間の煩悩の一つ「欲」が満たされたときの自分の心の充足感です。私たちの幸福は物質的、経済的な諸状況と無関係ではありませんが、それを感じる心のあり方が大きく影響します。他人から羨ましいと思われても、本人が幸福だと思わなければ幸福とはいえません。他人からお気の毒にと思われても、本人が幸福と思えばそれで幸福なのです。要は物の豊かさよりこころの豊かさが幸福の根底にあるということです。物質的、経済的な面での幸福は、その人の努力や天分に大きくかかわってきますが、同時になにがしかの巡り合わせ(仏教でいう縁)が働いていることも確かです。天分に恵まれ、誠実に努力しても幸福と思わないこともあります。そしてその原因を他に転嫁して、人生は不合理だと悩んだり、悲しんだり、恨んだりしてしまいます。しかし、こころの豊かさが具われば、幸福は単に自分の欲求の充足でないことに気づくはずで、自分一人の幸福などは永遠に続くものではありません。多くの人びとの支えや理解、すなわち様々な縁があって今の幸福があるのです。自分が幸福であることに感謝し、その幸福が万人の幸福につながっていることに気づかなければなりません。独りよがりの幸福は本当の幸福ではありません。菩薩の心が仏教のいう幸福といえるでしょう。

私たちが菩薩の心を持つことは不可能に近いかもしれませんが、しかし、その教えを心に抱いて、自他の分別をなくして自分なりに生き抜いていくことが幸福につながるのです。それが仏教の教えなのです。

【参考】『シビ王と鳩と鷹』のあらまし

シビ王は心優しく誠実な王様でした。ある日シビ王が庭園を散歩していると、小鳥がいきなり王様の右袖に飛び込んできて、「鷹に襲われています。助けてください」と助けを求めます。かわいそうに思ったシビ王は追ってきた鷹と話をします。鷹も小鳥を食べないと生きていけないと自分の立場を話します。鷹の言うことももっとも王様は思い、小鳥の代わりに他の肉でもいいかと聞きます。すると鷹は新鮮な肉でないと食べられないといひます。困った王様は自分の身を小鳥と同じ分だけ切り取って鷹に与えようと決めました。王様は秤を運ばせ、小鳥を片方に乗せて、もう片方に自分の腕から切り取った肉を乗せます。ところが我が身をどんなに削って秤に乗せても小鳥の方が重いのです。王様はついに自らの命を与えようと秤に全身を乗せました。その瞬間、秤が釣りあって、小鳥と鷹は菩薩の姿に変じたのです。それまで、小鳥や鷹や人間という生きものの大きさだけを見てきた王様は、命の尊さはそのようなもので量ることができないと気づきます。シビ王は本当の命の尊さを知ったのです。

佛さまのはたらきの中に生きる（2010/07）

今、社会的にいろいろな問題が起きています。とりわけ心が痛むのは子どもの虐待、しかも親による虐待です。子どもに注がれる親の愛情は、佛さまが我々に注がれる慈悲と同じものだと思えるのです。しかし現実には問題が起こり、その多くが心を病んでいる人びとの行動が引き金になっているのです。私たちは生まれ、人生を生き、そして死を迎えます。私たちは日々いろいろな出来事に出会いますが、生・老・病・死のそれぞれの苦しみの中に光明を見いだす生き方を心がけねば人生に価値を見いだすことはできません。生きている限り苦や煩いはなくなることはありません。しかも苦や思い煩いは他人に転嫁できるものでなく自分の問題であり、自分で自分の心を甦らせなければなりません。私たちが行き詰まったときカウンセリングなども効果はあるでしょうが、根本的に自分の心を甦らせることができるのは温かい心に包まれるという人との出会いです。相手の気持ちを考えた思いやりは人に安心と生きる気力を与えます。世事の善し悪しにとらわれず、善悪を越えて事実を直視した人の温かい心との出会いが不可欠なのです。

すべての凡人の心の蘇りとなる自然な心の包み合いを、佛教では佛さまの慈悲という言葉を使います。人智を越えた大いなる宇宙の真理の働きというものを感じたとき、佛さまは私たちを無差別な心で対等に接してくださり、悲しみのときは「ああ、そうだったの、あなたはそう思っているんだね」と頷かれ、喜びのときは「ああ、よかったね」と一緒に喜んでくださっていると頷くことができます。佛さまの慈悲は拒否もなければ執着もなく、すべての人間を包み込む温かい包容力です。しかし、私たちはものごとを「あるかないか」、「善か悪か」、「事実か空想か」などと理屈や論理で二元分別し、このような心の動きを素直に認めることができないのです（理屈を越えて認めることが信仰の始まりなのです）。

法然上人の「うけがたき人身を受け、あいがたき本願にあい」とのお示しの真意に気づくことができたら信仰の道に踏み出したといえるでしょう。「人間に生まれることは容易なことではないのに、今人間として生まれたことはなんと幸せなことであるか。この幸せをしっかりと認識するとき、たった一度きりの人生を悔いなく生きる。そして佛さまは私の心の中ですべての働きをしてくださっている。私たちは佛さまのはたらきの中で生きている」と頷けるのです。

お念佛は感応道交 (2010/08)

私たちの宗派、西山禅林寺派の派祖である西山証空上人のお歌に

南無阿弥陀佛 ほとけのみ名と おもいしに 唱うる人の 姿なりけり

というのがあります。西山上人は、阿弥陀佛の衆生救済に対して疑義も妄念もなく深く信じてお念佛を唱えることを勧められ、これを「白木念佛」といわれました。このお歌は白木念佛を唱える人の姿がそのまま佛の姿である、言葉を換えれば「今月のみかえり」にある「感応道交」を唱われたといえるでしょう。

お念佛の教えは、老若男女を選ばず賢愚をも選びません。また信心の深浅も選びません。お念佛の教えに接すれば接するほど、自分がいかに愚かでいたらないものであるかを知らされるのです。阿弥陀佛はそんな私たちを放っておくことができず、浄土救済の道をお示しになっています。お念佛を唱えることができるようになると、自然と心にお浄土が感じ取れるようになります。お念佛を通して佛の衆生救済の働きかけとそれを求め感じ取る私たちの気持ちが相通じるのです。

本来目に見えず、形も色もない佛さまですが、私たちは具体的に阿弥陀佛という形で現れ給うていると深く信じてお念佛を唱えます。お念佛を申す身になると、佛の世界(人間だけでなく虚空全体に及ぶ働きの世界)に私たちは生かされていることに気付きます。自分の都合の善し悪しに関係なくものごとを受け入れる心が開けてきます。すると、邪見も落ち驕慢も落ちて、自分の行っている悪を詫びて懺悔の心持ちがおのずから起きるのです。

私たち凡夫は自分の意見に固執し、常に自分の都合にいいように見て、その思い込みから勝手に世界観を作り上げています。実は、これを邪見というのでしょうか。また、常に自分の見方が正論であり、世の中も佛さまの世界も解っていると思っています。実は、これを驕慢というのでしょうか。邪見、驕慢に気付かないと、自分が理解できないのは相手の説明の仕方が悪いなどと責任を相手に押しつけてしまいます。そのような思い込みの世界は人間の世界であって佛さまの説かれる世界ではありません。悟りの道に反する行いばかりやってもそれに気付かず、教えに触れても信じるのが難しくなります。このような私たちにとって、お念佛は人の世界から佛の世界につながる信仰の道なのです。

今思うこと (2010/09)

この夏命を受けてあるお寺の住職に就任することになりました。生まれ育ったお寺の住職を退き、自分の時間を持てる楽しみを味わっていた最中の任命でした。新しいお寺でのお勤めや身の回りのことなどいろいろな思い煩いが沸き上がり、少なからず迷ったのですが新住職を拝命する決心をいたしました。今回は朝晩の日課の中で思い直したことや改めて確認できたことを述べてみたいと思います。

まず、新しい環境に飛び込むことへの不安、むしろ気後れと言っていいたいと思いますが、このことに対する心の整理です。長年佛に仕えてきた私ですが新たな出来事に遭遇するとやはり思い煩います。でも心を鎮めて熟慮すると、そこに佛さまの働きを感じるのです。阿弥陀佛はどんなことがあろうとも私を見放さず抱きとられている。苦悩や思い煩いを自力で克服しようとするからより深い苦悩に陥るのであり、阿弥陀佛は苦悩のまま思い煩うことを勧められている。「困る時には困るもの。ただどう困っても大丈夫だ」というところで困っているのだよ」と。言葉をかえれば、私が感じ取ろうが取るまいが、私の計らいを超えて常に私に注ぎ込み続けてやむことのない働きがあると思い直したのです。

過去・現在・未来のさまざまな事柄が相互に作用しあって、今ここに私が生かされていることに気付けば、どこにいても私は私として生かされる。苦しい時もあれば楽しい時もあり、やりがいのある時もある。そんな世の現象のみにとらわれず、今生きている私がやるべきことをやるというのが一番大事であると改めて確認したのです。もつといえ、遠い昔から私の見知らぬ張り巡らされた計らいのご縁を感じた時、「そのままでもいいのだ」という佛の声を聞く思いがしたのです。

私たちは目に見えない無色透明の張り巡らされた縁の網の中に生きているのです。佛さまの計らいの中に居つつ私たちの心の中に佛さまが居る世界、佛さまの「摂取不捨」を今回の住職拝命を通じて体感したように思うのです。これは、私たちが生きている娑婆世界と浄土との関係と同じではないでしょうか。

願行具足 (2010/10)

人間の心は一瞬にして滅すると同時に次の瞬間に新たな心を生じています。心は瞬時に変化して流れています。面白い、つまらない、美味しい、不味い、好き、嫌いなど心が湧き上がります。心が働いた一瞬が事実であって、私たちが事実思っているのは後になって頭(分別)で整理した説明なのです。このような錯覚から私たちの心はいつも揺れ動き、絶対的な支えを得た心すなわち安心(あんじん)を得ることができないのです。

生まれ育った土地を離れて、最近つくづく思うことがあります。新しい環境の中でいろいろな思いが流れ去っていきます。毎日毎日、心の安らぐことがないのです。そのような中でも、阿弥陀佛はそのような私たちになり代わって願をおこされ行(ぎょう)をなされたのであり、私が今どこに居るかを考えることなく阿弥陀佛に畏敬の念を持ち浄土を念じつつ生活をつづけると、私自身が法界の中尊に抱かれて浄土に居していると思えてくるのです。私たちの願いと佛さまの行が一体不離(願行具足)との思いを強くするのです。そこは力んで心にあれこれ計らうこともない日々であり、自らどうこうしようという思いを一切断念する自分の思いを一切超えた世界を目指しているのだ、と感じるのです。このように言えばすべて説明になってしまいます。できることなら私の感じたことをそのまま感じ取っていただくのが一番大事なことなのですが……。

お檀家さんからお漬け物ひとつ頂いても、今までですと口に合うとか合わないとか自分の判断が先行していました。いまは頂く時点で美味しく頂くことだけを考えるようになりました。生かされていることに感謝し、ありがたいことだと手が合わさるのです。娑婆に生きつつ浄土に居す思いをすると自然と懺悔(さんげ)の気持ちが起きてくるものです。信仰は体験が必要です。体験の伴わない理は単なる理屈です。体験と理が調和して初めて安心(あんじん)の生活になるのでしょうか。このような姿をお会いする人々に自然と伝えることができたなら、まさに佛教でいう「薫習(くんじゅう)」なのだと思います。

【参考】願行具足:「唯その願あれが願むなしくして到るところなし 唯その行あれば行むなしくしてまた到るところなし 願行相たすけて所為皆剋すといへり 往生成佛ともに願行たがいひにかけぬければ成ずることを得ず たとえば鳥のふたつの翼のごとく 車のふたつの輪のごとし」 西山上人『女院御書』

薫習:ものにお香の香りが移り沁むように、あるものが習慣的に働きかけることにより、他のものに影響・作用を植え付けること。

懺悔（さんげ）（2010/11）

佛教は、私たち人間の生き方の基範として高度の倫理性を持つ宗教です。しかし、人は何のために生まれてきたかと問いかけても、こういうことのために生まれてきたと答えることはできません。また、何のために人は死ぬのかと問うても死ぬときには死ぬのです。人間とはかくあるべきものなりということによって、人は救われるのでしょうか。佛教には慈悲の言葉で表されるように心の絶対的安心を求めるという大事な考え方があります。完璧な人格者を追求し、人間とはかくあるべきという理論を求めるだけでは学問として成り立っても、現実には苦しむ悲しむ人間を救うという佛教にはなり得ないでしょう。私たちは「……のために」と考えて理由を探して理屈で納得しがちです。しかし、佛教では理由づけの世界を超えて、目には見えない大きないのちに抱かれて、生きることを任されていることを強調します。理屈をつけて納得するのではなく、生かされていることを身に染みて感じ取るのです。とは言っても、私たちの生きている此土はどこまで行っても娑婆世界であり、そのなかで喜怒哀楽の日々を送り、過ちを犯しつつもそれに気づき改めることもありません。このような私たちに対して佛教は「懺悔（さんげ）」を説きます。懺悔とは、佛のみ教えを悟らず過ちばかり犯している（罪障の）自分をしっかりと自覚しなさいということです。

私は佛門に入っていますから、「戒」を受けた佛の弟子です。ところが、日頃私がしていることは過ちが多いのです。毎朝のお勤めでは『菩薩戒経』とお念佛を称え、教えに照らして私の日暮を反省しています。そういう毎日の反省を通して罪障を確認し、懺悔を心がけています。信仰の世界は単なる知識の集積ではありません。佛の教えやそれを伝える先達（善知識）の言葉によって伝わる世界はまだ奥があることを知り、その導きを感じ取ることが大切なのです。佛法とは無限の法です。私は佛の一弟子としてもっと善き人に出逢い、教えを請い、信心を深めたいと思うのです。

当派の派祖西山上人のお示しの「歓喜踊躍の念佛」とは、佛の世界を感得された上人がご自身のいのちが大自然のいのちと感応することに感動して、歓びにあふれ思わず飛び跳ねたくなる気持ちを満腔で表されているのではないのでしょうか。このような境地に一步でも近づきたいものです。

【参考】念念に称名して常に懺悔すべし 人能く佛を念ずれば佛還って憶したまう（念念称名常懺悔 人能念佛佛還憶）『般舟賛』善導大師

佛眼と成佛（その１）（2010/12）

私たちは見る世界、知る世界、行う世界というように分けて考えることに慣れてしています。しかし、佛教ではすべての存在（法）の有様は分けて考えるのではなく、見て知ることがそのまま行いに反映し展開していくことを重視します。このような見る働きを「佛眼」といいます。佛眼はあらゆるものを知り尽くし、あらゆることを通して生きとし生けるものすべてを安らぎへと導く手立てとして、完璧に働くのです。この「佛眼」は、私たちが浄土の教えを信じ念佛の道を歩む中で得られてくるのです。佛教では見る働きとして五つの眼があるといえます。『観無量寿経』に「未だ天眼を得ざれば遠く見ることを能わず」とあります。私たちの「肉眼」は目先の事しか見えない、ましてやものごとをすべて見通した未来を見通すなどとてもできないとあります。「天眼」とはすべてを見通す眼で佛になるための最初の眼ですが、このあとも「慧眼」、「法眼」を経て衆生救済の完璧な方便の道、手立てを実演できる佛の眼、「佛眼」に至ります。「佛眼」は佛の教えを信じ念佛の道を志しさえすれば、阿弥陀さまから与

えられるものなのです。私たちは信仰を深めれば肉眼のほかに素晴らしい眼を持つことができるのです。佛教は佛さまに成るための教えですから、佛さまは私たちの存在と無縁の存在ではありません。私たちは自分自身のいたらなさ、愚かさを反省することによって、最終的には誰でも佛さまになることができるのです(『涅槃經』には「一切衆生悉有佛性」とあります)。佛さまの存在は「ある」ではなく「なる」ものなのです。ですから私たちも佛となって「佛眼」を得ることができるということをしっかりと確認しておく必要があります。

見るということは実に大きな働きを持ち、そしていろいろな働きと関わっています。しかし、眼がものを見るものとして限定的に働いている限り、貪りの心につながっていきます。視覚できるもの(色)を見ることから、煩惱の根本の一つとされる貪りの心が生じてくるのです。私たちはものを見る時、たとえ一面でもいいからものその通りに見ればいいのですが、先入観とか偏見によってゆがめて見てしまいます。貪りとゆがみという二重の誤りを犯してもものを見ているのです。佛さまに抱かれて日々暮らさせて頂くことに思い至れば、私と佛さまは一体になってこの身このままで蓮の上に宿されていると感じ、私のこの肉眼は佛さまの計らいで佛眼に転じるのです。それが今生における往生なのです。

佛眼と成佛(その2) (2011/01)

前回、私たちの肉眼は佛さまの計らいで佛眼に転じることができると述べました。しかし、日々の生活の中で感じる現実、肉眼で二重の誤りを犯してものごとを分別している私なのです。至らなさ、愚かさ、弱さなど佛になるには足りないものばかりです。そのような私を反省し、懺悔する心を抱くこと、言い換えれば私たちは常に佛に見られている、その大いなる慈悲の働きが私に及んでいることに気づくことが大変大事なことです。このことを実感して信じられるようになると、漫然とした日々の生活で自覚することなしに悪をなしているという恐れが起こってきます。しかし、この恐れも信心の深まりと共に歓びに転じてきます。常に佛さまがご覧になっている、その働きの中に私は今生かされているという歓びに満たされてくるのです。この段階ではまだ佛さまと私は対峙していますが、少なくとも悪をなしてはいけないということは明確になっているはずで、以前にお話した「七佛通戒偈」の初めの句「諸悪莫作」に行き着くはずで、悪いことをしないとすることを実行し、これを重ねていくと心はどうなるでしょうか。その行き着くところは悪をなすことができない、悪いことをしようと思ってもできない、しようという気さえ起こらなくなってしまう。誰もが「諸悪は莫作なり」の世界へ進んでいけるのです。

佛教で薫習(くんじゅう)というように、私たちの心は習慣性のもので、どのような習慣を持って生きていくかによって心もどんどん変わっていきます。善くもなれば悪くもなり、赤くもなれば青くもなり、白くもなれば黒くもなります。そういう習慣の中で悪をなさないということを実行していくことが大切なのです。心が「諸悪莫作」に近づくにつれて、佛さまと私の間がどんどん縮まって来ているということなのでしょう。これは、一遍上人が「となうればほとけもわれもなかりけり 南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛」と示された世界です。南無阿弥陀佛という名号のみがあるといえはる、しかしあるという必要もない世界へ至ることができるのです。本来は佛さまと一つになったあり方、この身このままで蓮の上に宿されていると感じられること、これが私たちの往生であり成佛です。

六神通 (2011/02)

これまで佛さまの眼、佛眼についてお話ししました。自分自身が白紙のように無我、無欲になり佛

眼がそなわれれば、佛さまの持つ特別な能力もそなわることを意味します。経典の中には「三明六通（さんみょうろくつう）」という言葉がよく出てきます。これは佛さまの特別な力を表す言葉で「六神通」ともいわれます。私たちは「神通力」という言葉になじみがありますが、これは人間の超能力ではなくて佛さまの能力が本来の意味です。今回はこの「六神通」についてお話します。

宿命通（しゅくめいつう）：人間の過去（前世）を知る力。私が今ここに悲喜こもごもの生活をしているのは、お爺さん、お婆さんそして多くの先祖のさまざまな影響を受けてここに出てきているのだと感じ取る力のことです。さまざまな縁がよりあって今の自分がある、すなわち佛教の説く無我・無常のことを深く知る智慧ともいえます。

天眼通（てんげんつう）：現在を見て未来（来世）を見抜く力。これは五眼の一つです。たとえば、人が何かをするとそれが将来にどのような影響をもたらすかを知ることにはできません。天眼通は、今あの人はこういうことをしているけれど将来必ずこういう影響が出るよと見抜く力ですが、「諸悪莫作」勧めるための智慧ともいえます。

天耳通（てんにつう）：普通の人には聞こえないものを聞き取る力。耳で聞く音だけでなく、人の心の奥に潜む嘆き悲しみを聞き取ることに大きな意味があります。

他心知通（たしんちつう）：向き合っている人の心の奥底まで読み取る力。相手の人が何を考え何を思っているか、その人の体全体を通してすべて読み取ってしまう力です。単なる読心術ではなく、悟りへ導くためにその人の心を読み取るのです。

神足通（じんそくつう）：機に応じて自在に身を現す力。今の世の中でいえば、佛眼を具えた人がマスコミやネットを通じてその教えを広めると、思わぬ時・所で思わぬ人がその教えに帰依する。佛眼の人があたかもその人の前に現れて教えを述べるようなものです。

漏盡通（ろじんつう）：人の煩惱を断じ尽くしてしまう力。「漏」とは汚いものが漏れ出すことで、人の貪りや怒りや不平不満はすぐに漏れ出すことから煩惱を指します。そういう煩惱を断じ尽くしてしまう力ですが、煩惱をしっかりと見据えて心を清らかにする「自浄其意」の智慧が要求されます。

三明の「明」は智慧のことで、六神通のうち宿命通、天眼通、漏盡通のことをいいます。

念佛信仰の眼の開けた人は、往生に想いを寄せ信心増進をもって佛の教えに歓びを見いだします。このような信心決定の人は、自然と佛の徳を分け持ち佛眼を具えさせていただけるのです。佛さまの六神通は信心決定の人に具わる六神通でもあるのです。

衆縁所生 （2011/03）

以前、「人との出会いは私たちの生活を新たに開拓するチャンスである」と述べました。私は新しい土地に赴任してから、私が実践するお念佛の信心をこの土地で出会う人々に伝え、感じてもらえる機会を与えられたと考えています。

そこでもう一度、佛教の基本的観点である「衆縁所生」について考えてみます。その意味するところは、ものごとの生滅・存在は原因（因）と条件（縁）との相乗・複合・融合作用によるというものです。すべてのものは衆縁所生して誕生し、存在し、変化し、衰え、そして消滅していく。それらはまた様々な因となり縁となって新たなものを生み出し、衆縁所生を無限に繰り返していくのです。消滅すれば何もなくなったように見えますが、新たな衆縁所生に影響を与えて生き続けているとも言えます。このようにあらゆる存在はさまざまな因と縁が働くことによって形成された現象ですから、これらの変化により絶えず移り変わってゆきます。どんな素晴らしいものも、その素晴らしさの原因は単独

で存在するわけではありません。たとえば桜の華やかな美しさは、根と幹と枝という木があつて、季節と光と水と養分を得て美しい花を咲かせます。これらのどれ一つが欠けても美しい花は咲かないでしょう。桜の花の美しさは衆縁所生の結果なのです。このように形作られたものは一時も固定し、停止しているのではなく、常に変化しながら相続しています。このことを佛教では「諸行無常」といいます。私たちが勉強したり、運動したりして実力が向上するのも、なにもせず知力や体力が衰退するのも、私たちが衆縁所生による諸行無常の存在であるからなのです。このことはとりもなおさず、私たちは衆縁所生の世界に生きているのですから、自分の思うように、願いどおりに、欲するとおりになることは一つもないことを意味します。これを「苦」と表します。苦にはいろいろあります。頭や腰が痛いという肉体的な苦しみ、欲しいものが手に入らない苦しみなどなど「四苦八苦」といわれる苦しみ、季節や天候が移り変わる苦しみなど、数え上げたら切りがないほどの苦があります。

我が身を振り返ってみますと、つい衆縁所生を忘れて我執に囚われ、心身を煩わす諸々の勢力（煩惱）が生起します。このようなときは、手を合わせて念佛をしていると「自浄其意」に因って我執を超克することができます。しかし、自分の煩惱がなくなったと思っても、そこから新たな煩惱が沸き起こってくるものです。そこでまた、手を合わせてお念佛を申す日々を送っています。

【参考】年毎に 咲くや吉野の山桜 木を割て見よ 花のありかを（一休宗純）

今思うこと(2011/04)

このたびの「東北地方太平洋沖地震」とこれに伴う大津波は、命を落とされた方や行方不明の方が2万7千人を超えるという甚大な被害をもたらしました。また安全性が喧伝されていた原発は想定外の事態に陥り、放射能による環境汚染のため多くの人々が避難を余儀なくされています。この紙面をお借りして亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表するとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

今回の災害を通じ、人間の叡智が創りあげた科学や技術は自然の力を制御できるものでなくその一部を活用するものに過ぎず、自然の力は時として人間の過信を覆してしまうものだということを思い知らされます。私たち人間の繁栄は、自然の力の一部に支えられて成り立っていることに改めて思い至ります。

私たちがこの世に生まれてきたのは、誰にとっても初めての経験です。日々歩む世界では、私たちの知らないこと、予期しないことなど新しいことが次々に起こってきます。万人にとって今を生きていくことは、未知の世界を時の刻みとともに歩んでいくことです。そして時は私たちの思いに関係なく休むことなく進んでいます。自分の生命の拠り所である身体は、自分で全くあずかり知らない世界から授かったものです。生まれ出てきた時には、大自然（大宇宙といっていいたいかもしれません）の中にたった一人生まれ出て来たのですが、その後は自力で歩み育ったわけではありません。すでに周りの人々が作り上げ準備した世界の中で、周りから様々な恩恵を蒙ってきたことにより、自力で立つという意識にまで至ったのです。この世に生まれ、知らない世界に踏み込んだといっても、あくまで自分の先を行く人々が用意した世界の中に足を踏み入れただけなのです。その世界が私にとっては未知であるというだけのことで、先人がすでに歩き、生きる知恵を積み重ねてきた世界なのです。先人の教えを学び信頼すれば、未知の世界を歩む人生に安心が与えられるのです。

しかし、私たちの日常は、ほとんど変わらぬ世界の中でわずかばかりの変化を意識する程度でしかありません。身心共に健康の時や、生活が安定していると気づかないことが多いのです。自力で

立ちゆかなくなかった時、佛のはたらきかけに思いが至って、初めて自分の見えなかったものに気づき視野を広げることができるのです。佛の「はたらき」を光に喩えますが、人間の人生は暗い闇の中を歩くというような手探りの状態がしばしばあり、しかも誰にも頼れず心細く歩むとき佛の教えに出会う、そういう時に光に出会い、光に照らされて自分が元々持っているいのちに気づかされるのです。私たちは始めから佛の光を戴いています。その光に気づき信じて、共にこの苦難を乗り越えたいと念じています。

人生の終盤に臨んで (2011/05)

一つのことをやりとげられるかどうかは、やる気のあるなしが大きな比重を占めます。しかし、自分の忍耐と努力でやりとげたという気持ちがあると傲りにつながり、同じことをやらない人を責めます。私たちは我執という自分の物指しを振り回し、自分の経験した角度から物事を見てしまいます。たとえ家族であっても皆違って当たり前ののですが、そのことに気付かないで文句を言ったりグチをこぼしたりしてしまいます。人間のものの見方、評価の仕方はまことにいい加減なものです。身心共に健康な時や安定した生活の時は気付かないことが多いものです。自分の見えなかったものに気付いたり視界が広まるのは、やはり自分が少し辛い目に遭わなくてはならないようです。人は思うようにいかず行き詰まったり思いがけない事態に立ち入ると、嫌でも立ち止まらなくてはなりません。そして、ようやく今までの自分を振り返るのです。

最近、同じ町内の同級生だった友人が相次いで肺ガンや脳腫瘍で闘病生活に入りました。私にとってこの出来事は少なからず衝撃でした。私もしばしば立ち止まって今までの自分を振り返り、改めて気付かされたことがあります。それは、人生の終盤では財産も、経歴も、そして家族もこれを変えることはできず何の役にも立たないということです。どんな財産を積んでみても何ともならないし、ましてや経歴を出してみたところで変えられるものではないし、家族や周りの人がなんとかしようと思っても何ともならないのです。ベッドに横たわった人間にとっては財産も経歴も家族も根本的な救いとはならないのです。人間が避けて通れない死は、その人の財産も経歴も家族をも奪い去って、丸裸の一個の人間にしてしまいます。その時に最も大切なことは、その人が心にどんな宝を戴いているかです。奪われるものは持ち物です。私たちは持ち物があると幸せが叶えられるような気がしてそれを追い求めます。しかし、いざという時には置いていかなければならないものばかりです。私たちが追い求めている幸せとは陽炎のようなまことに儚いものです。では、心に戴く宝とは何なのでしょう。浄土の教えにそれが示されています。次回の法話ではそのことをお話したいと思います。

心に戴く宝 (2011/06)

前回に人生の終盤で大切なのは心に戴く宝であると述べました。では、心に戴く宝とはどのようなものでしょう。この法話をお読みの皆さまはお気づきになられているでしょう。それは佛教でいう「安心(あんじん)」です。

法然上人は『一紙小消息』の中で「…うけがたき人身をうけて、あいがたき本願にあいて、おこしがたき道心を発して、はなれがたき輪廻の里をはなれて、生まれがたき浄土に往生せん事、悦びの中の悦びなり。罪は十悪五逆の者も生ると信じて、少罪をも犯さじと思ふべし、罪人なお生る、況や善人をや。…」と述べられています。浄土の教えは、自分を見つめれば見つめるほど造悪・造

罪の情けない身であり、自分の能力、素質では佛さまに程遠い存在であり、まず自分は救われない人間であることを自覚し、そのことを素直に信じること「深心(じんしん)」を勧めます。これは自らを卑しめることではなく、本当の赤裸々な自分の姿を素直に見つめることの大切さを説くものです。そして、そのような救いがたい人であっても救うとされている「阿弥陀佛の本願」による救済を信じることを勧めます。大きな計らいの力によってただ今を生かされて生きていることに目覚めるのです。煩惱熾盛のこの身のゆえに自分の力では佛さまに近づくことも叶わないけれども、生かされていることに感謝し、佛さまの本願を信じ、自分のすべてを佛さまに任せきった静かな心「安心(あんじん)」を勧めます。この安心こそが人生の終わりに臨んで心に戴くべき宝なのです。信仰心とは「何かを信仰し、いのちの全うを心掛ける心」です。何を信仰するかは人それぞれに異なります。キリスト教徒は神でしょうし、佛教徒はお釈迦さまや観音さまであつたりと色々です。私がいう「信仰」とは何かを盲信したり狂信することではありません。自分が生かされていることへの感謝の念に根ざした穏やかで深い信心です。私たち念佛者は阿弥陀佛の衆生救済を深く信じ、その教えを日々の生活に活かすことを心掛けています。

人は思うようにいかず行き詰まると、嫌でも立ち止まらなくてはなりません。立ち止まって今までの自分を振り返ります。「一つの思いに囚われて堂々巡りをしていたのだなあ」と気づくのが私たちです。行き詰まった時に道を究めた先達(善知識)に問いかけることができると、信心の芽生えにより目を開かれることがあります。佛の教えに気づき、今までの「肉眼」では見えなかったものが「心眼」で見えるようになることがあります。私たちは何に出会うかで光りもすれば、自分の持っているわずかな光をも失うことがあります。善き教えに出会うことによって、たった一度きりの人生を輝きのあるものにしたいものです。念佛信仰の中でいのちの真実に目覚め、心の安らぎを求めましょう。心の安らぎは慈しみの心を生み、それがお互いを思いやり、敬いあい、信頼を熟成します。

たった一度きりの人生、後戻り、やり直しのきかない人生。内に佛と鬼があい潜む私たち。お念佛を通じて心の宝を獲得し、人生の終わりを輝きあるものにしたいものです。南無阿弥陀佛

精進努力 (2011/07)

生きるために私たちはいろいろなお方のお世話になります。私たちはまわりに借りを作りながら生きているのです。人ばかりでなく動植物を含め大自然からさまざまな恩恵を受けながら生かされていることを、私たちは忘れがちですが厳然たる事実です。だからこそ、この世にいのちを頂いたからには与えられた寿命いっぱい生き抜くことが大切である、と何度も述べてきました。生き抜くということは、これらの借りを少しでもいいから返しながら人生を全うすることにあるのでしょう。

私たち人間は弱いものです。独りでは生きていけないのに、自分の欲望に振り回されて迷いの世界に輪廻して抜け出すことがありません。ですから、自分の拠り所となるもの、信仰が生きていくために必要なのです。慈悲というものに気づき、永遠に連なるいのちを感得して生きることに喜びと充実感を得ることができれば、とりもなおさず佛と一体になった人生といえるでしょう。しかし、生きるということは一時や一日という短時間の動作ではありえません。不断にこの思いを持ち続け毎日を送るほかないのです。ですから、そういう生き方を精進努力というのでしょう。

しかし、現実とは口でいうほど簡単な生き方ではありません。どんな時でも無常を無常として受け止め、自分が今直面している無常の現実から目を背けずに生きに抜くことをお釈迦さまは「不死」という言葉で語っておられます。お釈迦さまや法然上人は、自分が生きているこの現実の人生をどうし

たら心安らかに生きていけるかを求め続けたお方です。お釈迦様は、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜に心が開け、それらに随順して生きることが不死であり涅槃であると言われます。私たち凡夫にはなかなかできる生き方ではありません。それどころか極めて難しい生き方です。が、精進努力…、習い性で努力に努力を重ねていけばいつの日か身体から頷く(体解:たいげ)ことができるのです。日々に念佛信仰を尽くし、精進しながら生きていく信仰生活を通して心の平安を手に入れるならば、その生活が不死なのでしょう。このことを頭で理解しただけでは単なる知識に過ぎません。さらに、どのように生きていけばよいかを問わねばなりません。それを学ぶのが佛教の教えなのです。何かに出会ったときに、「なるほどなあ」と經典の言葉に共感できるならば、そこに佛教の教えが生きているのです。今までは関係ないと思っていた佛の教えが「佛は独り我が為に法を説き給う。余人の為にはあらずや」と戴くことができるのです。

往生人 (2011/08)

前回に佛の道の歩みにも精進努力が必要であることを述べました。佛の道を最初から完璧な歩き方で歩めるわけではありません。つまりいたり、ひっくり返りそうになったり、後戻りしたりの繰り返しです。けれども、歩き続けているうちに「信」がしっかりしてきて、佛の道の意味が体解(たいげ:理屈を超えて体が反応する)できるようになってきます。そうすると、自分が生きていることに喜びが湧いてきて、生かされていることへの感謝の念がますます深まってきます。信仰の深まりとは、どれだけのことを成し遂げたとか、どれだけ立派な人になったかではなく、佛さまに身を託し佛法(真理)に心を開いてそれに随順しながら生きていく努力の深まりなのです。

人間があればこれ考えて細工をすることを止めて、本当の自然の働きに任せるというのが「他力」です。自我の思いを離れ、永遠(佛)に連なりながら真理に生かされ、真実を生き抜くことが往生人の生活です。往生人の生活は、理屈で裏打ちされた行動ではありません。教えを聴いて自然に働き、偏りのない目で生きた自然界を見ます。しかし、私たちには論理と合理的思考が染みついています。「これにはどういう意味があるのか、価値があるのか」「これをしたらどうなるのか」をまず問い、そしてある程度の結果が読めないと行動に移すことができません。ものごとの分析や先を読むことは大切な知的活動ですが、その活動の根底に佛の道を歩むという「信」のあることが往生人と私たちの違いでしょう。私たちが「他力」の本当の意味を知ることは意外と難しく、精進努力が欠かせないのです。

聖徳太子は「信は是義の本なり。事ごとに信あれ。其れ善惡の成敗は要ず信にあり。……」と述べられています。人としての正しい道(義)の元は「信」であり、言行一致の真実の信が何事につけ必要であると説かれています。信がなければ善惡の判断も意味をなさないと言われます。この文にはいろいろ解釈がありますが、私は太子の「信」を道徳的な意味合いよりも佛の道の教えを反映した信仰に近いものと考えています。自分の価値判断を離れて真実の価値に目覚めれば、お互いを思いやり、敬い合い、信頼し、全てのいのちを尊重して皆が安心して暮らすことができる世界となるでしょう。

縁 (2011/09)

縁とは佛教用語では「原因に伴って結果を生じさせる働き」ですが、一般的には「縁あって巡り

合う」や「金に縁がない」と言うように「ゆかり、つながりあい、関係」の意味に用いられ、また「縁が切れる」など「人と人のつながり」も意味します。この一般的な縁を佛教的意味合いから考えてみましょう。

私たちの人生はすべて何かとの出会いです。世に生を受けたときから、ヒトやモノとの出会いが私自身を創り上げてきたのです。もし私の周囲にモノがまったくなかったら、私の存在を確認する術がありません。もし私の周囲に誰もいなかったら、私というものをどうやって確かめることができるでしょうか。私たちは絶えず人、物に接触しながら、それらとの関わりで私自身を創り上げています。いいかえれば、周りとの関係性の網の中で自分自身を自覚することができるのです。

「人と人のつながり」という意味で「縁」を見ると、凡夫特有の要因がさらに働いてきます。人との関係には、自分と相手の(心理的)距離というものが絡んできます。「通じ合える、分かり合える」という関係は、お互いの距離が近く(親近感)て人をとても幸せにしてくれます。一方「全然通じない、分かってくれない」という関係は、お互いの距離が遠く(疎外感)て人を不幸にしまいます。はなはだしい時は敵意さえ抱きかねません。私たちはこの両極の間を微妙に揺れ動きながら、誰かと関わりを結びつつ自分という像を結んでいるのです。人と人とのつながりには心と分別がどうしても絡んできてしまいます。私たちにとって、近距離の関係が「楽」なら遠距離の関係は「苦」なのです。「親子の縁」は最も近距離のはずですが、昨今見聞きする事件には大海を隔てるほどの距離があるように感じられます。なぜ、このような距離ができてしまうのでしょうか。私たちはつい日常のなかで、自分の力に依って自分自身があると思い楽という結果のみに執着して、さまざまな縁によって今の自分があると気づきません。いわば自己中心に物事を見て、この人は分かり合えるから好き、こいつは話の通じない嫌な奴と関係を身勝手に規定して安心しているのです。心と分別に惑わされた「縁」によって心の距離を自ら隔てて苦を招いているのです。

「私は何者なのか」。私は私以外の誰かによって支えられて、私であることが分かるのです。

こころ (2011/10)

人間関係は勝ち負けではなく、自分の慢心に気づき、相手の声に耳を傾ける思いやりが大切です。自分と他人は違って当たり前ということを忘れ、自分の意見や思いが通らないのはおかしいと考えていないか自分の心を点検することが必要です。問題を抱えている人に対するとき、その問題を解決できればそれに越したことはありませんが、物事は矛盾をはらんでいて人生には不条理がつきものです。多くの場合、その人の抱えている問題の背景を推し量り、言いたい気持ちを抑えて聞き手になることが必要です。親と子どもの関係もそうです。違って当たり前です。しかし、親は子どもが良いことをすれば必要以上にほめたり、悪いことをすれば感情的に叱って子どもの成長の芽を摘んでしまったりします。親の心は子どもの様子を見て一喜一憂し、いつも揺れ動いていますが、これではいけないのです。親の存在とは、子どもが振り向けばいつも親はそこにいる、気がついてみればいつも親に見守られていた、なにもじたばたすることはなかったと気づかされるものでなければなりません。実はこれが佛さまなのです。親は子どもにとって佛さまの存在であるべきなのです。子と親の関係は凡夫と佛さまの関係と同じです。

人生に喜怒哀楽はつきものです。心に傷を抱きながらも毎日を生き抜いていかねばなりません。このような傷心の人生を生き抜くには、心の支えとなる信仰なしでは難しいのです。振り向けばいつも佛さまがいる、佛さまにいつも見守られていることに気づけば自分の心を見つめて傲り、高ぶりも

なくなります。信仰を持つことによって人は大きな力と生き甲斐を見いだし、性格さえも変えられます。喜怒哀楽の激しい人が信仰によって和顔愛語の人になり、皆から愛されるようになる。するとその人はより一層元気になり、気持ちが充実してより積極的に生きるようになる。このような例は少なくありません。体の健康だけを考えるのではなく、心の在り方を重視して心身ともに活性化することが大切です。メディアでは様々な健康法や健康食が紹介されていますが、心が健康に大きな影響を及ぼすことには触れません。現代社会は情報が氾濫しストレスの多い世の中です。心を病む人が増え続け、命を自ら絶つ人も一向に減る気配がありません。今の日本は信仰が人の健康に大きな力を及ぼすことに気づいていません。「病は気から」とも言います。身心共に健康な生活は心の在り方を切り離して考えることはできません。いつも佛さまに見守られているという心を持てるか否か、理屈ではありません。信心なのです。

こころと信仰 (2011/11)

私たちの人生は移りゆく四季に似ています。夢と希望に溢れる青年期は春、目標に向かって邁進する壮年期は夏、頂点を極め下り坂に入る初老期は秋、来し方を振り返り人生の全うを期す熟年期は冬といえるでしょう。人生花盛りの時もありますが、雨が降ったり、風が吹いたり、吹雪に遭ったり、時には天災にあったりなど、人生の四季の中では避けることのできない試練もあります。人生の中で有頂天になったり落ち込んだりと浮き沈みがありますが、そういう時に人がどう反応するかはこころの持ち方にかかっています。試練の受け止め方次第で、人生は大きく変わってしまいます。佛教でいう「こころ」とは、我々が日常使っている感情に重きを置いた意味よりもっと奥深く、物事を明らかに知る「慧」、それに基づき迷いを断ずる「智」、そして不動の心を確立する「信」を含み、その人の人格にも影響を及ぼすもので、「識」といわれるものです。ところが「識」は善にも悪にも働くのです。試練との遭遇を嘆き、自暴自棄の末に悪に走る識はあってはなりません。そのため佛教では清浄な心を強調し、善へ向かう識に重きを置くのです。

しかし、私たちにとって宗門に入り修行するのはむずかしいことです。だから、人生の試練を受けながらも力溢れ、安心した生活に入るために信仰が必要なのです。自分の思いや願いを叶えることが信仰ではありません。このような信仰には、自分が自分がという我執が付きまとっています。「これが自分」というものは実体として存在しない、あるのは色(身体)と識(広い意味でのこころ)であると佛教は教えます。あるのはただ自分とを感じる仕組み(こころ)であり、これが拭いがたい人間の根本煩惱(我癡、我見、我慢、我愛)であるといえます。私たちにとって煩惱を消し去ることは不可能なことです。煩惱をしっかりと自覚してコントロールすることはできます。釈尊の尊い教えは、受けがたき人身を受けたことを喜び、この人身を死すべき存在として諦観することによって沸き起こる他の生物への慈悲の行いです。このことを自分に「信」として確立し、それを信忍(正しく認識し保つ)し、信樂(しんぎょう:実践を願う)し、信欲(ますます精進する意欲が湧く)することが本当の信仰です。

佛教は人間の持つ煩惱、苦悩を人間の力で克服することを教えるものではありません。人間の弱さ、はかなさについての深い洞察に基づいているのです。与えられたいのちを与えられただけ生きて、またもとの大自然のいのちの中に還って行くことをすなおに喜べるこころが大切です。これはお念佛の教えでもあります。

信仰の姿 (2011/12)

私たちは尊い人間としてこの世に生を受け、先人の築き上げた世界の恩恵を蒙りながら百年に満たない人生を送っています。佛教は、受けがたき人身を受けたことをすなおに喜び、この人身を死すべき存在として諦観することを教えます。人の一生は刻々と変化し移ろいゆくものであること、すなわち無常・無我の教えです。しかし、人間は生に執着し、文明という名の下に快適さを限りなく求め続けています。現代の科学文明はさまざまな物を創り出し、私たちの生活環境をより快適なものに変えてきました。しかし、その作り変えた環境によって自然破壊を招き、他の生物を絶滅に追いやることとなっています。大自然の中に人間の生死を置いてみると一瞬でしかありません。その一瞬々が永遠に続くものと誤解し、人間の能力を過信し欲望に突き動かされているというのが今の私たちでしょう。与えられた命を与えられただけ生きて、またもとの大自然の営みに還っていくことを再認識すべきです。その動機づけとなるのが信仰です。

人々に親しまれた良寛さんの歌に信仰の姿を見ることができます。良寛さんは禅宗のお坊さんでしたが、宗派を超えて人々の心に訴える歌を数多く残されています。その中に、

他力とは野中に立てし竹なれや よりさわらぬを他力とぞいふ
 おろかなる身こそなかなかうれしけれ 弥陀の誓ひにあふと思えば
 極楽にわが父母はおはすらむ けふ膝もとへ行くと思へば
 草の庵に寝てもさめても申すこと 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
 かにかくに ものなおもいそ みだ佛の もとの誓ひのあるに任せて
 我ながらうれしくもあるか彌陀佛の いますみ国に行くと思へば
 良寛に辞世あるかと人間はば なむあみだぶつといふと答えよ

あれこれの分別や計らいを捨て、阿弥陀佛の本願にすっかり安住して身を委ねきっていればいいといわれています。我々凡夫の持つべき信仰が歌われています。これは我々の宗派の派祖、西山上人のいわれる「白木念佛」そのものです。

妄念とお念佛 (2012/1)

人間の形成には三つの要因があります。第一は生まれながらの素質、つまり遺伝的要因。第二に環境、第三は人との出会い。情操豊かな生活環境で育ち、良き師や先輩、仲間との出会いが遺伝的なものよりも人の形成に大きな影響を及ぼすことを誰もが気づいています。損得なしで付き合い共に影響し合うことで、生き方さえ変わることがあります。おそらく、他の生き物にはみられない人間のみが持つ特質です。しかし残念なことに、近年は人との関わりを敬遠し一面的なものの見方しかできない人がなんと多いことでしょう。このような人は、周囲の人や物事ばかりに目がいき善し悪しをあげつらいますが、自分は間違いないと思い込んで自分が対象になることはありません。自己評価が甘いのは凡夫の常です。しかし、世の中にはまま自己評価が低く謙虚な人が存在します。私は、菩薩とは他人の中でなく自分の内に煩惱の盛衰を見る人だと思っていますが、自己評価の低い人ほど佛さまの側近くに居られるように感じるのです。このような人は、思いがどのようにして湧き起こり、どのように広がり、どう消えるか、心の変化をじっと見る事ができています。つまり、自分の自然な姿、言い換えれば煩惱の盛衰が見えているのです。この世で行う人間の一切の行為に百パーセントの完全性を期すことはできません。どこか欠けています。それが人間なのだと佛教は教え

ます。煩惱があるからといって嘆くことも、悲観することもないのです。『徒然草』でも取り上げられている鎌倉時代の作といわれる『一言芳談抄』(作者不詳)に次のような逸話があります。

高野の明遍僧都、善光寺参詣のかへりあしに、法然上人に対面。

僧都問うて云く、「いかがして今度生死をはなるるべく候」

上人云く、「念仏申してこそは」

問給はく。「誠にしかり。但、妄念おこるをば、いかが仕候ふべき」

上人答へて云く、「妄念おこれども本願力にて往生するなり」

僧都「さうけたまわりぬ」とて、出給ひぬ。

上人つぶやきて云く、「妄念おこさづして往生せんとおもはん人、むまれつきの目鼻を取りすてて、念仏申さんと思ふがごとし」(小西甚一校注 ちくま学芸文庫)

法然上人は明遍僧都との問答の後で「妄念を起こさないで往生をしようと思う人は、持って生まれた目鼻を捨てて念佛を称えるようなもので、望んでもできることではない」と独語されています。煩惱熾盛の身であるからこそ阿弥陀佛の本願のお力によって念佛を申すのであり、一切の計らいはいらないという上人の教えです。

歌会始のお歌に思う (2012/2)

今年の宮中歌会始のお題は「岸」でした。両陛下は東日本大震災で大きな被害を受けた人々に思いをはせたお歌を詠まれました。陛下は津波の被災地をへりから見たときの印象を、皇后さまは未だ帰り来ぬ家族を待つ人の姿を詠まれました。

津波来(こ)し時の岸边は如何なりしと見下ろす海は青く静まる (天皇陛下)

帰り来るを立ちて待てる季(とき)のなく岸とふ文字を歳時記に見ず (皇后さま)

そして、1万8千首余から選ばれた10人の方々の歌の中に、

とび石の亀の甲羅を踏みわたる対岸にながく夫(つま)を待たせて (京都 大石悦子さん)

という歌がありました。

京都の市内を南北に流れる鴨川は兩岸に桜や柳などの木々が植えられ、水遊び、散策、ジョギングの場として市民に親しまれています。そして、川中には角石や亀の形をしたとび石を並べて対岸に渡れるようにしたところはいくつかあります。ところがとび石の間隔が意外と広く、子どもや女性は石を選んで飛び移るようにしなければなりません。歩幅の広い夫はさっさと渡り終えてすでに対岸に上がってこちらを向いています。しかし、歩幅の小さい大石さんは水に落ちないように石を選びながら、おっかなびっくり踏みわたるのでどうしても遅れてしまいます。夫はそんな大石さんを微笑みながら待っているのです。ほのぼのとしたとても幸せな光景です。大石さんはこの幸福感とともに、川を渡るということを人生になぞらえたのです。翌日のA紙に掲載された大石さんの言葉です。

「その時ふと思ったのです。彼岸と此岸(しがん)。生と死。今、待ってくれる人がいるとは、なんと

幸せなこと。この気持ちを歌い込みたい」と。

夫婦二人が手を携えて人生という川の流れを彼岸に向かって渡っているのです。先に彼岸に到達した夫が、こんどはやさしく此岸の私の歩みを見守り待っていてくれる、待たれているという幸せをかみしめたいと言うのです。清らかで心温まる歌ではありませんか。

大石さんは両陛下から歌の場所を聞かれて「出町柳です」と答え、また「対岸に待つという行為に死者と生者(しょうじゃ)の関係が重なってしみじみとした感情になったと申し上げました。とても共感していただきました」ということです。皇后さまのお歌の背景に相通じるものがあるから共感されたのではないのでしょうか。

戒と信（その１）（2012/3）

佛教には律と戒があります。律は集団を維持するための規則ですから、違反すれば罰則が科せられます。戒は自分で守るものですから罰則はありません。戒は自分の自覚、意思の問題なのです。佛教の教えからみればすべての人が最低限保持すべき戒は、七佛通戒偈、三帰依と五戒です。七佛通戒偈はこれまで何度も述べてきたのもうお分かりでしょう。

三帰依とは「南無帰依佛 南無帰依法 南無帰依僧」です。佛と法と僧を拠りどころとしますというもので、佛法僧を三宝といいます。「仏に帰依し奉る 法に帰依し奉る 僧に帰依し奉る」という三帰依文は、み佛であるお釈迦さまを敬い、その説かれた教えを大切に守り、そしてその教えを学ぶ人々の集まりを大切にいたしますと唱えているのです。三帰依文は一過性ではいけません。毎日唱え、身につけていくものです。日常生活の習慣にならないといけないのです。

次に五戒です。これは基本的には生活の規範です。私たちが正しく安心して生きるための大切な心がけなのです。乱れた生活の中では心を静め、正しい判断ができなくなってしまうからです。意識しないでも自然に守れるのが戒の理想の形です。が、私たちは意識して守ろうとするので、思い悩むことが多いのです。五戒とは不殺生戒、不偷盗戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の五つです。不殺生、生き物を殺してはいけません。これは簡単といえば簡単ですが、私たちは他のいのちを頂いて生きていますから難しいといえば大変難しいことです。百パーセント守るとすると私たちは生きていけないでしょう。不偷盗、盗んではいけない。簡単明瞭です。しかし、何でも自分のものにしたいという気持ちが起こります。独占は一種の偷盗です。自分というものは無い、諸法無我に気づかなければいけません。自分が自由にできるものは世の中には何一つないのです。不邪淫、夫婦以外とみだらな関係をもつてはいけません。誰もがわかっているけれど、往々にして忘れられています。不妄語、嘘をついてはいけません。人間は自分がかわいいから無意識に嘘をついて自分を庇ってしまいますが、自分には嘘はつけません。不飲酒、酒を飲むな。人にもよりますが、酔うと理性が麻痺して自分を見失い、まわりの人に迷惑をかけます。分かっているけど止められない、今も昔も守ることの難しい戒です。

佛教が私たちに求めるのはこれらの戒を厳格に守ることではありません。実践は難しいという自覚を持つこと、すなわち自分は凡夫であるという認識をしっかり持つことです。それが佛教信仰への道なのです。

戒と信（その２）（2012/4）

この法話をお読みの方は、「菩薩」というと観音菩薩や勢至菩薩などを思い出されると思います。「菩薩」は、生きとし生けるもののために生きるという思いを持ち、それを願として悟りを目指して佛道修行にはげむ求道者を表す言葉でもあります。このような菩薩が守る戒に三聚淨戒（さんじゅじょうかい）があります。西山上人の『観門義』に、一は摂律儀戒（しょうりつぎかい）、一切の諸の悪を断つという思い。すなわち諸悪莫作の意。四弘に約すると煩惱無辺誓願断の願。法身菩提の因。二は摂善法戒（しょうぜんほうかい）、一切の諸の善を行おうという思い、すなわち衆善奉行の意、四弘に約すると法門無尽誓願知 無上菩提誓願証の義。法身菩提の因。三は饒益有情戒（にょうやくじょうかい）、一切衆生を利益（りやく）しようという思い。すなわち三衆淨戒の本意。四弘の第一の衆生無邊誓願度の願。應身菩提の因。

しかし、菩薩になろうと思っているわけではない世の多くの人々に対しては、「諸悪莫作 衆善奉行」だけなら道徳と変わりがありません。この偈は「七佛通戒偈」にあり、その後に「自淨其意 是諸佛教」と続きます。自ら心を浄めることが諸佛の教えであると言います。しかし、自分でそういうことを考え、実行してみても、煩惱や我執によって事実を誤認し、ものごとの本質を間違えて理解し、苦しみの原因を作ってしまったのが私たち凡夫なのです。そのような私たちに、法然上人がお示しになったのがお念佛なのです。教えを頭で理解したり、自力行を始めたりするよりも先ずお念佛を称えることを教えられました。すると心に付着したいろいろな思いがはがれ落ちて、少しずつ心が浄化されて佛を思うようになります。また一方で、ここに抱いた佛をしっかりと確認させるのもお念佛です。お念佛を通じ、私と私を取り巻いている森羅万象に阿弥陀様の「いのち」（人智を超えた宇宙の真理）が映現している世界にであうことができるのです。浄土教では、「衆生の立場は心を空にして、我（自力）を捨てて信でいっぱいにすること、それが自分のみならず他にも利益をもたらす」が「自淨其意」の意味なのです。『観無量寿經』なら定善・散善を手段にしながら、三世をかけて心をきれいにすることになるでしょう。『俱舍論』にも「信者令心澄淨」という言葉があります。ここでも信が先で、戒の保持がそれに伴うことになっています。お念佛はこれらの背後に共通して流れる通奏低音のようなものでしょう。

西山上人が饒益有情戒を最も重んじられているのは、戒は自分だけがまもるのではなく、他もまもるように仕向ける働きがあるからです。三業をつつしんで自分を浄化することが、そのまま知らず知らずに周りを浄化することになるということなのです。また、周りの淨いものを見聞することが自分を浄化する働きをしてくれるのです。この世のものを浄土のたとえと見なさいという教えには、このことが含まれているように思われます。

戒と信（その３）（2012/5）

前2回で佛教の教えは信があつての戒であることを述べました。信のない戒は生活する上での道徳、社会規範と変わりがないとも述べました。しかし、まず理屈を理解しないと納得しない現代の私たちが信を持つことは非常にむずかしいことです。そのような私たちの爲にお念佛があると述べました。そこでまた新たな疑問、お念佛でなぜ信を持てるのかという疑問が起こるのです。

信仰とは学ではありません。佛教をはじめ宗教というものは実践なのです。今現在をいかに清浄に生きるかの実践なのです。ただその教えは言葉を使って伝えねばなりません。お釈迦さまが示さ

れた真実の一つですが、それを言葉で説明し解説するため、真実が様々な形で説かれるのです。そして、言葉で説かれたことが真実と思い込むことによって、時には論争になったり教団が分裂したりしてしまうのです。人が生きるという現実には、さまざまなことが繋がりあいもつれ合って成り立っています。私たちは頭の中で考えた理屈だけで人生を把握できないことを分かっています。しかし、理屈と現実を照らし合わせてその矛盾に悩み苦しみます。これを乗り越えるには実践しかありません。それがお念佛なのです。現実から逃げるのではなく、それをよく見つめ覚悟を決めてすべてを受け入れて、自らの計らいをなくすことが必要です。

菩薩になろうと思う人にとって浄土教は易行道とよく言われます。しかし、菩薩になるためには佛教の根本理念である「空」を頭でなく心の底で感じ取らねばなりません。そのためには私たちの分別、執着の基となっている「自分」あるいは「我」というものを捨てる、すなわち「無我」にならなければなりません。「我」は他人が捨ててくれるものではありません。難行であろうが易行であろうが、我を捨てる行為は自分でするしかないのです。佛道修行とは我を捨てるための実践ですが、これが修行者にとっても凡人にとっても大変むずかしい。「自分にはとても無理だ」と分かっても、清浄な生き方はしたいと願う気持ちが信の始まりです。お念佛を唱えるとは、まず信に至るための実践なのです。六字名号の意味は「阿弥陀さまに帰依します」ですが、阿弥陀さまを自分の生きている世界やその外に求め探しても実体として存在されものではありません。執らわれを超え清浄な生き方を求めて、念佛を実践している私たちの心の中に現れるのです。そのことが分かれば信の入り口です。佛教は信を「阿弥陀さまの大いなるいのちの中に生かされている」とか「すべてを阿弥陀さまにまかせる」という言葉で表現します。お念佛という実践があつて、信も戒も戒を守る自行も後からついてくるものと確信しています。

世情と宗教 (2012/6)

世界を見れば、あちこちで依然として戦争状態が続いています。また欧州では金融危機が深刻化し、足元の日本でも原発事故による電力危機が経済の先行きに影を落としています。テレビの時事解説番組では、このような状況を「神も佛もない世の中になりつつある」と報じていました。はたしてそうでしょうか。世の中の動きは人間自らが作り出しているとの視点が欠けています。人間にとって都合のいい神や佛は存在しません。原発事故にしても、平成 15 年に当時の東海学園大学教授村田光平氏が『行雲流水』の「原子力のタブーを打破しよう」という小論で原発の安全神話に警鐘を鳴らされていましたが、顧みられることなく今回の大事故に至っています。神や佛を持ち出す話ではありません。世の中の紛争、事件、事故などさまざまな問題は人間が自分の手で解決するしかないのです。しかし、ものごとの対応には基本理念が大切です。神や佛の教え、すなわち宗教の教えを基本理念として据えて物事に当たることが必要でしょう。不幸な出来事に出会ったときこそ、人間は宗教の教えに気付かねばならないと思うのです。

振り返ってみますと、今日の科学的なものの考え方では、姿のないもの、形のないもの、見えないものは対象化できないため、存在しないと同等と言われます。そうして、このような合理的・理性的な知恵を磨いて快適さと便利さを追い求めてきたのが近代文明です。その過程で、自分の心としっかりと向き合うことをないがしろにしてきたのではないのでしょうか。自分にとって都合のよい出来事は感謝して喜べますが、不都合なときはつい愚痴をこぼしがちです。他を責めたり、人のせいにしたり、あげくには人間の力では及ばぬこととして「想定外」で片付けてしまう、佛教の教えからみればまさ

に自我を押し通す思い上がった慢心です。他人のせいにせず先ず自分の足りなかった点を省みる（懺悔）、そして他との和合に努めどんなときにも感謝の念を持てこそ慈悲の実践なのでしょう。佛の教えは「生きる道」です。私が自ら歩く道です。自分自身を知り、他者の思いに心を遣り和合して、社会の規範に即することができるようにならねばと思うのです。

法話とは (2012/7)

「読み易くてなるほど」とうなずける法話を目指していますが、言葉で表現するのはなかなか難しいものです。また、読者の知りたいことも様々で、ある人には興味深い話も他の人は無関心ということもあります。今までに述べたことですが、信仰は実践であり学問ではありません。当然ながら法話も信仰実践のための一助となるもので、難しい理屈を振り回す学問であってはなりません。純粋な学問は論理の積み重ねで真実を明らかにするものですが、難解な用語が並び平均的な知性では読解できないような専門書も少なくありません。「〇〇入門」という解説書も何のために何が説かれているかより、どのように理解するかを主軸にしたものも多く、しかも「どのように」の説明は学問的であったり主観的であったりで、実際の信仰とかけ離れていることが多いのです。最近つぎのような一文を見かけました。

……「空」は既に悟りを得て知られた結論に過ぎない。我々が渴望しているのは、世の中を見切る知恵を獲得することであり、如何にして悟りに至ることができるのかである。見切って得られた結論「空」と見切る知恵との間には、天と地ほどの差がある。……

この一文は、「空」という概念の解説でなく実践を説くべきと述べており、我々佛教者が法話で陥りやすい盲点を指摘しています。一般読者には理解できない抽象語、難解語に満ちた専門的解釈の受け売りではなく、これらの研究を拝して平易で客観的な文によって佛教の教えを説かねばと思うのです。信仰に裏打ちされた知恵や感受性というのは、通俗凡庸とみなされることを意に介さないものです。教えを聞いてそれを実践することは喜ばしいことです。人がそれを認めてくれなくても嘆かない。嘆いている段階では、まだ佛の教えと出会っていないのです。しかし、いろいろ精進努力をしているうちに、ふと心の底から気づくことができる。これが教えを学ぶということでしょう。結論だけ知って、それを振り回しているのでは本当の信仰とはいえません。私たち宗教者も含め、今一度反省すべきことではないでしょうか。